英国における日本庭園の変遷の過程と特徴に関する研究

熊倉　早苗

2021

学位論文　博士（農学）

英国における日本庭園の変遷の過程と特徴に関する研究

2021 年

京都大学大学院 農学研究科

森林科学専攻　環境デザイン学分野

熊倉　早苗

目次

第 1 章　序論 1
1－1. 国内外の日本庭園の定義 1
1－2. 海外の日本庭園 5
1－3. 英国人にとっての日本文化と植物 6
1－4. 英国 England の日本庭園の特徴と研究の必要性 12
1－5. 本研究の目的および論文の構成 12

第 2 章　英国の園芸雑誌ガーデナーズ・クロニクルからみた日本庭園に関する記事内容の推移 17
2－1. はじめに 17
2－2. 研究方法 20
2－2－1　Gardeners' Chronicle の Japan 関連記事の変遷 20
2－2－2　Gardeners' Chronicle の Japan 関連記事の属性分類 20
2－2－3　Gardeners' Chronicle の Japan 関連記事の日本庭園に関する記事の分析 20
2－3. 結果 21
2－3－1　Gardeners' Chronicle の Japan 関連記事の変遷 21
2－3－2　分類属性ごとの記事の特徴 23
2－3－3　日本庭園に関する記述の分析結果 27
2－4. 考察 29
2－4－1　19 世紀から 20 世紀初頭の英国における日本庭園の理解 29
2－4－2　英国における日本庭園理解の変遷 31
2－5. 本章のまとめ 32

第 3 章　日本庭園に関心がある英国人と日本人の日本庭園に対する印象の比較 35
3－1. はじめに 35
3－2. 研究方法 38
3－2－1　アンケート調査の内容 38
3－2－2　アンケート結果の分析方法 44
3－3. 結果 45
3－3－1　3 群のデータ比較の分析結果 45
3－3－2　植物写真から得られたデータの比較 49

3－3－3　空間要素写真から得られたデータの比較 50
3－3－4　空間要素に関する各群の階層クラスター分析 55
3－3－5　日本庭園の「イメージ」の分析 57
3－4．考察 59
3－4－1　3 群間の比較 59
3－4－2　英国の日本庭園の存在価値と維持管理・修復に向けて 63
3－5．本章のまとめ 64

第 4 章　英国 England における 19 世紀後半から現在に至る日本庭園変遷の過程と特徴 69
4－1．はじめに 69
4－2．研究方法 71
4－2－1　英国 England の日本庭園の調査対象の抽出 71
4－2－2　現地調査 72
4－2－2－1　庭園構成要素の記録 72
4－2－2－2　庭園管理に関するヒアリング調査 73
4－2－3　庭園形式と作庭年代による分類と地域的分布 73
4－2－4　作庭年代別の庭園の敷地と日本庭園の配置の比較 74
4－3．結果 74
4－3－1　英国 England の日本庭園のカテゴリー別にみた特徴 74
4－3－2　現地調査による現況分析 81
4－3－2－1　各庭園の状況 81
4－3－2－2　庭園管理に関するヒアリング調査 90
4－4．考察 90
4－4－1　英国 England の黎明期に作庭された日本庭園の特徴 90
4－4－2　現地調査からみた英国の日本庭園の現状 92
4－5．本章のまとめ 93

第 5 章　総合考察 97
5－1．各章の研究成果 97
5－2．英国の日本庭園を維持管理するために求められること 100
5－2－1　英国において日本庭園が根付いていった過程 100

5－2－2　現存する日本庭園の歴史的背景と文化的価値を見出すことの重要性 101
5－2－3　現地調査に基づく適切な管理と指導の重要性 102
5－3. 本研究のまとめと今後の課題 104

謝辞 107

第１章　序論

1－1　国内外の日本庭園の定義

1851 年英国ロンドンで世界初の万国博覧会が開催された（表 1－1）。これを皮切りに欧米諸国を中心に万博ブームが起こった。日本は 1867 年の第 2 回パリ万博から参加し，1873 年のウィーン万博では日本庭園が初めて造られた（表 1－1，図 1－1，図 1－2）。これは日本人が海外で造った日本庭園として最古の歴史的なものであった[01)]。これ以前の鎖国下にあった江戸時代の間，出島の三学者と呼ばれる E.ケンペル[02)]，C.P.ツンベルク[03)]，P.F.v.シーボルト[04)]は，日本で植物学を中心に博物学研究をおこない，多数の植物標本を持ち帰ってヨーロッパに紹介した。日本開国後は，プラントハンターの来日が急増し，日本の珍種や有用な植物が注目された。1860 年代には，英国園芸雑誌『Gardeners' Chronicle』[05)]に J.G.ヴィーチ[06)]の「Extracts from Mr. Veitch's letters on Japan」が 1860 年から 1862 年に複数回掲載された。それらの内容は，長崎から北海道までの旅行記であり，植生と多くの品種を記載し[07)]，針葉樹や 40 種以上の低木の種を採取したこと[08)]，江戸滞在時には富士山に行ったこと[08)]，江戸の園芸店と植物園を訪問したこと[08)]，また，モモ果実棚の説明とユリの球根を持ち帰ったこと[09)]などが記載された。同じ頃，R.フォーチュン[10)]は，『Yedo and Peking』と題した旅行記で，自然からの産物，農業，園芸や貿易，観賞用植物も大変興味深いこと[11)]，日本の春の風景が一番美しく，サクラやツツジが美しいこと[11)]などを述べている。1877 年には，建築家の J.コンドル[12)]が来日してその記録を投稿[13)]している。

諸外国において，どのような経緯で日本庭園が造られて来たかを知ることは，日本文化の海外への普及や日本理解の過程を知る術として意義があり重要なことであると考えられる。中村・尼﨑[14)]は，「世界の庭園は芸術的な様式によって，古代オリエント式，ギリシャ・ローマ式，中世ヨーロッパ式，イスラム・パティオ式，イタリア・ルネサンス式，フランス幾何学式，イギリス風景式，中国式，そして日本式などに分類される。これらはさらに整形式と風景式に大別されるが，風景式に入れられるのは，イギリス風景式，中国式，日本式の三つであると言ってよい」と述べている。

「日本庭園」の定義に関しては，龍居[15)]は，「本質をついた定義は確立されていない。だからこそ造園と庭がまったく別々のものといわれたり，一緒のことと考えられたりする」と記している。一方で上原[16)]は，「日本庭園(Japanese garden）とは，日本に見

られる庭園の意，古式を守ると守らざるとを問はない，一般の名称，しかし無意識に日本式庭園を意味している場合が多い。日本式庭園(Japanese traditional garden)とは，日本式の庭ともいう。日本の庭園の古式，伝統を守ってつくられた日本庭園をいう」と定義している。また，鈴木[17]は，「「日本庭園」と「日本式庭園」の使用区別について上原[16]を規範としつつ，またグローバルな意味での「日本庭園」の用語法が大切であるとの前提に立って，①日本庭園は，日本人が国内で作庭した庭で日本の伝統的形式以外のものの総称。また，日本人が海外で作庭した伝統的形式による庭園も，厳密には「日本式庭園」だがこれまでの一般的使用に同じく「日本庭園」の用語使用も認めるべきであろう。②日本式庭園は，日本国内・国外を問わずどこで作庭されようと，日本人・外国人を問わず誰が作庭しようと，日本の伝統的形式をもった庭園は「日本式庭園」と呼ぶべきである。③日本風庭園は，外国人が国内，国外で「日本式庭園」を意図して作庭したものの中でも，その外観などから日本式庭園とは正式に言えないもの，また，日本庭園を意識して作庭されたものを称して「日本風庭園」としたい。」と定義づけている。さらに，英国の日本庭園研究者 Raggett[18]は，「At the period from 1850-1950 I decided that historically a garden would be what I described as a Japanese-style garden if it had been described by the owner/maker/designer at the time as Japanese, the Japanese garden, of Japan etc. As then in historic terms they saw the garden as being influenced by or representing Japan – of course there were then a number of signifiers that helped people with this identification – though they were not always from Japan and could be made in the UK」と言及している。現在，海外では一般に日本庭園を「Japanese Garden」と呼んでいる。本論文では，既往研究を踏まえた上で，総称にはグローバルな意味での「日本庭園」の用語法を前提とし，英訳として英国の日本庭園を「Japanese-style Garden」と定義することとした。

表１－１　江戸期以降の英国及び日本での出来事と博覧会一覧

西暦	和暦	海外の万国博覧会	万国博覧会と日本	英国でのできごと	日本でのできごと
1613	慶長18			英国、平戸に商館を建設して貿易を開始→1623年退去	
1639	寛永16				日本鎖国→対外貿易を長崎でのオランダ商館と中国船との貿易に制限
1772	安永元			チェンバーズ（W. チェンバーズ）『Dissertation on Oriental Gardening』刊行	
1804	文化元			園芸協会設立，（現）王立園芸協会Royal Horticultural Society設立	
1841	天保12			英国園芸雑誌『Gardeners' Chronicle』刊行開始	
1851	嘉永4	第1回ロンドン万博			
1853	嘉永6	ニューヨーク万博			ペリー来航
1854	嘉永7				日本開国
1855	安政2	第1回パリ万博			
1859	安政6				神奈川・長崎・函館が開港
1860	安政7			1860ヴィーチ（J.G.Veitch），1860~61フォーチュン（R.Fortune）来日	
1862	文久2	第2回ロンドン万博	日本からの正式な出展はなかったにも関わらず，日本の工芸品が展示されていた（英国初代公使収集品）		万博の開会式に来賓出席，竹内遣欧使節団（総勢38人），福澤諭吉も含まれていた
1863	文久3			フォーチュン『Yedo and Peking』刊行	
1867	慶応3	第2回パリ万博	万博正式初参加，幕府，薩摩・佐賀両藩が出品，日本からの出展は珍しがられ，ジャポニズムの契機となった		渋沢栄一，万博の御勘定格陸軍附調役（会計係兼書記）として万博に参加
1873	明治6	ウィーン万博	日本館の周辺に日本式庭園を初めて出展（神苑風庭園）→イギリスのアレキサンダー宮殿の庭園へ移設		日本政府が初めて公式に参加，出品した万博
1876	明治9	フィラデルフィア万博	日本館（即売会場）で美術工芸品などと共に庭園を出展		
1877	明治10			コンドル（J.Conder）来日，1877~78マリーズ（C.Maries）来日	
1878	明治11	第3回パリ万博	美術工芸品他，茶室や日本庭園を持つ日本式家屋を建て参加		
1880	明治13			『Gardeners' Chronicle』マリーズと岩槻小三郎園芸店での記念撮影を掲載（横浜にて）	
1889	明治22	第4回パリ万博	盆栽，ソテツ，ユリ他出展即売		
1890	明治23				ヨコハマナーサリー（横浜植木商会）設立，サンフランシスコ支店開設
1893	明治26	シカゴ万博	鳳凰殿を模した建物と日本庭園出展		コンドル『Landscape Gardening in Japan』刊行
1900	明治33	第5回パリ万博	法隆寺金堂を模した建物と日本庭園出展		
1904	明治37	セントルイス万博	金閣寺を模した建物と日本庭園出展		
1907	明治40			ヨコハマナーサリー（横浜植木商会，ロンドン支店開設	
1910	明治43	日英博覧会	会場（現Hammersmith Park）に甲園（平和園）と乙園（浮島園）出展		
1928	昭和3			原田治郎『The Garden of Japan』最も早い英語での日本庭園論が英国で刊行	

※佐藤[1)]，鈴木[26)]を参照，　国立国会図書館博覧会年表[19)]に加筆

※ケンペル[2)]，ツンベルク[3)]，シーボルト[4)]がそれぞれ1690～1692年，1775～1776年，1823～1829年に出島に滞在

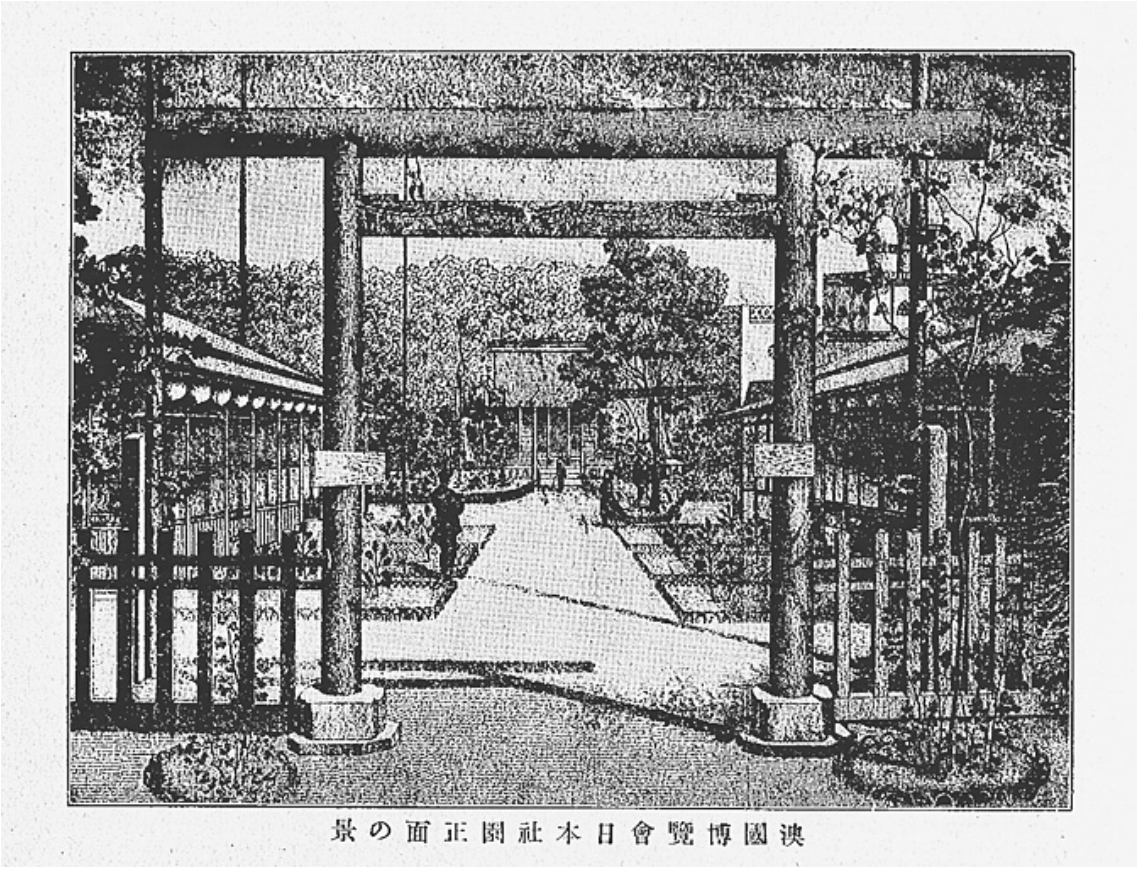


図１－１　1873 年　ウィーン万博　日本庭園・神社 [20)]

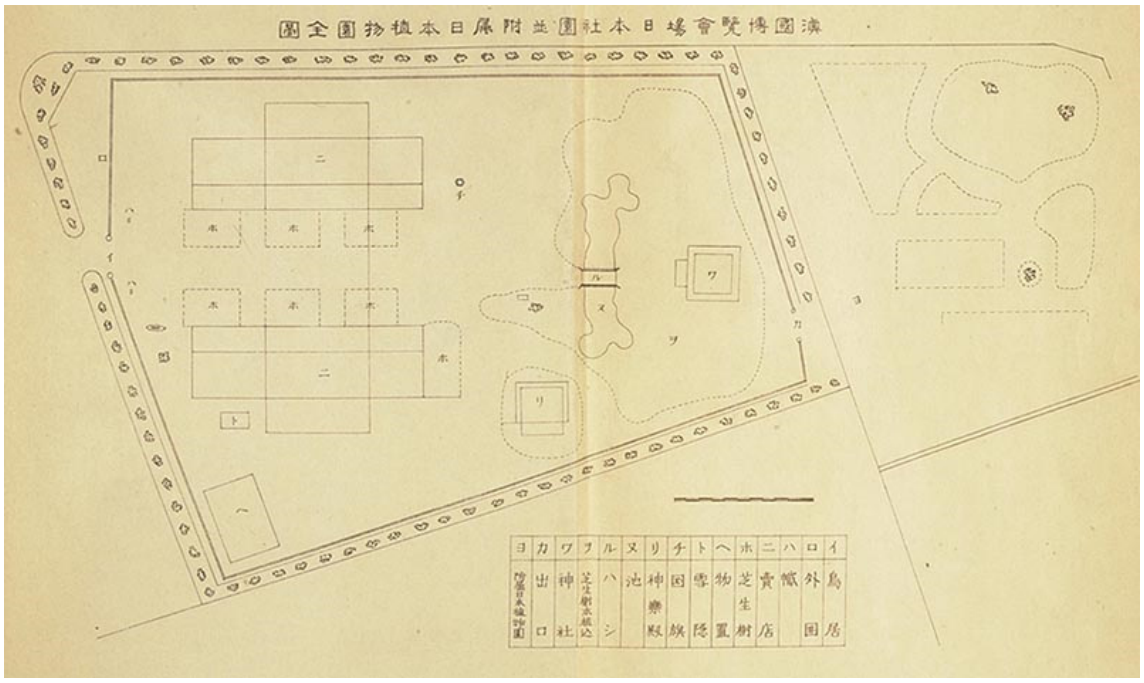


図１－２　1873 年　ウィーン万博　本館日本社園付属日本植物園全図 [21)]

1－2　海外の日本庭園

現在，世界には 500 以上の公開されている日本庭園が現存する [22]と言われている。確認されているものを地域別にみると，北アメリカ 169 庭園，ラテンアメリカ 54 庭園，オセアニア 46 庭園，アジア 130 庭園，アフリカ 7 庭園，さらにヨーロッパ 156 庭園で，アメリカ合衆国が圧倒的に多いことが認められる [22]。その作庭事由でもっとも多いのは，姉妹都市間をはじめとする日本の自治体と海外の都市，地区の友好・親善締結を記念したもので 152 件，全体の 35%を占めている [23]。

アメリカとヨーロッパを比較すると，各地域の日本庭園の起源については違った背景が考えられる。たとえば，アメリカの日本庭園の傾向を検討すると，日系人社会による園芸・造園業の発展や，日本文化の積極的な紹介が裾野を広げたことが考察されている [24]。ヨーロッパの日本庭園は 156 庭園 [22]（表 1－2）が確認されている。17 世紀末にはシノワズリー（中国趣味）の庭園が流行し，フランスや英国の庭園に中国式庭園の要素が導入された [25]。その後，19 世紀後半に相次いで開催された万博の中でもパリ万博で紹介された日本美術の影響などによって，東洋の異文化を受け入れるオリエンタリズムが隆盛となった。既往研究で鈴木 [26]は，「万博では，毎回，日本の展示施設には様々な美術工芸品などと共に庭園が出展され，欧米におけるジャポニズムを引き起こした」と海外の日本庭園と万博との関係性について言及している。

しかし，近年では完成後の管理指導や現地の維持管理のノウハウ不足により，修復支援が必要な日本庭園がみられる [27]。また，保存と修復には現地の歴史的背景を踏まえた整備方針が必要だと考えられる。土沼・鈴木 [28]が北米地域の日本庭園の事例から述べているように，「造り手としての日本側にも責任があり，管理運営や文化紹介，手法提供を怠ったことが原因」である。また一方で土沼・鈴木 [28]は，「現地の民間団体やボランティアの長年の努力により，うまく維持，運営され日本文化の発信地になっている日本庭園も見られる」さらに，「そうした維持管理と管理運営プログラムに関するノウハウを整理し，海外に向かって再発信する役割が日本の我々に求められている」と言及し，海外の日本庭園の新たな管理について提案している。このような中で，アメリカとは違った背景を持つヨーロッパでは，どのような日本庭園の傾向と現状がみられるのかに関する考察が必要であると考えられる。

国名	日本庭園数
Austria	7
Azerbaijan	1
Belgium	3
Czech Republic	2
Denmark	2
Finland	1
France	27
Germany	36
Holland	9
Hungary	4
Ireland	3
Italy	4
Lithuania	1
Monaco	3
Norway	2
Russia	5
Spain	1
Sweden	4
Switzerland	4
Turkey	6
Ukraine	1
United Kingdom	30
ヨーロッパ内合計	156

表 1－2　ヨーロッパの日本庭園数

（海外の日本庭園（2021）東京農業大学国際日本庭園研究センター[22]情報を基に作成）

図 1－3　1910-11 年 Yokohama Nursery Company[34] カタログ（現・横浜植木株式会社，輸出用冊子）

1－3　英国人にとっての日本文化と植物

プラントハンターの活躍が顕著にみられた英国について，白幡[29]は，「1772 年キュー植物園から派遣された最初の公式プラントハンターは，イギリスの国益の観点から計画した世界植物収集戦略の一環として位置付けられた。当時，植物は，薬品，食料，建材等々，多くの分野で有用な資源として，現在よりはるかに多様な意味をもった国家的戦略物資であった」と考察している。その頃，1930 年に W.チェンバーズ[30]は，英国様式の庭園を否定的に評価して中国の庭園を肯定的に描写した『東洋の庭園に関する考察 Dissertation on Oriental Gardening』[31]を出版し，日本庭園について考察している[31) 32)]。

日本では，開国（1854 年）後，1859 年には神奈川・長崎・函館が開港され，プラントハンターが次々と来航した。英国四大週刊園芸雑誌の一つである，『Gardeners'

Chronicle』の記事をみると，1849 年に初めて日本のユリについての記事[33]が認められ，1856 年の記事[34]には「very remarkable trade catalogue」と日本植物のカタログ（図 1－3）に感銘したことが記載されている。また 1860 年には，J.G.ヴィーチの手紙が掲載され，長崎から横浜に移動し植物採集をおこない，「Fuji Yama Pines」の種を採取したことが記載されている[07]。これらのことから，当時英国人は日本の植物に大変興味を持っていたことが窺える。また、プラントハンターの R.フォーチュンは，『江戸と北京 Yedo and Peking』（日本と清国の首都を中心に植物採集旅行をした見聞録）[35]で，日本の珍種や有用植物のほかに風俗習慣や日常生活について詳しく記述している。さらに，1877 年～1878 年に来日したプラントハンターの C.マリーズ[36]は，1880 年 4 月 24 日の『Gardeners' Chronicle』の記事[37]で，「Mr. Kosoburo's nursery at Yokohama」，「his family surrounded by their floral treasures」と記述し，園芸店でおこなった記念撮影を紹介している（図 1－4）。この Kosoburo について，小原[38]は「明治初期に横浜で花卉類を取り扱っていた邦人の植木屋は南区中村町の地蔵坂から相沢に通ずる道路沿に営業していた」と述べ，当時の横浜の主な植木屋として 7 名の名前をあげているが，その中に，岩槻小三郎の名前が記述されていることを記している。さらに，「その頃の植木屋は造園師としての性格を強くもち，単に植木の手入れだけでなく，作庭や簡単な建築も手掛けていた」，「横浜が開港した後，居留地の外国人の中で日本の国産植物種苗の商品価値を認めて，貿易商品として輸出した」と述べている。このように，英国における日本の理解においては，プラントハンターを通じた，植物に加えて文化や風俗習慣などの伝聞が大きく関与していると推察できる。日本からの働きかけによって，1907 年（明治 40 年）には，ヨコハマナーサリーがロンドンに支店[39]を開設しており（現・横浜植木商会株式会社），このことは『Gardeners' Chronicle』でも紹介されている（図 1－5）[40]。また，1910 年には日英博覧会がロンドンの現 Hammersmith Park で開催[41]されている。これは親善博覧会ともいうべきものであり，日本庭園が作庭（図 1－6，図 1－7）[42]され現在も一部（図 1－8，図 1－9）が残されている。このように，英国は，プラントハンターにより植物が紹介される中で，博覧会を介して日本文化の理解を深めていった国であったと考察できる。

図１－４　A Japanese nursery garden, Gardeners' Chronicle, 1880 年 4 月 24 日号 [37]

岩槻小三郎園芸店

Too often in gardens is it the rule to plant freshly-acquired plants in any spaces which happen to be most readily available. Mr. Kingsmill's method is to specially prepare sites for all newcomers according to what is known of their natural requirements, and hence the successes are numerous and the failures few.

In the greenhouses are many curious and pretty plants. Overhead are suspended graceful plants of Ceropegia Woodii, C. debilis, &c., and on the roof Lapageria rosea is in fine bloom. Urceolina pendula has its pretty drooping yellow and green flowers; the old Nierembergia gracilis and many other pretty old garden plants are in bloom. In an unheated frame Todea superba is growing well, and in all sections of hardy plants a great number of aliens have been successfully naturalised. *J. O'B., September.*

FIG. 121.—VIEWS IN THE YOKOHAMA NURSERY COMPANY'S GARDENS, JAPAN.

A JAPANESE NURSERY.

(See fig. 121, also Supplementary Illustration.)

THE nursery business between this country and Japan has considerably increased in recent years, but it is likely to extend to greater proportions as the means of communication are improved. One of the principal horticultural exports is that of flowering bulbs, particularly species of Lilium. In our Supplementary Illustration is shown a portion of a field in the nurseries belonging to the Yokohama Nursery Company devoted to the culture of Lilium speciosum rubrum var. magnificum, a variety that was introduced by this firm, and one to which the Royal Horticultural Society's Award of Merit was awarded on September 29, 1903. It is remarkable for the rich carmine colouring of the flowers, their large size, and the vigorous and erect flower-spikes. Every care is exercised to keep the variety true to type, and workmen may be seen in the illustration engaged in marking inferior forms that will eventually be weeded from the stock. The bulbs are packed with care in a reddish earth, in which material they will travel well for long distances. Only the best bulbs are exported; the smaller ones are planted in the nursery for another year. Lilium bulbs form an article of consumption in Japan, but we suspect it is only inferior varieties that are thus employed.

The portion of the nursery illustrated at fig. 121 conveys some idea of the extent that old specimen Conifers, Wistarias, Acers, Cycads, and other species are cultivated. They are grown chiefly for export, and Europeans visiting Japan are continually purchasing specimens to add to their collections at home. Pot-grown trees rarely suffer in transit to this country if imported in the spring of the year.. The Wistarias are very tastefully arranged when in flower, each specimen being isolated in order to display its hundreds of long pendant racemes to the best advantage. We are indebted to Mr. A. Dimmock for the photographs.

THE AURICULA.

IT is a matter of surprise to me that there should be so much ignorance not only of the properties of the Auricula, but also of the system of culture to be followed in order to obtain the best results. I have come to the conclusion that the culture and nature of the Auricula is understood by very few persons.

In the early years of the nineteenth century, and down to about the year 1850, the Auricula was much valued and rather widely cultivated. The history of the Auricula has been much written about from the time of Clusius, who entered the service of the Emperor Maximilian II. of Austria, in 1573, and 13 years later Clusius published a valuable book, the '*Rariorum*

図１－５　Yokohama Nursery Company's Garden, Japan [40]

Gardeners' Chronicle, 1908 年 10 月 17 日号

図１－6　日英博覧会　甲園（平和園）Garden of peace

（日英博覧会記念絵葉書コレクション，1910 年）[42)]

図１－7　日英博覧会　乙園（浮島園）Garden of the Floating Isle

（日英博覧会記念絵葉書コレクション，1910 年）[42)]

図 1－8　現 Hammersmith Park Japanese Garden

(2019 年 7 月 25 日撮影)

図 1－9　現 Hammersmith Park（1910 年日英博覧会　乙園（浮島園）Garden 跡）

(2019 年 7 月 25 日撮影)

1－4　英国 England の日本庭園の特徴と研究の必要性

英国における日本庭園の広まりには，他国とは異なり，19 世紀のプラントハンターの活躍や，園芸学の発達による園芸業の成長という背景が考えられる。英国文化に日本庭園が根付いた歴史的背景や社会状況については未だに十分に分析されない状況であるが，英国における日本庭園継承の方向性をより深く考える上ではこれらを分析する必要性は高いと考えられる。

そのため本論文では，英国で 19 世紀後半から現在までの間に作庭された日本庭園の現状とそれらの構成要素を考察するための研究をおこなうこととした。現地調査については，英国でも特に England を対象におこなった。調査地域を England に限定した理由は，英国の首都ロンドンを含んでいること，19 世紀以降も産業の中心地域であったこと，そして地域を限定することで庭園の文化的背景や関連性が明確になると考えたためである。

1－5　本研究の目的および論文の構成

本研究は，英国における日本庭園の起源と変遷について，「英国の園芸雑誌ガーデナーズ・クロニクルからみた日本庭園に関する記事内容の推移（第 2 章）」，「日本庭園に関心がある英国人と日本人の日本庭園に対する印象の比較（第 3 章）」および「英国 England における 19 世紀後半から現在に至る日本庭園変遷の過程と特徴（第 4 章）」をそれぞれ解析し，総合的な考察によって，英国文化に広がった日本庭園観を分析し，英国のみならず，海外の日本庭園の歴史的継承と保全，維持管理の方向を提案する（第 5 章）ことを目的とした。研究は 5 章から構成されている（図 1－10）。

第 1 章では，海外の日本庭園の定義および歴史，英国における 19 世紀のプラントハンターによる植物を通した文化交流，博覧会等での日本文化の紹介やそれらに関する背景と先行研究を整理し，研究全体の目的を設定した。

第 2 章では，19 世紀の園芸学の発達とプラントハンターの活動を概観し，英国園芸雑誌の一つである『Gardeners' Chronicle』[05]に認められる日本庭園に関する記事内容の 167 年間の推移を考察した上で，各時代背景に基づいて英国における日本庭園の変遷を明らかにすることを試みた。

第 3 章では，日本庭園に関心がある日英両国の関係者に対しておこなったアンケー

ト調査結果の比較により，英国人の日本庭園に関する意識を考察した。現在の英国人の日本庭園に対する印象を把握することは，英国における日本庭園の継承と日本文化に対する理解の現状を知る意味で重要であり，海外の日本庭園修復にあたっては，それぞれの庭園の変遷と，現在に至る経緯を理解した上での修復・維持管理が重要であると考えられたためである。

第 4 章では，19 世紀後半から現在に至るまでの英国 England の日本庭園の変遷を文献調査と現地調査からまとめた。具体的には，選択した英国の日本庭園の歴史的背景，作庭時期，庭園の特徴を考察した。さらに，海外における日本庭園に関する認知度の低迷や，ノウハウ不足による管理体制の不備などに警鐘が鳴らされている現状の中で，英国の日本庭園の現状や特性を抽出し，維持管理の今後の方向性を示すことを試みた。

最後に第 5 章では，第 2 章から第 4 章までの結果を総括し，得られた英国の日本庭園に関する知見に基づき，英国の日本庭園の歴史的継承と保全，維持管理の方向について考えられる重要な事項の検討をおこなった。

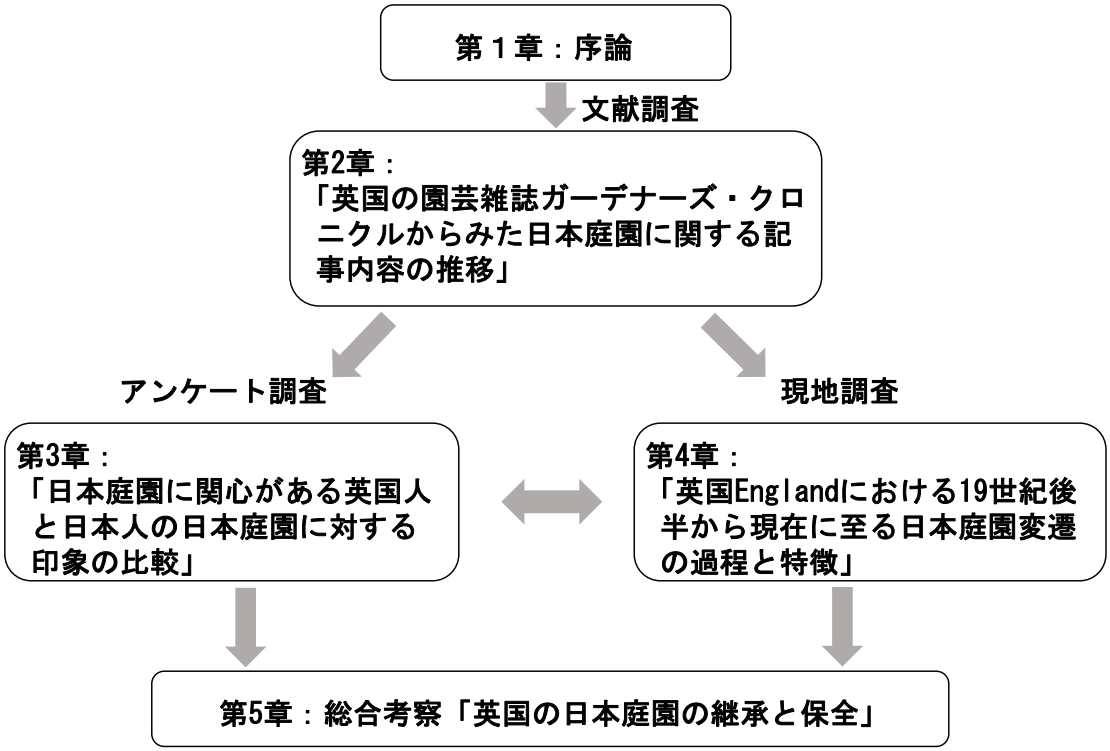


図 1－10 本論文の構成

補注及び引用文献

01) 佐藤昌　(1986) : 外国における日本庭園－初期の造園－ : 造園雑誌 49(3), 167-188

02) E. Kämpfer (1651-1716) ：医師・博物学者，1690～1692 まで出島に滞在

03) C. P. Thunberg (1743-1828) ： 医師・植物学者，1775～1776 まで出島に滞在

04) P. F. v. Siebold (1796-1866) : 医師・博物学者，1823～1829 まで出島に滞在

05) Gardeners' Chronicle (1841-1967) : Purnell & Sons Ltd

06) J. G. Veitch (1839-1870) ： 園芸家・プラントハンター

07) Gardeners' Chronicle (1860) : Purnell & Sons Ltd, 1126

08) Gardeners' Chronicle (1861) : Purnell & Sons Ltd, 24-25, 97, 120

09) Gardeners' Chronicle (1862) : Purnell & Sons Ltd, 44

10) R. Fortune (1812-1880) ：植物学者・プラントハンター

11) Gardeners' Chronicle (1863) : Purnell & Sons Ltd, 391, 486

12) J. Conder (1852-1920) ：建築家

13) Gardeners' Chronicle (1896) : Purnell & Sons Ltd, 530

14) 中村一・尼崎博正共著 (2001) : 風景をつくる : 昭和堂，20

15) 龍居竹之介 (1991) : おりおりの庭園論－庭を通して日本の文化を考える－ : 建築資料研究社，36

16) 上原敬二　(1978) : 造園大辞典 : 加島書店，637-640

17) 鈴木誠　(1997) :「日本庭園」の定義に関する考察 : 日本庭園学会誌 5，16-22

18) Jill Raggett (2006) : Writtle University College, Doctoral thesis the emergence of the Japanese-style garden in the British Isles.

19) 国立国会図書館 : 1900 年までに開催された博覧会，2010-2011 更新，<https://www.ndl.go.jp/exposition/s1/index.html>,2020.12.21 参照

20) 国立国会図書館 : 1873 ウィーン万博，日本庭園・神社，2010-2011 更新，<https://www.ndl.go.jp/exposition/s1/1873-2.html>，2020.12.21 参照

21) 国立国会図書館 : 1873 ウィーン万博，本館日本社園付属日本植物園全図，2010-2011 更新，<https://www.ndl.go.jp/exposition/s1/1873-2.html>，2020.12.21 参照

22) 東京農業大学 : 2021 海外の日本庭園，庭園一覧，<http://www.nodaigarden.jp/gardens-all/>, 2021 更新，2021.05.10 参照

23) 牧田直子・鈴木誠（2015）: 海外の姉妹都市日本庭園の歴史と日本側自治体から見た現状と課題：ランドスケープ研究 78(5),483-486
24) 鹿野陽子（2006）: 海外の日本庭園研究：ランドスケープ研究 69(3)，119-201
25) 中山理（2003）：イギリス庭園文化史ー夢の楽園と癒しの庭園 : 大修館書店，200-203
26) 鈴木誠 （2006）：海外につくられた日本庭園の系譜：ランドスケープ研究 69(3),192-198
27) 海外日本庭園再生プロジェクト：国土交通省ホームページ <https://www.mlit.go.jp/report/press/toshi10_hh_000301.html>, 2020.02.14 参照
28) 土沼隆雄・鈴木誠（1999）: ポートランド市ワシントン・パーク日本庭園の形成過程の特徴に関する考察：日本建築学会計画系論文集 521(64), 195-202
29) 白幡洋三郎（1994）: プラントハンター：講談社, 18-19, 115
30) W. Chambers (1723-1796) ：建築家，園芸家
31) W. Chambers（1772）: Dissertation on Oriental Gardening 東洋の庭園に関する考察：94pp
32) 加藤弘嗣（2015）: ウィリアム・チェンバーズの庭園論再考：英国庭園風景の反証としての中国の庭：関西学院大学リポジトリ，59(1), 255-270
33) Gardeners' Chronicle (1849) : Purnell ＆ Sons Ltd, 551
34) Gardeners' Chronicle (1856) : Purnell ＆ Sons Ltd, 300
35) Robert Fortune 著(1863) 三宅馨訳(1983) : 江戸と北京：廣川書店, 365pp
36) C. Maries (1850-1902) ：ヴィーチ商会，プラントハンター
37) Gardeners' Chronicle (1880) : Purnell ＆ Sons Ltd, 528-529
38) 小原敬 （1994）: 神奈川県植物研究史補遺(2) : 神奈川自然誌資料(16),41-43
39) 横浜植木商会：横浜植木 120 年の歩み・明治 40 年, <https://www.yokohamaueki.co.jp/ayumi/page4.html>，2020.12.07 参照
40) Gardeners' Chronicle (1908) : Purnell ＆ Sons Ltd, 277
41) 大出英子 （2008）: 1910 年の日英博覧会日本庭園の歴史と現状について：目白大学短期大学部研究紀要，27-41

42）日英博覧会記念絵葉書コレクション：青羽古書,
<http://www.aobane.com/books/570>，2020.12.07 参照

第 2 章　英国の園芸雑誌ガーデナーズ・クロニクルからみた日本庭園に関する記事内容の推移

2－1　はじめに

海外の日本庭園の多くは，国際交流のシンボルや博覧会，姉妹都市関係締結などをきっかけとして造られ，現在では日系人や現地の人々との文化的交流の場として親しまれている[01]。海外の日本庭園は，公開されている庭園だけで 500 以上にのぼり，現在 5 大陸 100 以上の国と地域に存在している[02]。このような広がりの一方で，土沼・鈴木[03]が指摘するように，「現地の気候風土，国民性・文化的背景の違いなどから，管理運営技術や文化紹介の発信が難しくなり荒廃するケース」がみられ，海外における日本庭園存続の課題と難しさが指摘されている。

海外の日本庭園に関する既往研究には，佐藤[04]，鈴木[05] [06]， 大貫[07]，木下[08]や片平[09] などによるものがある。片平[09]は，「原田治郎の『The Gardens of Japan（1928）』が最も早く英語で著された日本庭園論であり，英国の The Studio から出版され欧米における日本庭園像の形成に影響があった」と指摘している。さらに片平[10]は，外国人が示した庭園論として，イギリス人建築家ジョサイア・コンドルの『Landscape Gardening in Japan』を挙げ，英語による初めての体系的な日本庭園論であると述べている。

英国における日本庭園の作庭は，まず 19 世紀後半に博覧会等で日本庭園の文化が紹介された結果により引き起こされた日本庭園ブームから始まり，全土に広がったと考えられている。このことは鈴木[05]が，「明治時代になり数多くの外国人が日本を訪れ，また日本人の海外渡航が可能になるまでは，日本以外の海外に，本格的な日本庭園が造られることはなく，本格的な日本庭園が海外に造られるのは，やはり万国博覧会における明治政府出展の庭園を待つといってよいだろう」と述べていることから理解できる。

英国における日本庭園の広がりには，他国とは異なる背景が認められ，19 世紀のプラントハンターの活躍などによる，園芸学の発達と園芸業の成長の影響が考えられる。このことは白幡[11]が，「日本はプラントハンターたちによって，あかるみに出されるようになった地域でもある」と示唆していることからも明らかである。一方で，英国文化に日本庭園が根付いた歴史的背景や社会状況については未だに分析されないままに

現在に至っていると考えられることから，英国の日本庭園の維持・継続の必要性が理解されにくくなっている可能性が考えられる。

英国における日本庭園の過去から現在に至る動向を読み取る資料の一つとして，英国で刊行されてきた園芸雑誌がある。20 世紀以前には，言説は文字媒体を通じて形成され，なかでも雑誌は，単行本類にくらべ発行部数が桁違いに多く，購買層も幅広いため，その時代の社会状況が直接に反映されてきたと考えられる[12)]。19 世紀の英国では，英国四大週刊園芸雑誌とされる『Gardeners' Chronicle』，『Journal of Horticulture』，『Gardener's Magazine』および『The Garden』が誕生した（表 2－1）。これまでに，これらの英国園芸雑誌に関する総括的な分析研究はある[12) 13)]が，英国の日本庭園に関する記載に注目して，歴史的に考察した研究は白幡[11)]などに限られており，研究例は少ない。

本研究では，英国における日本庭園の変遷を検証する一助とするために，四大誌のうち，19 世紀後半から 20 世紀前半の日本庭園ブームを含む時期に継続して発行された『Gardeners' Chronicle』（図 2－1，以下 G・C と示す）に注目して日本に関する記事を分析し，英国における日本庭園の変遷と年代ごとの記述内容の比較を試みた。同誌は，植物学者の John Lindley や園芸・造園学者の Joseph Paxton らにより 1841 年に創刊された週刊園芸雑誌である。本誌を対象とした理由としては，同誌は当時の上流階級，職業庭師，種苗業者などが主な購読者で，19 世紀後半から 20 世紀前半の日本庭園ブームを含む時期およびそれ以降も継続的に発行された唯一の園芸雑誌であったことがあげられる[13)]。G・C は週刊新聞の形を取っているが，国内外のニュースだけでなく，庭師や科学者が送った膨大な資料とガーデニングに関係する多くの分野を網羅していた。また 19 世紀後半の英国では，特に園芸学の発達や，園芸業の成長が，園芸植物を採集するプラントハンターを数多く生んだ[11)]。このような社会的背景から，本誌は英国における日本庭園の 19 世紀以降の変遷を考察する上で重要な資料であると考えられた。

以上から，本章では，G・C の記事を通して，日本庭園に関する記事内容の推移を解析し，時代背景を考察した上で，それらの変遷を明らかにすることを目的とした。

表 2－1　19 世紀に創刊された英国四大週刊園芸雑誌の概要

雑誌名	刊行年代	特徴
Gardeners' Chronicle	1841 ～ 1967	文章主体で単色刷り，園芸に関する出来事や読者の投稿欄が豊富，園芸業者の広告などで誌面構成，園芸知識大衆化に貢献
Journal of Horticulture	1861 ～ 1915	週刊新聞版型，アマチュア向け
Gardener's Magazine	1826 ～ 1843	職業庭師向け
The Garden	1871 ～ 1927	週刊で初の彩色図版，広告掲載なし

8 THE GARDENERS' CHRONICLE. [JANUARY 2, 1892.

WILLIAMS' WORLD-RENOWNED SEEDS.

THE BEST AND FINEST STOCKS CAREFULLY SELECTED.

Vegetable Seeds, POTATOS, &c.

Flower Seeds, IMPLEMENTS, &c.

B. S. WILLIAMS & SON

Beg to announce that their ILLUSTRATED SEED CATALOGUE for 1892 is now ready, and will be forwarded, Gratis and Post-free, to all Applicants.

VICTORIA & PARADISE NURSERIES, UPPER HOLLOWAY, LONDON, N.

AWARDED TWENTY PRIZE MEDALS

AT INTERNATIONAL EXHIBITIONS AT HOME AND ABROAD.

KEITH'S PATENT BOILERS, THE "CHALLENGE," "VIADUCT," "PYTHON", &c.,

FOR HOT-WATER HEATING, "STAND FIRST," require no building work around them, are anti-chy water-jacketed, and each heat from 50 feet up to 20,000 feet of 4-inch pipe respectively. Many thousands are in use all over the world, and the Boilers are unrivalled in power and economy.

MANUFACTURED under 30 JAMES KEITH PATENTS, in Great Britain, United States, and Canada.

KEITH'S "PYTHON" BOILER, as illustrated, has 1,000 square feet of effective heating-surface, with 17½ square feet of fire-grate area, heats about 20,000 feet of 4-inch pipe, and is the Most Powerful and Complete Sectional "Special" Hot-water Heating Boiler in the World.

JAMES KEITH, C.E., Assoc. M.Inst.C.E., Gas, Hydraulic, Heating, Ventilating, and Consulting Engineer.

Established 1820. Contractor to Her Majesty's Government.

57, HOLBORN VIADUCT, LONDON, E.C., ALSO AT EDINBURGH AND ARBROATH.

JANUARY 2, 1892.] THE GARDENERS' CHRONICLE. 9

THE MARKET GARDENERS, NURSERYMEN, AND FARMERS' ASSOCIATION.

Founded, 1829. Incorporated, 1889.

INVESTED FUNDS ... ... £3741 6s. 11d.

ANNUAL SUBSCRIPTION .. .. ONE GUINEA.
LIFE MEMBERSHIP .. .. .. TEN GUINEAS.

REGISTERED OFFICE:
32, KING STREET, COVENT GARDEN, LONDON, W.C.

Officers for the Year 1891-92:—

President.
Mr. W. Poupart, Marsh Farm, Twickenham.

Vice-President.
Mr. W. J. Lordsoy, Little Woodcote Farm, Wallington.

Treasurer.
Mr. W. G. Loriout, Woodland Farm, Putney.

Auditors.
Mr. M. Poupart, Willows Farm, Mitcham.
Mr. E. Richmond, Mill Lane Nursery, Chesham.

Committee.
Mr. R. J. Steel, Boston Gardens, Brentford.
" H. Tyr, The Nurseries, Hampton.
" H. Hawkins, Lily Gardens, Twickenham.
" F. E. Kaye, Claigmar Vineyards, Finchley.
" J. Lancaster, Plaistow.
" Gerome Monod, Covent Garden, London.
" H. Meyers, Whitton Road, Twickenham.
" J. Mason, East Greenwich.
" J. Poupart, West Park Farm, Mortlake.
Mr. E. Smith, Coombe Farm, East Greenwich.
" J. T. Taylor, Stile Farm, Kew Bridge, Kew.
" J. Walker, Ham Farm, Ham Common.
" A. J. Robins, New Farm, Ealing.
" E. E. Abbey, North Grove House, Ealing Road, Brentford. [Walton-on-Thames.
" W. E. Atkinson, Bell Farm, Hersham Road,
" G. May, The Nurseries, Upper Teddington.
" W. W. Barnes, The Larches, Shere.

Secretary.
Mr. HERBERT B. BELL, Solicitor, 32, King Street, Covent Garden, London, W.C.

THE MARKET GARDENERS, NURSERYMEN, AND FARMERS' ASSOCIATION was founded in 1829. It was in 1889 incorporated under the Companies Acts, 1863 to 1886, with limited liability.

The general objects of the Association may be shortly stated as follows:—

(a.) To consider questions affecting Members of the Association and the Trade in which they are engaged, and to take such action thereon as may be found desirable for the protection and promotion of the rights, privileges, and general interests of Growers and their Trade.

(b.) To assist from the funds of the Association persons requiring charitable aid who are or have been Members, or their families.

With reference to (a), it may be pointed out that the Association has, from its foundation, rendered valuable service by prosecuting and defending, and assisting, with grants from its funds, individual Members and local societies in prosecuting and defending legal proceedings, resisting improper rating, carriers' charges, market rents and tolls; opposing bills in Parliament; giving evidence before Parliamentary Committees and Royal Commissions—and in numerous other ways protecting and promoting the interests of Growers and their Trade in matters in which combined action or support was necessary or desirable.

As regards (b), the Association has given material assistance by grants from its funds and otherwise to many, who, through misfortune, have stood in need of help.

In this connection it may be stated that, the Association has recently adopted a scheme establishing two annual payments of £25 each, out of its income. One being a pension for aged persons, who are or have been Members of the Association, and the other a provision for maintaining and educating a child of any such person. It is proposed to proceed to the first election of recipients of these benefits in February next.

As to the qualifications for Membership, all persons and firms engaged or interested in growing trees, shrubs, plants, fruit, flowers, vegetables, roots, herbs, or other produce for the London or other markets or otherwise, are eligible.

The work of the Association is not confined to the Home Counties or any other district, but, on the contrary, the object has always been to make it as comprehensive as possible, it being felt that the more Members it enrols, and the wider the field of its labours, the more effectually will its aims be achieved, as the Representative Association of the Growers and their Trade.

The liability of each Member is limited to the subscription, with such calls (previously sanctioned by the Association in General Meeting) as may be required for the purposes of the Association, not exceeding, however, in any year £1 1s. 0d., and in the event of the Association being wound up, a contribution, if required, not exceeding £1. But having regard to the objects of the Association, its well invested and unencumbered funds, and its established position, it may fairly be assumed that the liability is limited to the subscription.

Although the Association now numbers many Members, including leading representatives of the Trade, it is felt that there are many other gentlemen and firms who may properly be asked to become Members, not only in view of the advantages offered to them in their own business, but also of the support which is afforded to the Trade generally, and the charitable assistance which it may be the means of giving to Members who may have fallen on evil times.

All Growers who are not Members are therefore respectfully urged to join the Association, and such as are already Members are begged to use their influence with their friends and neighbours, with a view to securing their co-operation in aid of the Association and its useful and benevolent objects.

A copy of the Memorandum and Articles of Association can be inspected, and all particulars regarding the Association and the Benevolent Scheme referred to, with forms of application for Membership can be obtained on application to the Secretary.

32, King Street, Covent Garden, W.C.—December, 1891.

JANUARY

THE Gardeners' Chronicle.

SATURDAY, JANUARY 2, 1892.

TECHNICAL EDUCATION.

WE have been favoured with copies of a correspondence on this subject, between the Vice-chairman of the Middlesex County Council and the Director of the Royal Gardens, Kew. The Director, in his reply to the Vice-chairman, who had sought his opinion on the subject of instruction in horticulture, writes as follows:—

"I am sorry to say that I feel great difficulty in seeing my way with regard to the general problem of technical education, and horticulture seems to me to present peculiar difficulties. The cultivation of plants is an art which can only be acquired by practice, and therefore, it appears to me, cannot be taught in the lecture-room any more than painting or shoe-making. I know of no royal or theoretical road to the acquisition of a competent or even useful knowledge of the gardener's art except by beginning at the bottom and going through every operation, from the most elementary to the most difficult and refined. If an intelligent young man does that, and keeps his eyes open, he may become a successful gardener. But the mere reading of books and attendance on lectures will never, in my judgment, make anyone even a moderately competent gardener.

"If you will look at the Gardeners' Chronicle for December 12, 1891, you will see a letter of Professor Huxley's which I reprinted. It expresses in a very clear and forcible way with regard to agriculture the same views which, in substance, I entertain with regard to horticulture.

"In the Royal Gardens at Kew, from the necessities of our organisation, we are unable to teach young men the rudiments of their profession. Those we expect them to have acquired before they come to us. What they gain at Kew is the opportunity of seeing a larger range of different kinds of cultivation than they can see in any private establishment. Besides this, we give them the use of a fairly-equipped horticultural library, and lectures on various branches of botany, and on such elementary physics and chemistry as more or less directly bear on horticulture. I very much doubt, however, whether these advantages add very much to the capacity of our men as gardeners. That they must gain for themselves by working in the houses under the skilled direction of able foremen. But I do not doubt for a

図 2－1　Gardeners' Chronicle 書籍版の例(1892, Jan 1, 8-9p)

2－2　研究方法

G・C は Purnell & Sons Ltd によって 1841 年に刊行された週刊雑誌であるが，半年または 1 年ごとにまとめられ，書籍としても発行されている（図 2－1）。本章ではこの書籍版のうち，1841 年～1967 年までの 127 年間に発行された 168 巻の全ての掲載記事を対象とした。書籍版 1 巻あたりのページ数はおよそ 1200 ページである。

G・C は 1968 年以降，出版社が Haymarket Publishing Group に移行し，G・C も 1967 年以前とは書式と内容が一新されたため，本研究では分析対象外とした。なお，本誌は 1986 年以降は『Horticulture Week』と誌名を変え，現在も週刊雑誌として発行されている。

2-2-1　Gardeners’Chronicle の Japan 関連記事の変遷

G・C の全 168 巻の索引を対象に，Japan, Japanese, Japone で始まる記事（以下，Japan 関連記事と記載）を抽出し，各年に確認された記事について整理をおこなった。

2-2-2　Gardeners’Chronicle の Japan 関連記事の属性分類

Japan 関連記事を「植物関係」，「景観」，「日本庭園」，「日本旅行記」および「その他」の 5 つの属性に分類した。「植物関係」には，園芸学，植物の種類，育成，気候，害虫，カタログ，植物関連書籍および園芸店を含んだ記事を，「景観」には，風景，地形および眺望等を含んだ記事を，「日本庭園」には，庭園素材および具体的な庭園のデザインを含んだ記事を，「日本旅行記」には，日本での生活や植物の採集経路等が具体的に記載された記事を，「その他」には，日本の文化，習慣，特性およびどの区分にも入らない項目をそれぞれ分類した。なお，記事が複数の属性を持つ場合は，それぞれの属性において重複して計上した。分類後の Japan 関連記事については発行年を 10 年ごとに整理し，各属性記事の数と，それぞれの内容の変遷を分析した。また，特徴的な要素についても記録した。

2-2-3　Gardeners’Chronicle の Japan 関連記事の日本庭園に関する記事の分析

Japan 関連記事のうち，属性が「日本庭園」に分類された記事は 46 であった。これらの記事を対象として，出版年，タイトル，およびその内容を整理し，英国における日本庭園に対する意識がどのように変化していったのかを分析した。さらに記事内容

を「寺院庭園」,「日本庭園美」,「英国の日本庭園」,「盆栽」,「レクチャー」,「海外の話題」,「日英博覧会」,「日本文化・素材」,「日本人の精神性」および「日本庭園ツアー」の 10 の属性に分類し，特に 1910 年の日英博覧会前後の記事内容の違いに注目してその推移を分析した。

2－3　結果

2-3-1 Gardeners’ Chronicle の Japan 関連記事の変遷

1841 年～1967 年までの 127 年間で，347 件の Japan 関連記事が掲載されていた。各年の Japan 関連記事数の推移を図 2－2 に示した。

その結果，1861 年（18 記事），1880 年（19 記事），1908 年（14 記事），1910 年（18 記事）および 1966 年（12 記事）の 5 年で 12 以上の記事があり，博覧会開催と関連する記事数の急増が，1861 年と 1910 年に認められた。

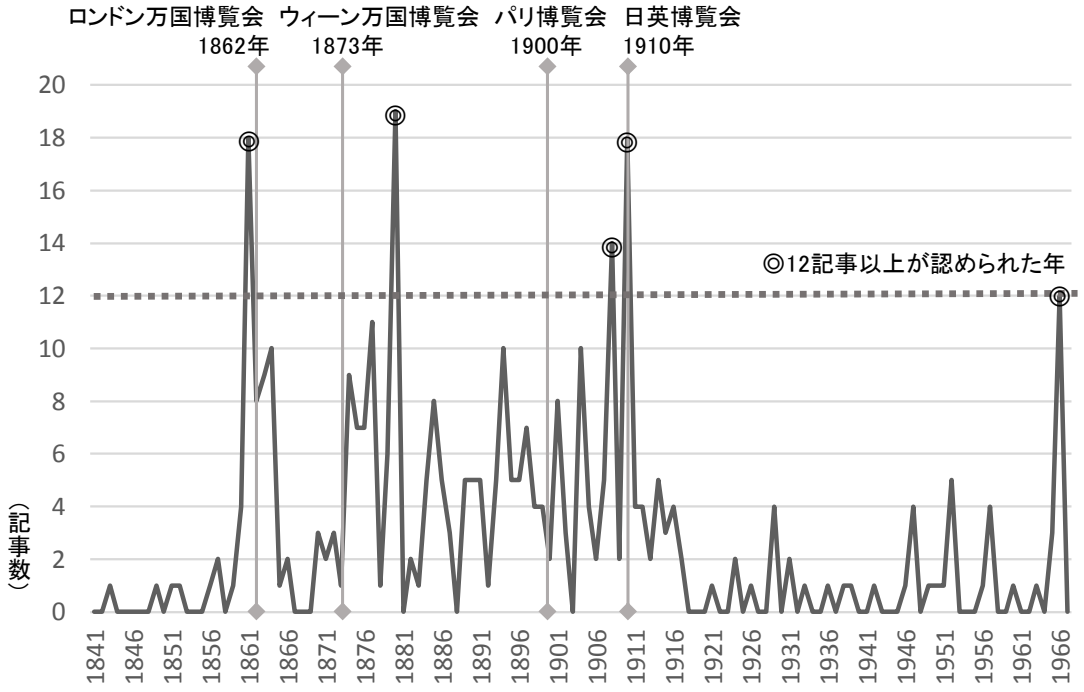


図 2－2　Japan 関連掲載記事数の動向（1841 年～1967 年総記事数：347）

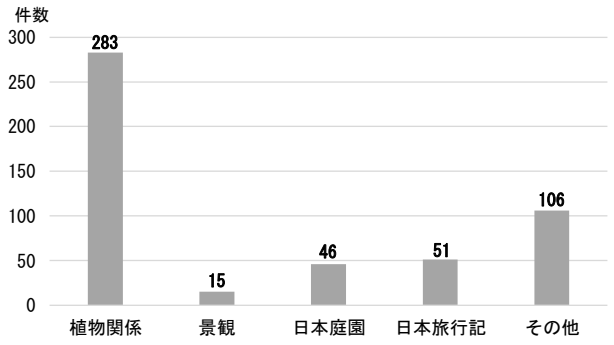


図 2－3　Japan 関連記事の属性別掲載数（重複あり，合計：501）

表 2－2　Japan 関連記事の属性別にみた 10 年ごとの数の変化

年代	植物関係	景観	日本庭園	日本旅行記	その他
1841－1850	2	0	0	0	0
1851－1860	8	0	0	3	1
1861－1870	44	9	2	20	5
1871－1880	54	5	6	5	25
1881－1890	30	0	1	0	9
1891－1900	42	0	2	3	20
1901－1910	50	0	16	10	24
1911－1920	24	0	2	7	7
1921－1930	6	0	1	1	2
1931－1940	5	0	1	0	1
1941－1950	6	1	0	1	7
1951－1960	11	0	1	0	2
1961－1967	1	0	14	1	3
合計	283	15	46	51	106

2-3-2　分類属性ごとの記事の特徴

Japan 関連記事を 5 つの属性によって分類した結果,「植物関係」が 283 記事,「景観」が 15 記事,「日本庭園」が 46 記事,「日本旅行記」が 51 記事,「その他」が 106 記事となった（図 2－3)。各属性の掲載記事数を 10 年ごとに整理したものを表 2－2 に示した。

「植物関係」の記事に関しては 283 記事と最大の掲載数が認められ，特に 1861 年から 1920 年にかけて多くの記事が掲載されていた。これらを詳細に分類すると，植物の種類（77%)，育成（7%)，害虫（4%)，耐寒性（4%)，カタログ（3%)，植物関連書籍（3%）および園芸店（2%）に分類された。最も多くの割合を示した記事は植物の種類の紹介であり，植物学者やプラントハンター，さらには英国の Nursery，横浜や札幌，長崎などに関わる記事や植物の種類・植物論などが含まれる。育成については日本と英国の気候が似通っていることに関する記載などが，害虫についてはその駆除方法についての記述などがあった。

「景観」に関する 15 記事は日本の開国直後のものが大半で，江戸や富士山，長崎，函館，札幌など開港された港を拠点とした行動範囲の中で日本の自然風景に受けた感銘に関する記載が認められた。キーワードとしては，富士山の美しさ，春の風景，長崎の地形，島国や田園などが挙げられた。

「日本庭園」に関する 46 記事には，1901 年～1910 年にかけての 16 記事と，1961 年～1967 年にかけての 14 記事に掲載数のピークが見られた（表 2－2)。これらの掲載記事のうち，前者では 1910 年の日英博覧会に関する記事が 8 件，後者では 1966 年の 3 月 31 日から 4 月 22 日にかけて G・C が主催した Gardeners' Chronicle Tour of Japan に関する記事が 9 件を占めていた。

「日本旅行記」に関する 51 記事には，1861 年～1870 年および 1901 年～1910 年にピークがあり，植物学者やプラントハンターからの手紙や現地での種の採集報告，旅行の様子が伝えられていた。1921 年以降にはプラントハンターや植物が関係する記事は減少した。

「その他」に分類された 106 記事に関しては，多くが「植物関係」と「日本旅行記」の記事と同時期にみられた。記事からは，プラントハンターや植物学者が，植物だけでなく日本の生活や慣習などを通して日本の文化や工芸品，習慣などを異文化として取り上げ，英国に持ち帰り，あるいは紹介していたことが示唆された（表 2－2)。

表 2－3　G・C の Japan 関連記事のうち属性が「日本庭園」であった全記事の掲載年と概要（1/2）

番号	掲載年	タイトルと概要
1	1861	Notes on the botany of Japan 浅草寺「Ah-sax-saw」大寺院，池，橋，石組，茶室あり，庭師は菊の芸術性を理解する
2	1862	The Horticulture of the far East 日本では興味深い植物が存在，Royal garden at Osboneの石組みは日本庭園と類似
3	1876_上	Japanese gardening 庭園と一族の記念写真，日本庭園は普遍美がある
4	1877_上	Japanese Gardens 盆栽庭園（Japanese house gardens）
5	1877_上	Japanese house garden 盆栽庭園(miniature rock gardens for room)，枯山水，水槽インテリア（テラリュウム）
6	1879	Japanese gardens 日本庭園は紅葉の時期がよい，またこの時期は菊も美しい
7	1880_上	A temple garden 横浜に近い寺院庭園の美しさを評価，松やソテツの植栽に注目
8	1880_上	Japanese curiosities 日本の景観美についてのレクチャーの紹介，江戸，大名，庭園作業などに言及
9	1885_上	Japanese tea 日本の煎茶，抹茶，茶室，茶庭，庭石について言及
10	1894_下	Japanese gardens 日光大日堂の日本庭園は，中国と韓国のテイストを醸し出している
11	1895_上	Japanese gardens 英国バーミンガムでの日本庭園レクチャーの概要
12	1902_上	The Japanese garden, Gunnersbury house, Acton この日本庭園を訪れた人は衝撃を受ける，庭園内に関する詳細な説明あり
13	1902_下	The Japanese garden at Gunnersbury house, Acton Gunnersbury houseは「true Japanese style」である。多くの日本原種の樹木植栽がある
14	1904_下	Japanese Exhibits at the st. Louis Exhibition セントルイス博覧会における日本庭園展示の紹介，庭師はパリ博覧会でも作庭
15	1905_上	Japanese garden, lecture on the construction Gunnersbury houseの植栽や作庭についてのレクチャーの紹介
16	1905_上	Japanese horticulture lecture 日本の江戸時代と植物に関するレクチャーの紹介，将軍は美しい庭園を持っていた
17	1905_下	Japan, nature study 日本人の自然観の学びについてのレクチャーの紹介
18	1907_上	Plants suitable for a Japanese gaden on the Pacific coast of N. America 北アメリカ西海岸の日本庭園に合う植物の紹介
19	1908_上	Water colours depicting Japanese scenery 日本の風景を描いた水彩画展から日本庭園の飛び石などを解説
⑳	1910_上	Japan British Exhibition 日英博覧会で腕利きの日本の庭師による2つの日本庭園を作庭したことの報告
㉑	1910_上	Japan British Exhibition シェパーズブッシュでの日本庭園の紹介
㉒	1910_上	Japan British Exhibition 日本庭園の紹介と博覧会でのスピーチの概要
㉓	1910_上	Japanese gardening at Shepherd's bush 会場の二つの日本庭園（平和園と浮島園）の詳細説明
㉔	1910_上	Japan British Exhibition, women's congress 日英博覧会における女性園芸家の集会に関する記事
㉕	1910_下	Japan British Exhibition, Japanese visitors at the Holland house 英国の園芸メンバーと日本人の会合の紹介，日本人は自然とうまく親しんでいる
㉖	1910_下	Gardening at Japan British Exhibition 博覧会での日本庭園と植物管理について
㉗	1910_下	Japanese nursery, snow scene 日本と英国は似た気候で植物がマッチする，雪景色の日本庭園美の称賛

表 2－3　G・C の Japan 関連記事のうち属性が「日本庭園」であった全記事の掲載年と概要（2/2）

番号	掲載年	タイトルと概要
28	1912_下	Japanese gardens 日本庭園美の原論の紹介，日本庭園は庭園だけでなく建築に付随する
29	1914_上	Japanese landscape gardens アメリカ人筆者による日本庭園解説
30	1929_上	Japanese gardens 英国には多くの日本庭園が造られているが，これらの庭園には真の精神が必要
31	1933_下	A Surry Japanese garden 英国 Surryの日本庭園の紹介
32	1960_下	Japanese garden scissors 日本庭園の管理に使われる和ばさみの紹介
33	1963_下	Japanese garden by Martyn Clemans 日本庭園の特徴として，常緑樹に注目，ミニュチュアでなく新たな空間について
34	1965_下	Japanese gardens 英国からの日本庭園ツアーに向けての日本の庭園紹介
35	1965_下	Japanese gardens tour 英国からの日本庭園ツアーの募集情報
36	1965_下	Japanese gardens tour 英国からの日本庭園ツアーの概要
37	1966_上	Japanese gardens in Birmingham Cannon hill Park のJapanese type garden について
38	1966_上	Japanese gardens at Tatton Park Tatton Park のJapanese garden について
39	1966_上	Japanese garden U.N.E.S.C.O. パリでの日本庭園流行とノグチによりデザインされた日本庭園について
40	1966_下	The Gardeners' Chronicle Tour of Japan. In and around Japan. 英国からの日本庭園旅行ツアー，東京，盆栽園，清澄庭園ほか見学の報告
41	1966_下	The Gardeners' Chronicle Tour ofJapan. On to Kamakura. 東京花卉，鎌倉，日光，および箱根ほか見学の報告
42	1966_下	The Gardeners' Chronicle Tour ofJapan. Hakone National Park. 育苗園芸店，箱根国立公園ほか見学の報告
43	1966_下	The Gardeners' Chronicle Tour ofJapan. Hakone to Osaka. Mr. Sakataの温室見学，大阪，広島ほか見学の報告
44	1966_下	The Gardeners' Chronicle Tour ofJapan. Hiroshima to Tokyo. 花卉市場，蘭の育苗，広島原爆ドーム，京都の枯山水庭園ほか見学の報告
45	1966_下	The Gardeners' Chronicle Tour ofJapan. Back to Tokyo. 車移動での山野草見学，京都庭園見学，東京に帰京の報告
46	1966_下	Veitch in Japan Veitchの日本文化と庭園哲学

※掲載年欄には掲載年と上巻，下巻の別を，タイトルと概要欄には，上段にはタイトル，下段には筆者翻訳による概要を示す。〇付番号は日英博覧会，□付番号は日本庭園ツアーにそれぞれ関連する記事を示す。

表 2－4　G・C の Japan 関連記事のうち属性が「日本庭園」であった全記事の分類

番号	掲載年	寺院庭園	日本庭園	英国の日本庭園	盆栽	レクチャー	海外の話題	日英博覧会	日本文化素材	日本人の精神	日本庭園ツアー
1	1861	●									
2	1862			●							
3	1876_上		●								
4	1877_上				●						
5	1877_上				●						
6	1879		●								
7	1880_上	●									
8	1880_上					●					
9	1885_上								●		
10	1894_下	●									
11	1895_上					●					
12	1902_上			●							
13	1902_下			●							
14	1904_下						●				
15	1905_上					●					
16	1905_上					●					
17	1905_下					●					
18	1907_上						●				
19	1908_上								●		
⑳	1910_上							●			
㉑	1910_上							●			
㉒	1910_上							●			
㉓	1910_上							●			
㉔	1910_上							●			
㉕	1910_下							●			
㉖	1910_下							●			
㉗	1910_下							●			
28	1912_下								●		
29	1914_上						●				
30	1929_上									●	
31	1933_下			●							
32	1960_下								●		
33	1963_下									●	
34	1965_下										●
35	1965_下										●
36	1965_下										●
37	1966_上			●							
38	1966_上			●							
39	1966_上						●				
40	1966_2_13										●
41	1966_2_14										●
42	1966_2_15										●
43	1966_2_16										●
44	1966_2_17										●
45	1966_2_18										●
46	1966_2_20									●	

※掲載年欄には掲載年と上巻，下巻の別を示す。○付番号は日英博覧会，□付番号は日本庭園ツアーにそれぞれ関連する記事を示す。

2-3-3　日本庭園に関する記述の分析結果

Japan 関連記事のうち，「日本庭園」に分類された 46 記事を対象にして，発行年，記事タイトルおよびその内容から属性を整理した（表 2－3，表 2－4，表 2－5）。各属性は，「日本庭園ツアー（9 記事）」，「日英博覧会（8 記事）」，「英国の日本庭園（6 記事）」，「レクチャー（5 記事）」，「海外の話題（4 記事）」，「日本文化・素材（4 記事）」，「寺院庭園（3 記事）」，「日本人の精神性（3 記事）」，「日本庭園美（2 記事）」および「盆栽（2 記事）」となった。

最も多かった「日本庭園ツアー」の記事は，9 記事（番号 34～36，40～45）であり，これらの記事すべてが 1966 年の日本庭園ツアーに関する記事であった。1965 年の 3 記事（番号 34～36）は，ツアー予告と概要であり，訪問先として，園芸関係，花卉市場，庭園および寺院（番号 35， 1965 年）が紹介されていた。また 1966 年の 6 記事（番号 40～45）は日本ツアーの詳細記事であり，園芸種名も詳細に記載されていた。ツアーの行程は以下のとおりである。1966 年 3 月 31 日にロンドン空港を出発し，24 時間半のフライトで東京に到着する。一日目（4 月 2 日）は東京見物と椿山荘の見学。二日目は大宮と盆栽園の見学。三日目は千葉大学園芸学部訪問と清澄庭園の見学。四日目は東京園芸高校の訪問と草月会館の見学。五日目は日光，中禅寺湖，華厳の滝の見学。六日目は東京花卉園芸市場訪問と，小石川植物園および新宿御苑の見学。七日目は箱根国立公園，横浜外人墓地，大船園芸園および鎌倉の見学。八日目は茅ケ崎坂田種苗の見学と箱根大涌谷の観光。九日目は小田原から豊橋へ列車移動した後に，温室を見学し，伊良湖岬着。十日目はミキモト真珠島と伊勢神宮の見学。十一日目は大阪から広島へ移動。十二日目は広島で花卉市場，廿日市蘭園および厳島神社の見学。十三日目は広島原爆資料館の見学後，京都へ移動。十四日目は平安神宮，金閣寺，二条城，龍安寺，西芳寺および大徳寺を見学。十五日目は車移動により京都郊外の山村地帯と花背を巡り散策。十六日目は奈良で春日大社および法隆寺を見学。十七日目は桂離宮と野村碧雲荘を見学。十八日目は京都から東京へ移動後，日比谷公園と皇居外苑を見学。十九日目には東京を出発して Hong Kong, Rangoon, New Delhi, Beirut, Rome 経由で，4 月 22 日に帰国した。

ついで多かった「日英博覧会」に関連する記事は，すべてが 1910 年にみられ，連続した 8 記事が認められる（番号 20～27）。“Japanese gardening at Shepherd’s bush” として，シェパーズブッシュの日英博覧会に出展された二つの庭園である“The

Garden of Peace”（平和園）と，“The Garden of the Floating Islands”（浮島園）についての詳細な庭園説明の記載（番号 23）などが見られる。

ツアーや博覧会以外の属性については，時期によるまとまりは見られなかったが，1910 年の日英博覧会の記事の前後で傾向に違いが見られた（表 2－5）。すなわち，博覧会以前には，「寺院庭園」，「盆栽」，「レクチャー」など日本の文化や景観，植物に関する記事が多く見られ，記事内容（表 2－3，表 2－4）からみると，日本人の自然観や矮性樹木種に関する記事が多く認められた。ここでは盆栽庭園である“Japanese house garden, miniature rock gardens for rooms”の流行や，水槽インテリア（英国テラリュウム）などにおける日本の羊歯植物やマツなどの植物種との関わりを記したもの（番号 5, 1877 年），日本の煎茶・抹茶・茶室・庭石について述べたもの（番号 9, 1885 年），英国人の施主が要望し英国人庭師が作庭した Gunnersbury House 日本庭園について評価したもの（番号 12, 1902 年）のほか，Gunnersbury House 日本庭園では，“True Japanese Style”という表現で，多くの日本原産種が植栽されていることを述べている記事（番号 13，1902 年），また Gunnersbury House 内のレクチャーでは，この庭園内で植栽や作庭の解説がおこなわれたことを報じる記事 (番号 15, 1905 年) が認められた。

日本の植物に関する記事をみると，「日本庭園」に関する 46 記事の中での植物の記載と，属性が「植物関係」の 283 記事の記載内容は異なっていた。すなわち，「植物関係」のカテゴリーでは植物鑑賞や珍種・有用植物に関わる記事が主であったのに対して，「日本庭園」のカテゴリーでは，盆栽庭園，テラリュウム，および矮性樹木種の記載が多かった。また，珍種や有用植物に関しては，キク，針葉樹，ソテツ，タケ，シュロ，ヤツデなどに関する記載がみられた。G・C の記事で日本庭園に関する記事の中で最も古いもの（番号 1, 1861 年）は，浅草寺の境内を中心にキクや植物の展示販売および庭師のキク栽培の芸術性，庭園の池や石組を記載したものであった。盆栽庭園，テラリュウム，および矮性樹木種に関しては，1877 年の“Japanese House Garden”の記事（番号 4）の中で，日本の庭師が様々な種類の木を矮小化し，比較的小さな磁器の花瓶で育てているという記載があった。また，“Miniature rock gardens for rooms”，“They are just at present so much the fashion in Japan”など，英国で盆栽庭園の流行があったことがわかる記載があった（番号 5, 1877 年）。さらに矮性化した植物については，日本庭園には，多くの家に矮性化した低木があり，晩秋の紅葉を観賞してい

表 2－5　「日本庭園」に関する記事の概要と属性の変化

概要	属性	総数	日英博覧会以前記事数 1861～1908年	日英博覧会以後記事数 1910～1966年
植物 美しさ・景観	A: 寺院庭園	3	3	0
	B: 日本庭園美	2	2	0
	C: 英国の日本庭園	6	3	3
	D: 盆栽	2	2	0
	E: レクチャー	5	5	0
文化 慣習・形式	F: 海外の話題	4	2	2
	G: 日英博覧会	8	0	8
	H: 日本文化・素材	4	2	2
	I: 日本人の精神性	3	0	3
	J: 日本庭園ツアー	9	0	9
	合計	46	19	27

るという記載があった（番号 6, 1879 年）。珍種や有用植物の販売に関しては，江戸郊外の Mr. Kosoburo's nursery（前述）をはじめ，かつてない規模で園芸店が 1 マイル以上連なっているとする記載があった（番号 7，1880 年）。また，多くの種類の針葉樹や寺院にあるソテツに関する記事（番号 7， 1880 年）も認められた。Gunnersbury House 日本庭園については, タケやシュロを庭園形成の中で不可欠な種類だと言及し，ヤツデは斑入りが特に印象的で美しく，これらの植栽によって以前の庭園とは見違えるような姿になったという記事が認められた（番号 12, 1902 年）。

1910 年の日英博覧会以降は,「日本人の精神性」および「日本庭園ツアー」などに分類される記事が認められることから，日本庭園のイメージが具体化されていった時期であったと捉えられる。その結果，日英博覧会以前には，日本庭園に対して植物と優美さ，景観などが注目されていたのに対して，日英博覧会以降には，文化や慣習，形式などに記事内容が変化していったことが示唆された（表 2－5）。

2－4　考察

2-4-1　19 世紀から 20 世紀初頭の英国における日本庭園の理解

日本は開国後，1859 年に外国との通商のために数か所の港を開き，ヨーロッパの主な国々やアメリカとの交流を始めた。G・C の記事を経年的に見ると，日本への興味はまず英国に紹介された珍種や有用な植物によって先行し，盆栽庭園や矮性植物種も注目された。その中でもタケ，シュロ，斑入りヤツデ等は，Gunnersbury House 日本庭園をはじめ, 多くの日本庭園で中心的な植物素材として使われていたことが示された。

また日本庭園の植栽樹木として注目されていた常緑樹に関する記事もあり，そこでは日本庭園の特徴は，常緑樹を骨格として構成され，四季の移り変わりに応じた演出が用意され，春と夏には花が咲き誇ると記載されている（表 2-3, 番号 12，1902 年）。常緑低木で耐寒性もあるアオキに関する G・C の記事では，庭木としてのアオキの美しさと雄雌についての 1864 年の記事 [14]，およびコベントガーデンの日本植物販売会場で赤い実がなるアオキの苗木と 700 余りのユリの販売が行われた同年の記事が認められた [15]。このように当時の英国では，有用植物や珍種に注目が置かれ，盛んに日本庭園の素材として活用されていたと考えられる。また，英国と日本の気候に共通点があることから，耐寒性の強い植物に関する記事も多数見られ，G・C の 1864 年の記事 “Plants hardiness”では，日本の植物がアジアの中で霜に最も強い能力を持っているわけではない [16]と否定的な記載がある一方で，同号の “New Japanese things”の記事では，日本から新規に導入された種はシェルターなしで元気に成長していると記載されている [16]。以上から，英国では，19 世紀後半からプラントハンターと園芸業者がそれぞれ植物情報を集め，園芸学と園芸業が飛躍的な進歩を遂げ，新しい日本の植物紹介が盛んとなったことが示唆され，英国の日本庭園の初期の特徴となったと考えられる。19 世紀の日本庭園の情報は，写真さらにはプラントハンターなどの旅行記などにより知識として英国に入っていったと考えられる。その後，約 100 年後の 1963 年の記事 “Japanese gardens” [17]では，「日本の庭師は，不変のものをつかみながら芸術的感性で作庭し，想像上で表現している」と記述し，日本庭園の庭師が自然を模倣しながら特有の表現で作庭していることが示唆されているものの，庭の見取り図のような記事は全く見られないことから，作庭にあたっての様式や具体像は 20 世紀になっても伝わっていなかったと考えられる。

1850 年から 1950 年代の英国での日本庭園を Raggett は，“Early Japanese-style Gardens”と呼び，「それらの庭園は，その時代に日本庭園を見て感化・影響を受け，再現し，または思い出してデザインされた日本庭園を意味するものが含まれているが，日本から来たものばかりではなく、英国で生まれたものも含まれる」[18]と述べている。さらに Raggett は，この時代の代表的な庭園として，ソーマレズ公園（c.1890）（ガーンジー島）とヒールハウス(c.1901)をあげ，これらの作庭では施主の個人ルートを通して建物を日本から移築したり，日本人に個人的に補助を依頼したことを述べている。加えて，この時代には日本庭園の知識がなかったために，文化や象徴的なものがデザ

インに導入されることによって,英国独自の日本庭園を造りだしたと考察している[18]。このような時代背景の中で，日本庭園は英国独自の日本庭園スタイルとして根付いたことが理解できる。さらに Raggett は，これらの庭園は日本庭園からのインスピレーションを受けた “Cultural borrowing and producing” 文化の利用であると述べている[18]。同じように G・C の記事からは，煎茶・抹茶の紹介（表 2－3，番号 9, 1885 年），日本人の自然観を学ぶレクチャー（表 2－3，番号 17，1905 年），および英国で開催された日本の風景を描いた水彩画展（表 2－3，番号 19, 1908 年）など，日本人の文化的背景をもとに日本庭園を理解しようとする記事が見られ，その影響が考えられた。英国の植物学者でもあるプラントハンターの一人 Robert Fortune の 1863 年の著作[19]からも，日本が非常に風光明媚なこと，ヨーロッパに見られない植物の種類に富んでいること，かつ有用な植物の多いことなどがあげられており，英国人が日本の植物種に興味を持つようになった傾向が推定できる。すなわち，日英博覧会以前の英国における日本庭園は，英国の文化的背景の中でプラントハンターや旅行記などの情報や写真，あるいは旅行経験者が想い出作りを目的としたことなどが主な動機となって作庭されたと考えられた。

2-4-2　英国における日本庭園理解の変遷

鈴木[05]は，「19 世紀末には欧米におけるジャポニズムのブームが起こり，日本を訪れる外国人が増加して日本から庭園材料を自国に輸入し，大工や庭師を連れ帰って自宅に庭園を築くようになる」と述べている。英国で初めて国内の日本庭園が G・C に記事として掲載されたのは，1902 年の Gunnersbury House 日本庭園である。記事には，訪問者が最も心打たれる日本庭園であること，庭師が中国または日本原産の植物を選んでいること，その中で最もすぐれた植物はタケとシュロで，それらを広範囲に植栽し，日本庭園のイメージに近づけていることが記載されている[20]。さらに，この庭園については施主の指示により，James Hudson が 1900 年に作庭し，熱帯の睡蓮と水生植物のために,曲がりくねった暖かい流れが造られたことが報告されている[18]。これらの記事から，20 世紀初頭には日本庭園を形式的に取り入れるだけではなく，所有者の多くは，日本庭園の正確なレプリカではなく，雰囲気に関心を持っていたと考えられる[18]。

日英博覧会当時の日本庭園として現在に伝えられる庭園としては，ロンドンの都市

公園ハマースミスパークに残る“The Garden of Peace”（平和園）が挙げられる。しかし，現在の形態は大きく様変わりしている。その要因としては，歴史的背景に対する英国民の認知度の低さから管理技術の維持が難しくなったことが考えられる[21]。当地では 2010 年に，環境再生調査が行われ，日英博覧会開催 100 周年を記念して修復工事が完成した[22]。しかし，博覧会跡地として遺構があるにも関わらず，それらを修復するのではなく新規のものや枯山水庭園が作庭され，庭園内の歴史的継承が薄れたように思われる。このような現状をみても，対象とする庭園の歴史的背景や英国における日本庭園の様式が理解，解明されない現状を改善するための一助として，G・C の掲載記事は英国での日本庭園の変遷を知る上で重要な資料であると考えられる。

2－5　本章のまとめ

本章では，G・C の掲載記事の推移から考察された英国での日本庭園に対するイメージは，まず，日本の珍種や有用植物，日本文化の理解によって形成されていったことが示された。この時代には，日本庭園に対する，庭園様式の具体的なイメージより日本庭園に植栽される特徴的な植物種のイメージが中心であったと考えられる。この時代の多くの英国の日本庭園は，1910 年の日英博覧会までは，“Japanese-style Gardens”として扱われ，これらはプラントハンター等による旅行記などの情報や写真に基づいて，施主の要望により作庭された。一方，日英博覧会以降の時代は，時代の流れとともに，G・C のような印刷物のみであった情報伝達が，ラジオ，テレビ，映画など多様な媒体を使うようになった時代である。20 世紀後半には，1966 年の「日本庭園ツアー」のように実際に現地を訪れることが可能となり，日本庭園の一般への普及形態も変化していった。

以上から，現存する英国の日本庭園の維持管理を考える上では，現状を把握しながら，それらの時代背景に基づいた英国における修復方法の考察や管理手法の検討が必要であるといえる。また，修復にあたっては，英国における歴史的価値観や文化の視点から作庭当時のデザインを復元して，その時代の英国の日本庭園観を次世代に繋げることが重要であることが考察された。

補注及び引用文献

01) 鹿野陽子　(2006)：海外の日本庭園研究：ランドスケープ研究 69(3),119-201

02) 東京農業大学：2018 海外の日本庭園
< http://www.nodaigarden.jp>, 2019 更新，2019.7.10 参照

03) 土沼隆雄・鈴木誠　(1999)：ポートランド市ワシントン・パーク日本庭園の形成過程の特徴に関する考察：日本建築学会計画系論文集 521(64),195-202

04) 佐藤昌　(1933)：外国人の見たる日本庭園：園芸学会雑誌(4)1, 88-106

05) 鈴木誠　(2006)：海外につくられた日本庭園の系譜：ランドスケープ研究 69(3), 92-198

06) 鈴木誠　(1998)：欧米人の日本庭園観：ランドスケープ研究 62(2), 136-143

07) 大貫誠二　(2006)：海外の日本庭園：意義と役割①国際博覧会と日本庭園：ランドスケープ研究 69(3), 202-205

08) 木下剛　(2006)：海外の日本庭園：意義と役割④公園・植物園・美術館からの日本庭園：ランドスケープ研究 69(3), 211-213

09) 片平幸　(2007)：欧米における日本庭園像の形成と原田治郎の The Gardens of Japan：国際日本文化研究センター紀要 34, 179-208

10) 片平幸　(2010)：往還する日本庭園の文化史 - ジョサイア・コンドルの日本庭園論の考察を中心に - ：桃山学院大学総合研究所紀要 35(2),33-53

11) 白幡洋三郎　(1994)：プラントハンター：講談社, 271pp, 268-272

12) 新妻昭夫　(2007a)：ガーデニング雑誌という世界：恵泉女学園大学園芸文化研究所報告 4, 1-13

13) 新妻昭夫　(2007b)：英国 19 世紀の園芸雑誌の研究 - ガーデニング文化の大衆化の視点から：恵泉女学園大学園芸文化研究所報告 4, 192-235

14) Gardeners' Chronicle (1864a)：Purnell & Sons Ltd, 292

15) Gardeners' Chronicle (1864b)：Purnell & Sons Ltd, 939

16) Gardeners' Chronicle (1864c)：Purnell & Sons Ltd, 436

17) Gardeners' Chronicle (1963)：Purnell & Sons Ltd, 231

18) Jill Raggett (2011)：Gardens Speaking with a Japanese Accent: Shakkei 17(4), 4-5

19) Robert Fortune 著(1863) 三宅馨訳　(1983)：江戸と北京：廣川書店, 365pp

20) Gardeners' Chronicle (1902) : Purnell & Sons Ltd, 228

21) 大出英子　(2008) : 1910 年の日英博覧会日本庭園の歴史と現状について : 目白大学短期大学部研究紀要 45, 27-41

22) 坂本新太郎　(2012) : ハマースミスパーク日本庭園修復事業 : 特定非営利活動法人環境再生, 2-15

第 3 章　日本庭園に関心がある英国人と日本人の日本庭園に対する印象の比較

3－1　はじめに

海外における日本庭園管理・修復の現状の課題としては，施設の経年劣化や管理放棄，樹木の巨大化などの整備面での問題が挙げられている[01)]。さらに，各国における管理体制の不備や庭園に関する認知度の低さなどによって，日本庭園の知識のない造園管理者では，自国で整備することが難しい現状も指摘されている[02)]。こうした中で，アメリカ合衆国のオレゴン州にある 1950 年代後半に文化交流の目的で造られたポートランド日本庭園では，庭園管理の外国人後継者づくりを目指して International Japanese Garden Training Center が 2016 年に設置された。このセンターは，アメリカ人と日本人が共同で立ち上げたもので，造園関係者や研究者で構成されており，育成･管理の指導や技術の伝授を現地造園関係者を対象におこなっている[03)]。しかし，各地域の庭園で同様の現地指導をおこなうまでには至っていないため，各地域や国に適した庭園修復・維持を可能にする後継者づくりには，時間が必要とされている。このような取り組みが日本国外で始まっていることを踏まえると，現状では海外にある日本庭園の維持管理の支援は喫緊の課題であると考えられる。

20 世紀に入ってからの海外での日本庭園の造園の経緯をみると以下のようなことが言える。1933 年に佐藤は，「かくして今迄の日本庭園觀を清算し新たなる眞實の日本庭園觀を觀光國日本として用意すべきは今が丁度好時期の様な気がしてならないものである」，「世界造園史より見るも，日本庭園といふ一つの様式が完全に成立して居り我々の誇るべき東洋藝術である」[04)]と言及し，日本庭園の芸術性を観光国として海外に紹介する必要性を示唆している。また楫西[05)]は，外国人の本格的な日本庭園研究の黎明期の著作として，Edward S. Morse の『Japanese Homes and Their Surroundings』[06)]および，Josiah Conder の『Landscape Gardening in Japan』[07)]を挙げている。それらは，日本の庭園についての観察をまとめたものや，庭園そのものの理解よりも，江戸時代中期に広く普及した作庭書『築山庭造伝』[08)]を克明に記述するなど日本の文献を調べあげたものである。たとえば，楫西[05)]は，コンドルが日本庭園観を分析した結果として挙げた三つの要素について，日本庭園は日本風景そのものの表象であるとしていること，日本庭園は美術であるとしていること，日本庭園の精神性については一切言及していないことを指摘している。このように，当時の外国人

は日本庭園の本質に注目するのではなく，景観の一部や空間要素の景物としての見方を重視していたと推測できる。これらの研究からも，日本人と外国人の日本庭園の認識には違いがあり，時代背景によっては，理解度もその内容も違ってくることが読み取れる。

中村・尼﨑 [09]は，英国では 18 世紀に英国風景式庭園のピクチャレスク（絵画的），すなわち「遠景」に対する感覚が風景式庭園として定着したと言及し，「絵画的」とは遠景感覚，あるいは視覚性の優位さを示すものと指摘した。それらは，自然を活用しながら周りの風景を取り込んで庭園を完成し，現実の景色に風景を見る人間の習性の確立を示唆している。そのような庭園が広がる一方で，当時，英国人からは，日本のユリやキクなどの英国にとっての珍種や有用植物，盆栽庭園，矮性植物種が注目された。それらの中でも，タケ，シュロ，斑入りヤツデは日本庭園の構成要素として重要であったと『Gardeners' Chronicle』に記載されている [10]。このように英国には，独自の庭園文化の歴史を持ちながらも，19 世紀後半以降日本庭園に関する記述が残っている。また，英国の日本庭園は，英国風景式庭園と同様に自然を取り込む「絵画的」感性も兼ね備えており，このことは日本庭園の感性にも通じるものであったと考えられる。このような背景の中で，現代の英国人の日本庭園に関するイメージを調査することは，文化の継承と現状を知る意味で重要でありかつ，これからの海外の日本庭園修復にあたり，その変遷と経緯を理解する必要性を示すことは重要であると考えられる。

近年，海外日本庭園修復の動きが活発化しているが，博覧会庭園や国際交流に起因する庭園に関わる研究 [11]の中で，鈴木 [12]は，「20 世紀は日本庭園が海を渡った時代であった。そして 21 世紀を迎えた今，これら海外の日本庭園とその文化を次代に継承すべく，それぞれの国や地域にみあった庭園管理と運営の手立てのグローバルな構築が望まれている。」と述べている。現地庭園の修復や管理に関する報告や調査に関しては，海外の日本庭園作庭や修復の現状をまとめた福原 [13][14]，ポートランド市ワシントン・パーク日本庭園の形成過程の特徴を調査した土沼・鈴木 [03]などの研究がある。しかし，プラントハンターなどの活躍があった英国での日本庭園に関する研究調査は少ない。その中で，英国の日本庭園観を知ることができる研究としては文献を通じ間接的に考察した渡辺 [15]および片平 [16][17]が，園芸植物の発展と歴史を知る上で園芸雑誌から文化的背景を読み取った研究として新妻 [18][19]や熊倉・柴田 [10]が重要である。また，日本庭園そのものについては，その総合性・全体性・体系性への思索と方法を研究した進士

[20]や，京都の庭園内で来園者（日本人・外国人）に対して日本庭園観をアンケート調査した鈴木ら[21]，国内外の庭園スライドをもとに庭園景の評価構造を大学生被験者について調査した鈴木・井上[22]，知日家欧米人の日本庭園の認識調査をした鈴木[23]，欧米人の日本庭園観をまとめた鈴木[24]などの研究がある。

国別の比較研究では，山下ら[25]が日本人と英国人における庭風景知覚の写真比較調査から相違を分析し，その分析結果を踏まえた上で，住宅建築を含めた環境推論について研究をおこなっている。環境推論とは，個人が環境を通じて表現し記号化したアイデンティティーを他者が読み取ることによる推論で，環境と人間の相互作用を説明する理論のひとつである。環境推論による研究としては，アンケート調査によって日本の庭園に対する見方の普遍性と特殊性について日英間の比較調査をした大森らの研究[26]，居住国と教育の影響分析で国別に大学生を被験者として調査した羽生らの研究[27]，国内外の大学生を被験者として住宅庭園が与える国別のイメージ調査をおこなった大森らの研究[28]，国内外の大学生を被験者として日英の庭園の弁別に関する調査研究をおこなった羽生らの研究[29]などがあげられる。

現在の海外日本庭園への注目度の高まりや，庭園修復期にある庭園整備の増加を考えると，現地関係者の日本庭園に対する意識に関する調査をおこなうことは，対象とする庭園の歴史的背景の理解とその維持を考える上で有効であると考えられる。これは，上述の環境推論の研究からも国ごとに景観イメージが異なり，文化的背景によって違った印象を受けることが分析され確認されていることからも明らかである。同様の研究をおこなうことによって調査結果に基づいた庭園の修復をおこなうことで各庭園に適した形での日本の文化を伝えることができ，維持管理の継続にもプラスになると考えられる。通常，意識調査をおこなう上では，アンケート調査がおこなわれることが多い。これは個々の被験者の主観的判断を解析し，多少のバイアスはあるが，被験者が持つイメージの属性による違いや個人差などを解析し，関係性を定量的に抽出できるためである。

そこで本章では，日英で同様のアンケート調査をおこなうことによって英国人の日本庭園に関する意識を確認し，さらに日本人の意識との比較をおこなうことによって，英国人と日本人がそれぞれ日本庭園から受ける印象を比較することとした。現在，世界各地で荒廃していると考えられる海外の日本庭園の整備においては，日本人固有の常識のみで庭園を整備するのではなく，お互いの文化・存在価値や意識の確認が必要

であり，その上での修復が急務である。すなわち，各庭園の時代背景を把握して，それらの変遷を明らかにすることが重要であると考えられる。本章では，日本庭園に関心がある英国人と日本人が日本庭園に対して持つ印象を比較することによりその違いを把握し，英国における日本庭園の維持管理に資する考察をおこなうことを目的とした。

3－2　研究方法

本研究では，日本庭園に関心がある，もしくは日本庭園には関心はないが植物に関心がある英国人が英国の日本庭園をどのように捉え，どのような感性で日本庭園を認識しているのかを把握するために，現地でアンケート調査をおこなった。さらに，日本人の造園関係者に対しておこなった同じ調査の結果との比較によりその違いを分析し，英国における日本庭園の価値評価を考察した。同様の先行研究は前述したとおりであるが，そこでは写真比較によるアンケート調査をおこなっており，写真比較は，言語・文化の異なる英国人と日本人の間で質問項目や庭園イメージを共有し，比較できるツールとして有効であると考えられる。そのため，本章におけるアンケート調査でも写真を用い, 異なる属性を待つグループの特徴を把握し, 比較することを試みた。

3-2-1　アンケート調査の内容

アンケートは，回答者属性，植物写真，空間要素写真，および日本庭園のイメージに関する 4 つの設問で構成した。写真の選択においては日本人と英国人が持つ知識や文化的背景との比較を偏りなくおこなうために，両国の文化に対する感性の違いを考慮した。選定した写真による影響を取り除くため，写真の選択は英国の日本庭園研究者と話し合い決定した。まず 2019 年に英国において，英国の研究者と写真・アンケートの内容確認をおこなった [30]。植物写真の選定では，英国と日本の双方から示された日本産の植物種と，英国園芸雑誌『Gardeners' Chronicle』[31]で抽出された主な日本の植物 [10]を考慮に入れ，用いる植物 6 種を選んだ。すなわち，19 世紀後半からプラントハンターや園芸商などによって英国に持ち込まれた記録 [32]および英国に現存する日本からの導入植物を基準としてマツ，シュロ，ヤツデ，ユリ，タケ，およびキクの 6 種を選んだ。キクについては，『Gardeners' Chronicle』に，キク展示，品種の多さ，美しさが賞賛された記録が多く認められたことから選んだ。マツは紹介された当初は，

盆栽種として矮小化されたものが注目されたが，19 世紀後半から作庭された日本庭園で現存するマツは，英国在来種のヨーロッパアカマツであるためその自生地の写真を選んだ。シュロとヤツデは，Gunnersbury House や Holland Park 日本庭園跡に現存し，英国人にとって異国情緒を表現する日本庭園植物種と捉えられていると考えた。ユリとタケについては，日本産ユリの球根販売や日本各地からのタケの輸入の記録が『Gardeners' Chronicle』にあるほか，19 世紀後半から 20 世紀前半に作庭された，英国の日本庭園で現地確認ができたことから選択した。

日本庭園の空間要素写真の選択については，①英国の日本庭園の歴史的背景に関わるプラントハンターの行動域を踏まえて北海道から沖縄におよぶ範囲からおこなうこと，②海外の図録などに多く登場している日本庭園は可能な限り除くこと，③日本庭園を想起させないように，囲まれた空間の中に人工要素（庭園要素）が入るものは可能な限り除き，自然風景の中に人工要素が含まれている写真を選ぶこと，を基準とした。さらに，日本庭園の多くが象徴的自然風景式であり，美的な意味を担う自然景観をモチーフにして作られている[33]ことを踏まえて，日本庭園に対していだくイメージとして，自然風景 6 種と庭園要素 6 種の写真を選んだ。自然風景には，日本を連想できる写真を選定した。具体的には，海浜，棚田，山，滝，湿原および池である。山に用いた写真には富士山を，池の写真には日本庭園における借景をイメージできるものを用いた。庭園要素には，添景としての庭園素材や，ビスタ[34]のように遠景でありながらも人工物により，しぼり景で空間構成が成り立っているものを選定した。具体的には，岩，鳥居，灯篭，白砂，四阿および橋とした。

アンケート作成にあたっては，前述の英国の日本庭園研究者と英文アンケートを先に作成し（図 3－1），その上で，筆者が翻訳をおこない日本人用のアンケートを作成した。翻訳・逆翻訳を繰り返して，正確な訳語になるよう心がけ，両アンケートに誤差が生まれないようにした。アンケート調査はいずれも 2019 年秋におこない，日本造園学会関西支部大会の参加者（以下 JK と記す），英国 Japanese Garden Society 総会の参加者（以下 JGS と記す），および Hardy Plants Society, Essex 支部大会の参加者（以下 HPS と記す）に対しておこなった（表 3－1）。日本造園学会は，1925 年に設立された約 2,250 名の会員を持つ学術団体で，そのうち関西支部は約 460 名で構成されている，日本庭園の知識を有する団体である。JGS は，1993 年に設立され，英国全土に約 600 名の会員を持つ日本庭園研究を行う市民団体であり，構成員は日本および

世界の日本庭園を訪れており，活動を通して多くの日本庭園に触れ知識が豊富である。年に一度，全体会合（総会）となる National Annual General Meeting が開催されている。HPS は 1957 年に設立され，英国全土に約 7,500 名の会員を持ち，45 グループで活動しているが，本調査での対象グループは Eseex 支部とした。HPS は市民団体であり，希少な耐寒性植物や多年生草本植物の維持を目的に活動をおこなっている。構成員は活動を通して植物に関する知識はあるものの，日本や日本庭園に関する経験や知識は十分ではない。本研究では，JK および JGS の構成員を日本庭園に関する知識が十分にあるグループとして扱い，HPS の会員を英国の植物に関する知識はあるものの日本庭園に関する知識は十分でないグループとして扱うこととした。質問紙の配布はそれぞれの団体の会合でおこない，JK では 2019 年 10 月 27 日に 92 名に，JGS では 2019 年 10 月 12 日に 82 名に，HPS では 2019 年 10 月 20 日に 86 名に配布し，すべてを回収した。また，質問紙の回収は日本・英国ともに配布日当日に直接回収の形でおこなった（表 3－1）。

調査内容の概要を表 3－2 に整理した。回答者属性に関する設問には，性別と年齢および日本庭園に興味を持ってからの期間を設定した。日本庭園の植物に関わる設問には 6 種の植物種の写真（表 3－3）を，日本庭園の空間要素に関わる設問には自然風景 6 種と庭園要素（景物）6 種の計 12 種（自然風景：A, B, C, D, F, J と庭園要素：E, G, H, I, K, L ）の写真（表 3－4）を用意した。それぞれの設問では，「日本庭園の空間要素として，最も強く関係性を感じるものを 1 とし，そのように感じる順位を重複なしの完全順位回答で示すように指示した（図 3－1）。日本庭園のイメージに関する設問では，日本庭園のイメージを一単語で記入するように指示した。この設問に対して得られた回答については，以後「イメージ」と示す。

表 3－1　アンケート対象団体の概要

アンケート配布対象	日本造園学会関西支部(JK)	Japanese Garden Society(JGS)	Hardy Plants Society(HPS)
実施期間	2019/10/27	2019/10/12	2019/10/20
配布場所	年1回の関西支部大会（会員）/和歌山大学	年1回の総会（会員）/英国Harrogate	月1回の会合（会員）/英国Essex
配布方法	配布（筆者）	配布（英国代理人）Jill Raggett	配布（英国代理人）Jill Raggett
回収方法 回収結果	当日回収，母集団：92 回収：67，有効：64（重複回答は分析に不使用）　N=63	当日回収，母集団：82 回収：66，有効：49（重複回答は分析に不使用）　N=45	当日回収，母集団：86 回収：58，有効：38（重複回答は分析に不使用）　N=37

表 3－2　アンケート調査内容の概要

項目	内容	形式
回答者属性	性別・年齢・日本庭園に興味を持った期間	単一回答
日本庭園・植物写真	マツ・シュロ・ヤツデ・ユリ・タケ・キクの6種（Gardeners' Chronicleで日本庭園の植栽として記載）	6段階評価（1を最も強い関係性として順位付けを要求，重複なし）
日本庭園・空間要素写真	自然風景6種 庭園要素6種 計12種 （自然風景は北海道から沖縄を含む地域より選択，庭園要素はGardeners‘ Chronicleで記載されたものを含めた）	12段階評価（1を最も強い関係性として順位付けを要求，重複なし）
日本庭園のイメージ	自由記述	一単語を要求

Questionnaires about the Japanese-style garden in UK

I am a doctoral program student in landscape at Kyoto University. My research concerns how the Japanese garden has been accepted and evolved in the UK. These results will be used as data for my dissertation in Japanese garden and cultural exchange. The survey is anonymous. All responses will be statistically processed, and I guarantee that information related to the privacy of respondents will never be disclosed.

(1) Gender:

☐Male　☐Female　☐Do not wish to declare　Please check✓

(2) Age:

☐15～20　☐21～30　☐31～40　☐41～50　☐51～60　☐61～70
☐71～80　☐81～above

(3) How long have you been interested in the gardens of Japan?

☐less than one year　☐1year～3years　☐5years～10years
☐longer than 10years

(4) Please select those plant images which you feel make the strongest connection to the Japanese-style in UK, by numbering then 1 to 6, where 1 is the most influential, 6 is the least influential.

☐ Pine 1

☐ Trachycarpus 2

☐ Fatsia 3

☐ Lily 4

☐ Bamboo 5

☐ Chrysanthemum 6

☞☞ Please turn over…….. ☞☞☞

図 3－1　日本庭園から受ける印象に関するアンケートの質問用紙（表）（英語版）

(5) Please select those landscape pictures which you feel make the strongest connection to the Japanese-style in UK, by numbering then 1 to 12, where 1 is the most influential, 12 is the least influential.

☐ A

☐ B

☐ C

☐ D

☐ E

☐ F

☐ G

☐ H

☐ I

☐ J

☐ K

☐ L

(6) Suggest a word that summarises Japanese garden in a word?　(　　)

That's all for the question. Thank you very much for your cooperation.

Doctoral Course of Laboratory of Landscape Architecture at Kyoto University

Ms. Sanae Kumakura

図 3－1　日本庭園から受ける印象に関するアンケートの質問用紙（裏）（英語版）

3-2-2 アンケート結果の分析方法

JK，JGS および HPS から得られた植物 6 種および空間要素 12 種に関する回答結果の分析については，クラスカル・ウォリスの検定を用い，3 群の差の検定をおこなった。これらの検定においては有意水準を 5%とし，事後検定としては Dwass – Steel – Critchlow – Fligner pairwise comparisons（以下 DSCF 多重比較）(jamovi 1.2.27)による多重比較をおこなった。また，各回答から得られたスピアマンの順位相関係数をもとに非類似度を算出し，これをデータ間の距離として ward 法による階層クラスター分析をおこなった。日本庭園の「イメージ」に関しては，JGS と HPS では英文のため筆者が翻訳をおこない，日本語での集計比較をおこなった。

表 3－3　アンケートで用いた植物 6 種

番号	英語	日本語	番号	英語	日本語
1	Pine	マツ	4	Lily	ユリ
2	Trachycarpus	シュロ	5	Bamboo	タケ
3	Fatsia	ヤツデ	6	Chrysanthemum	キク

表 3－4　アンケートで用いた空間要素 12 種と具体的な撮影対象

記号	日本庭園空間要素	自然風景	庭園要素	撮影対象
A	海浜	○		天橋立
B	棚田	○		棚田
C	山	○		富士山
D	滝	○		赤目の滝
E	岩		○	磐座
F	湿原	○		釧路湿原
G	鳥居		○	春日鳥居
H	灯篭		○	春日灯篭
I	白砂		○	向月台（白砂）
J	池	○		毛越寺
K	四阿		○	識名園（四阿）
L	橋		○	称名寺（たいこ橋）

3－3　結果

3-3-1 3 群のデータ比較の分析結果

JK，JGS および HPS の 3 群データのうち，植物 6 種の集計結果を図 3－2 に，空間要素 12 種の集計結果を図 3－3 にそれぞれ示した。JK（有効回答数 63），JGS（有効回答数 45）および HPS（有効回答数 37）はそれぞれ回答者数が異なるため，回答者数に対する割合で示している。

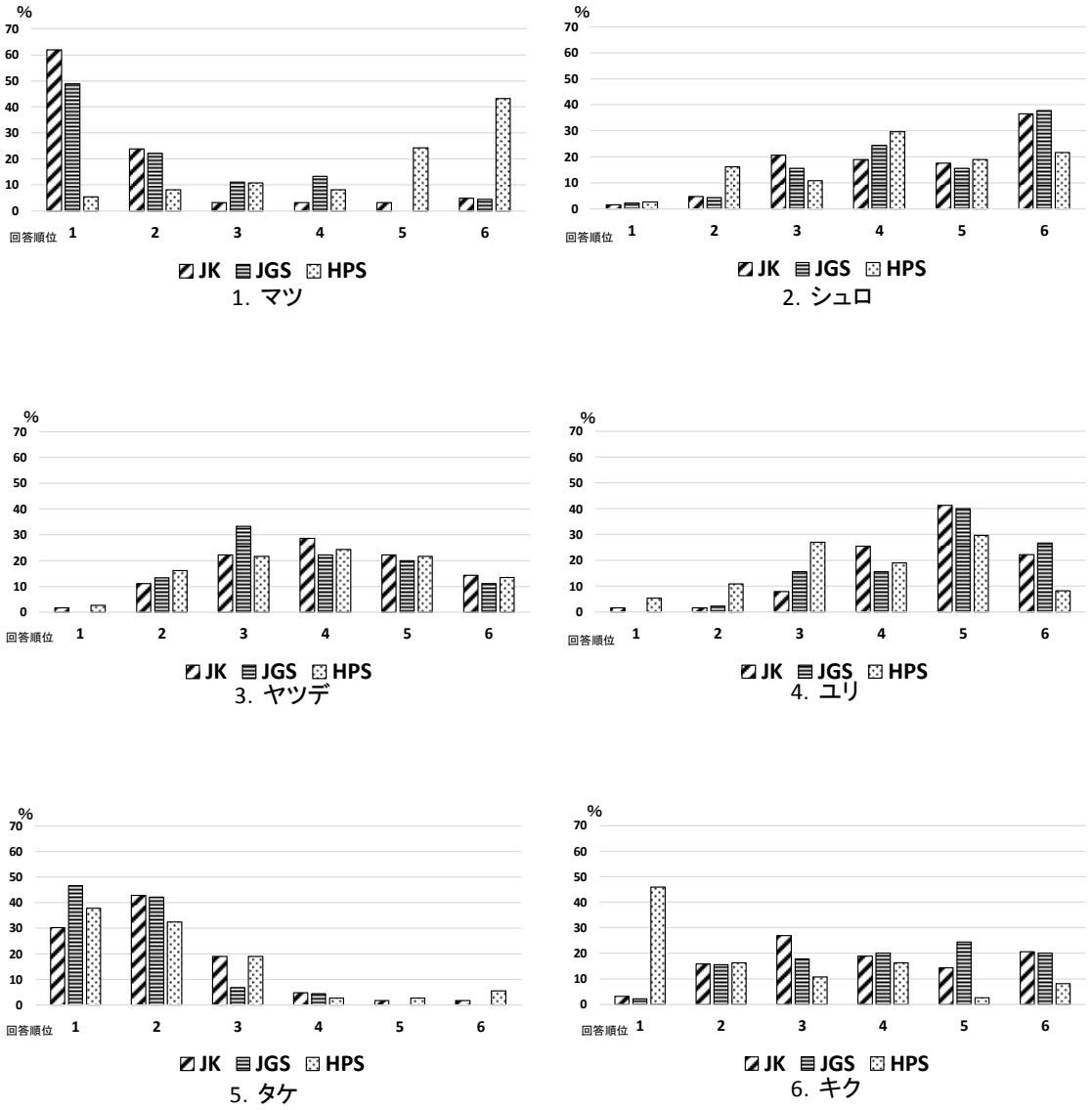
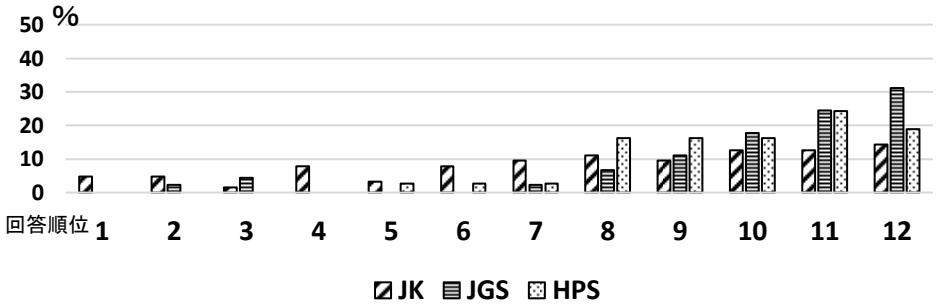
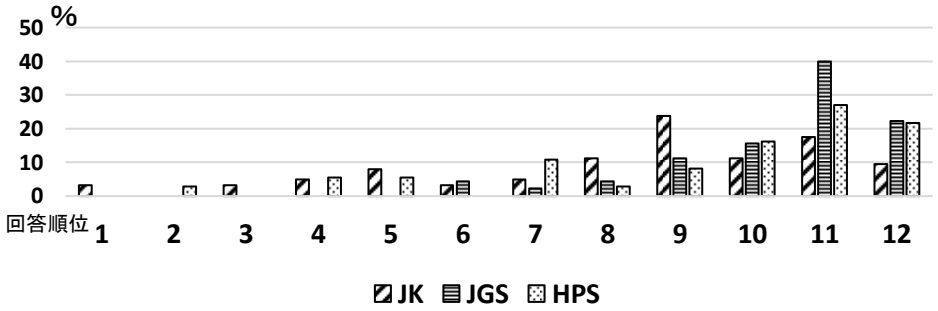


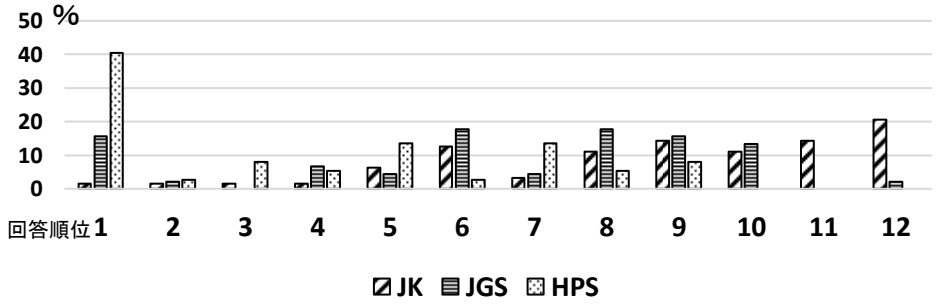
図 3－2　植物 6 種に関する順位の結果



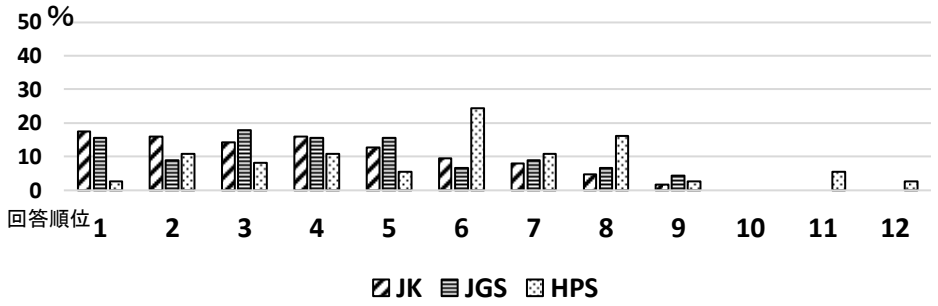
A.海浜



B.棚田

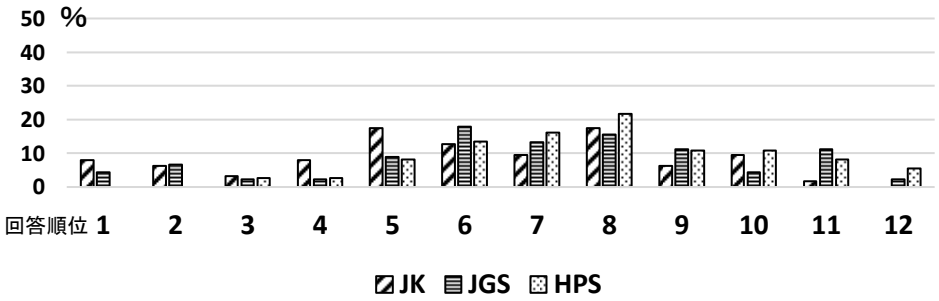


C.山

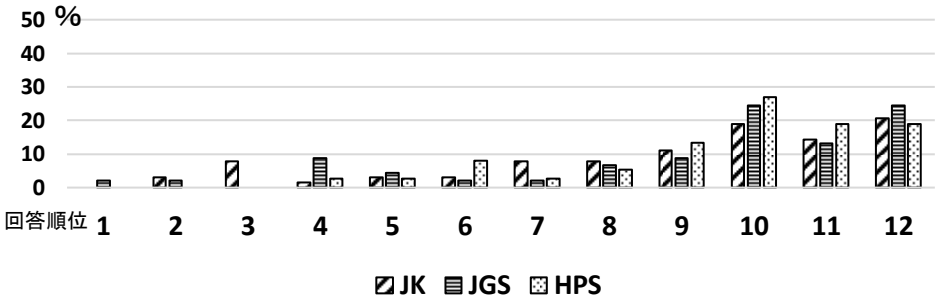


D.滝

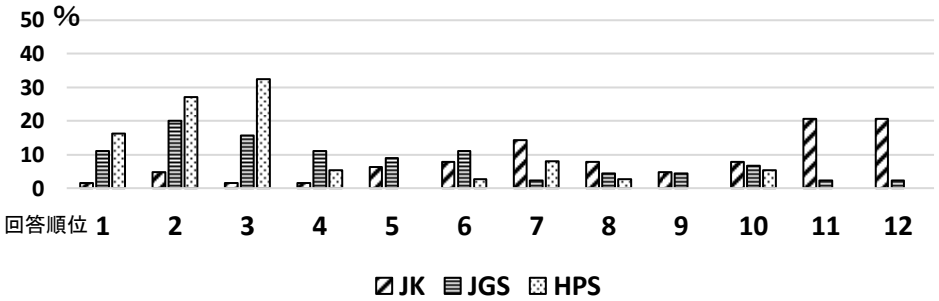
図 3－3　空間要素 12 種に関する順位の結果（1/3）



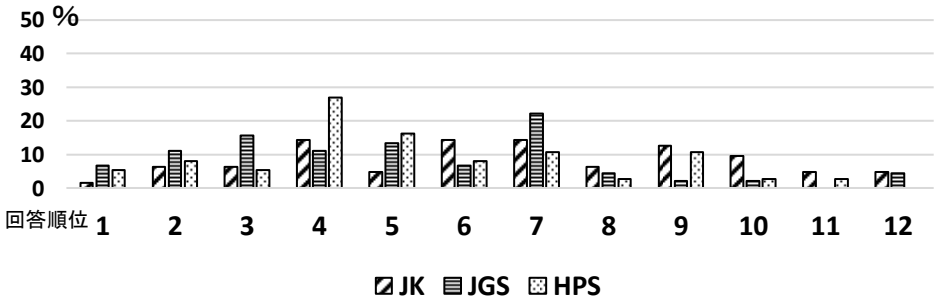
E.岩



F.湿原

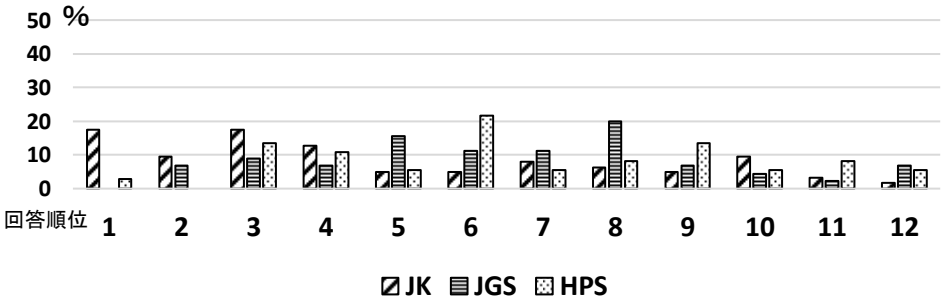


G.鳥居

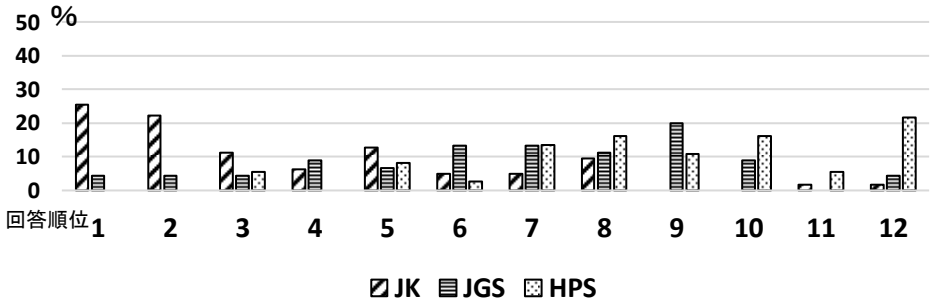


H.灯篭

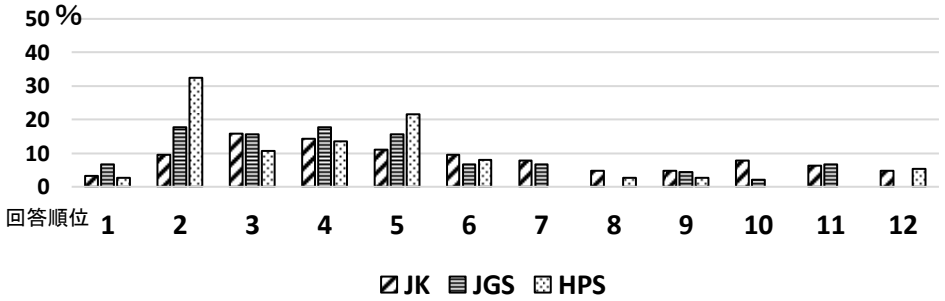
図 3－3　空間要素 12 種に関する順位の結果（2/3）



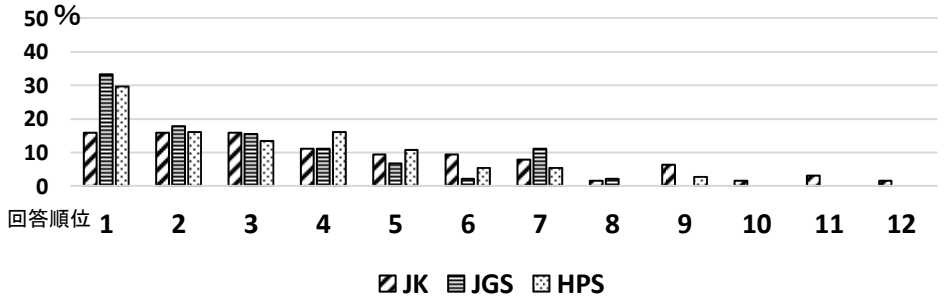
I.白砂



J.池



K.四阿



L.橋

図 3－3　空間要素 12 種に関する順位の結果（3/3）

3-3-2　植物写真から得られたデータの比較

植物 6 種について得られた，JK，JGS および HPS の 3 群間でクラスカル・ウォリスの検定（有意水準 5%）をおこなった結果，マツ，ユリおよびキクの 3 種において，有意差（p＜0.01）が確認された（表 3－5)。さらに事後検定として DSCF 多重比較をおこなった結果（図 3－4)，HPS－JK 間，JGS－HPS 間で有意差(1%)が確認され（表 3－5)，日本庭園に関する知識があるグループ（JK と JGS）と知識が十分でないグループ（HPS）との間に差があることが示された。

植物 6 種に関する結果（図 3－2）からは，マツとキクの 2 種で大きな違いが確認できた。マツについて最も関係性を強く感じるランク 1 をつけた割合は，JK で 61.9%，JGS で 48.9%，HPS で 5.4%となった。一方，最も関係性を弱く感じるランク 6 を記した割合は, JK で 4.8%, JGS で 4.4%, HPS で 43.2%であった (図 3－2 の 1.マツ)。知識ありのグループの中では，マツが日本庭園の要素として強く感じられ，知識が十分でないグループでは弱いことが示された。一方，キクについては，最も関係性を強く感じるランク 1 をつけた割合は，JK で 3.2%，JGS で 2.2%，HPS で 45.9%となった。さらに，最も関係性を弱く感じるランク 6 をつけた割合は，JK で 20.6%，JGS で 20.0%，HPS で 8.1%となった (図 3－2 の 6.キク)。知識が十分でないグループでは，日本庭園に対してキクのイメージが強く，次いでタケが続いた（図 3－2 の 5.タケ)。

DSCF 多重比較の結果，マツ，ユリ，キクでは，日英の知識あるグループ間で差は見られなかったが，両グループと知識が十分でないグループとの間では有意差が見られた。またシュロ，ヤツデおよびタケでは有意差はなく，JK，JGS および HPS のいずれのグループにおいても同じ感性を持っていると考えられた（図 3－4)。

3-3-3　空間要素写真から得られたデータの比較

空間要素 12 種について得られたデータを，JK，JGS および HPS の 3 群間でクラスカル・ウォリス検定（有意水準 5%）をおこなった結果（表 3－6），湿原を除く 11 種で有意差が確認された。さらに，事後検定として DSCF 多重比較をおこなった結果（図 3－5）からは，空間要素 12 種では，特に山と池で 3 群間の知識に関わらず JK－JGS，JK－HPS および JGS－HPS の各グループ間に有意差があることが示された。また，鳥居では JK－JGS 間と JK－HPS 間で有意差が示され，海浜と滝では JK－HPS 間と JGS－HPS 間で有意差が示された。さらに，棚田では JK－JGS 間で，岩では JK－HPS 間で有意差が示された。灯篭と白砂では JK－JGS 間と JK－HPS 間で，四阿では JK－HPS 間で，橋では JK－JGS 間で有意差(P<0.05)が示された。

空間要素 12 種の中では，山，白砂および池の 3 種 で JK，JGS および HPS の 3 群間の回答の両極対比で大きな差異が確認できた。具体的には，山ではランク 1 および 12 に HPS で 40.5%と 0.0%，白砂ではランク 1 および 12 に JK で 17.5%と 1.6%，さらに池ではランク 1 および 12 に JK で 25.4%と 1.6%，HPS で 0.0%と 21.6%であった（図 3－3)。

山では，もっとも関係性を強く感じるランク 1 をつけた割合は，JK で 1.6%，JGS で 15.6%，HPS で 40.5%となった。さらに，最も関係性を弱く感じるランク 12 をつけた割合は，JK で 20.6%，JGS で 2.2%，HPS で 0.0%となった（図 3－3 の C.山)。山について日本人は庭園要素として関係性を強く感じていないが，英国人は，知識の有無に関わらず日本庭園の要素として関係性を強く感じていることが示された。

白砂では，もっとも関係性を強く感じるランク 1 をつけた割合は，JK で 17.5%，JGS で 0.0%，HPS で 2.7%となった。さらに，最も関係性を弱く感じるランク 12 をつけた割合は，JK で 1.6%，JGS で 6.7%，HPS で 5.4%となった（図 3－3 の I.白砂)。日本人は白砂を庭園要素として関係性を強く感じているが，英国人は日本庭園の知識の有無に関わらず，白砂を日本庭園の要素として認識している割合は低かった。

池では，もっとも関係性を強く感じるランク 1 をつけた割合は，JK で 25.4%，JGS で 4.4%，HPS で 0.0%であった。さらに，最も関係性を弱く感じるランク 12 をつけた割合は，JK で 1.6%，JGS で 4.4%，HPS で 21.6%となった（図 3－3 の J.池)。日本人は池を庭園要素として関係性を強く感じているが，英国人は知識ありのグループは日本庭園要素として関係性を感じている一方で，知識が十分でないグループでは日

本庭園の要素としてあまり感じていないと判断された。

DSCF 多重比較の結果，滝では，知識ありのグループ間で差は見られなかったが，知識が十分でないグループに関しては有意差が認められた。また湿原に関しては，有意差は認められず, JK, JGS および HPS ともに同じ感性を持っていると考えられる。次に海浜，鳥居，灯篭および白砂では，知識の有無に関わらず，日本人（JK）と英国人（JGS・HPS）間に有意差が見られた。そして，山と池では，すべての群間で有意差が認められた。さらに，棚田と橋では，知識ありの 2 グループ間（JK と JGS）の間に有意差がみられ，岩と四阿では，JK と HPS の間で有意差が認められた。

表 3－5　植物 6 種に関するクラスカル・ウォリスの検定結果

番号	植物名		P値	番号	植物名		P値
1	Pine	マツ	＜.001**	4	Lily	ユリ	0.001**
2	Trachycarpus	シュロ	0.235	5	Bamboo	タケ	0.092
3	Fatsia	ヤツデ	0.667	6	Chrysanthemum	キク	＜.001**

**P＜0.01

表 3－6　空間要素 12 種に関するクラスカル・ウォリスの検定結果

記号	空間名	P値	記号	空間名	P値
A	海浜	＜.001**	G	鳥居	＜.001**
B	棚田	＜.001**	H	灯篭	0.008**
C	山	＜.001**	I	白砂	0.003**
D	滝	＜.001**	J	池	＜.001**
E	岩	0.005**	K	四阿	0.017*
F	湿原	0.629	L	橋	0.020*

*P＜0.05 **P＜0.01

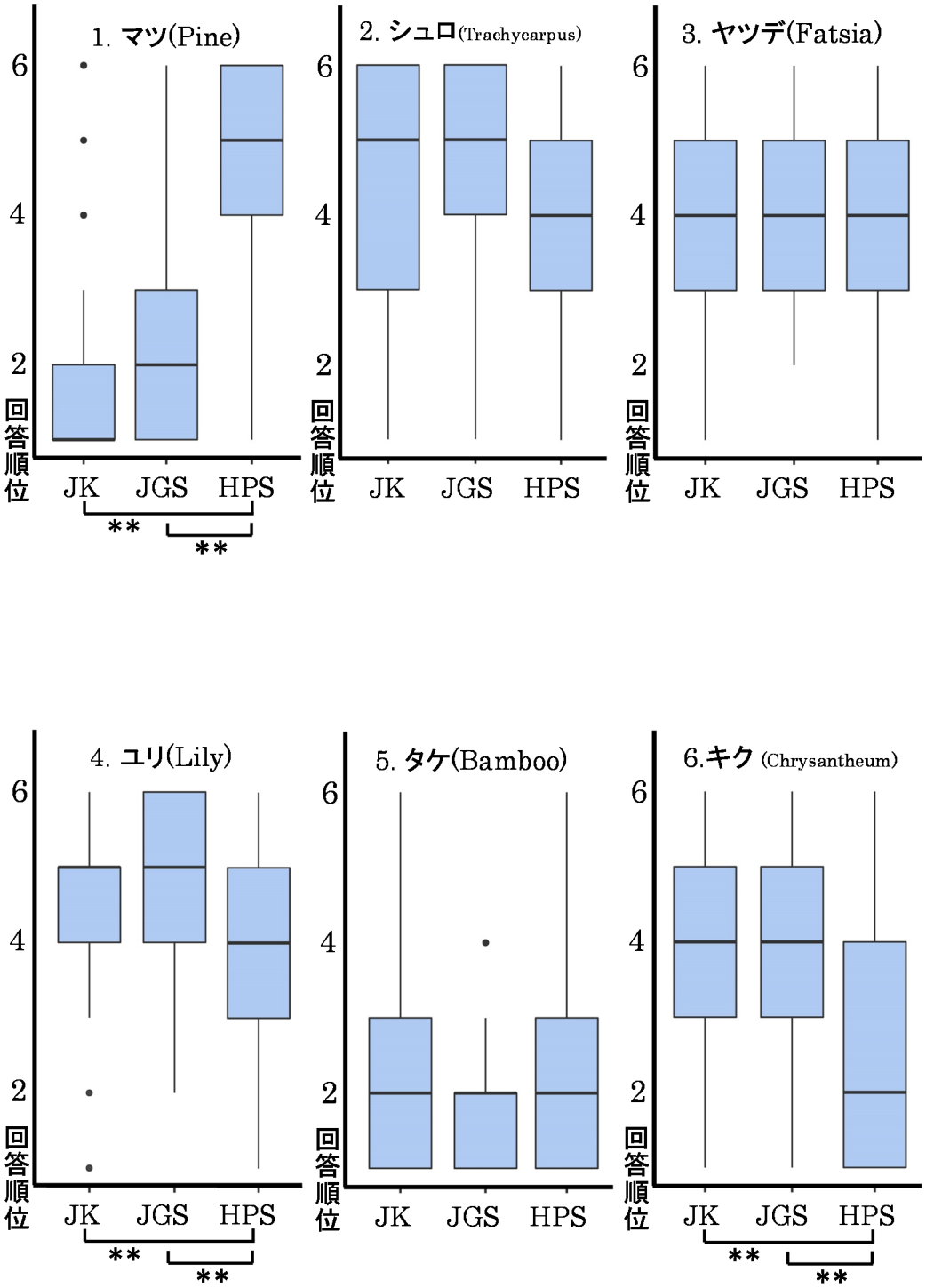
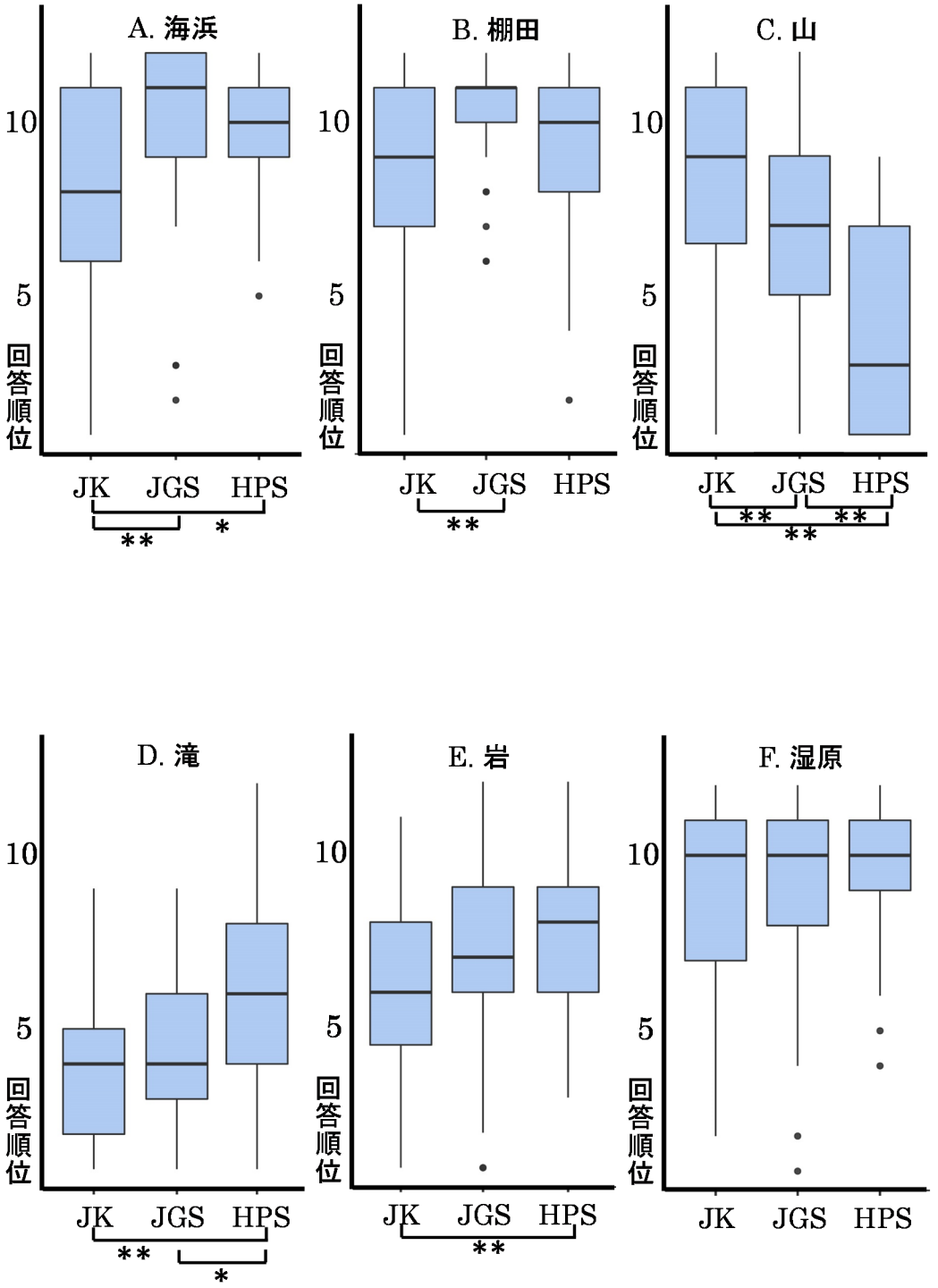
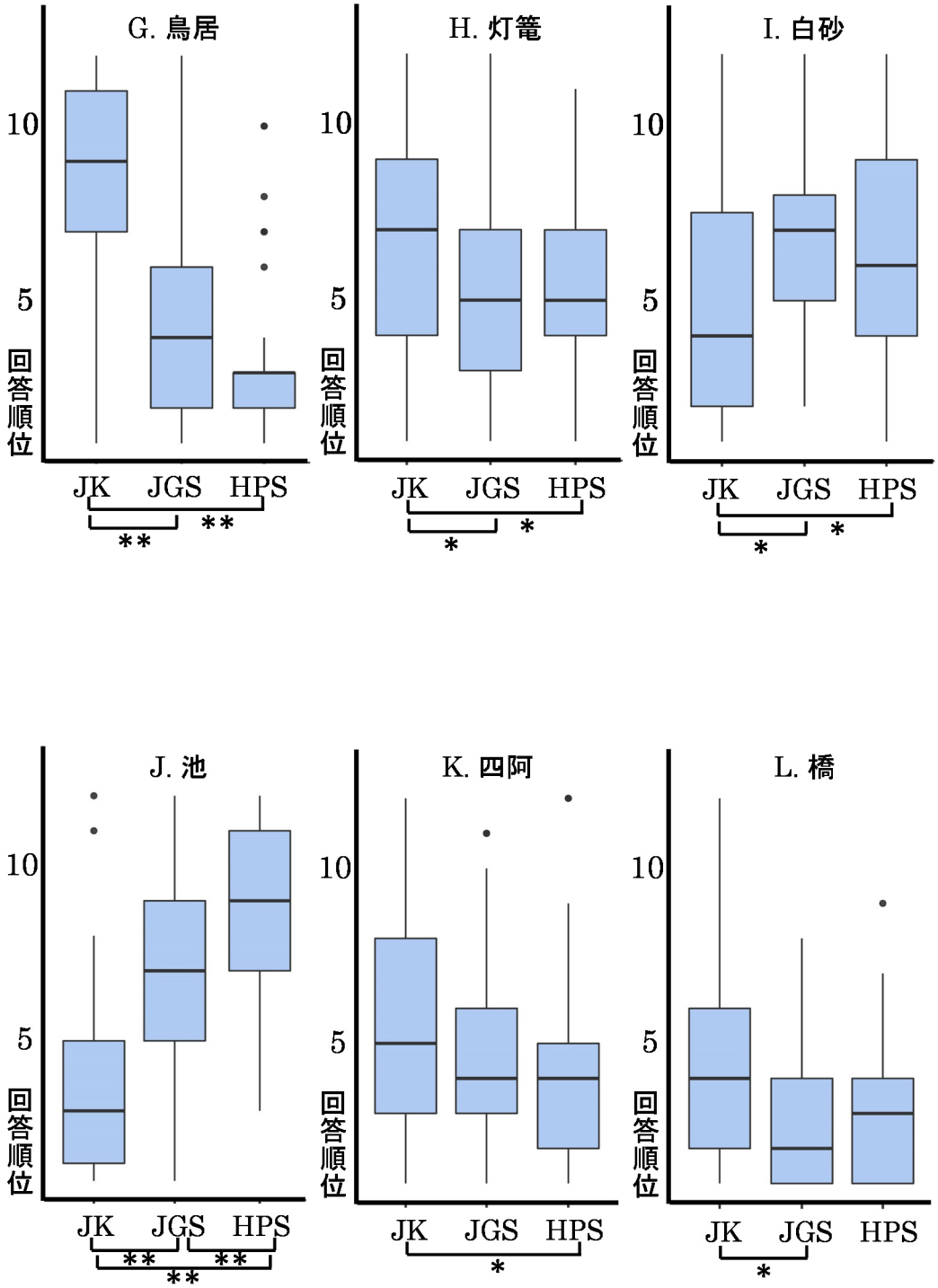


図 3－4　植物に関する 3 群間での DSCF 多重比較の結果



*P＜0.05 **P＜0.01

図 3－5　空間要素に関する 3 群間での DSCF 多重比較の結果（1/2）



*P＜0.05 **P＜0.01

図 3－5　空間要素に関する 3 群間での DSCF 多重比較の結果（2/2）

3-3-4　空間要素に関する各群の階層クラスター分析

空間要素に関する各群のクラスター分析の結果を図 3－6，図 3－7，図 3－8 にそれぞれ示した。

JK に関しては 2 つのクラスターに分かれ，クラスター1 では自然風景 5 項目（滝，湿原，山，海浜，棚田）と庭園要素 1 項目（岩）が，クラスター2 では庭園要素 5 項目（鳥居，灯篭，白砂，四阿，橋）と自然風景 1 項目（池）がそれぞれ分類された。山は，自然風景の多いクラスターに，池は庭園要素の多いクラスターに含まれた（図 3－6）。

JGS でも 2 つのクラスターに分かれ，クラスター1 では庭園要素 5 項目（岩，鳥居，灯篭，四阿，橋）が，クラスター2 では自然風景 6 項目（海浜，棚田，山，滝，湿原，池）と庭園要素 1 項目（白砂）が分類された。山と池および白砂は，自然風景が多いクラスターに含まれた（図 3－7）。

HPS に関しても 2 つのクラスターに分かれ，クラスター1 では自然風景 3 項目（滝，湿原，池）と庭園要素 3 項目（岩，四阿，白砂）が，クラスター2 では自然風景 3 項目（海浜，棚田，山）と庭園要素 3 項目（鳥居，橋，灯篭）が分類された。HPS では 2 つのクラスターに，自然風景と庭園要素の項目が混在して分類され，池と山は異なるクラスターに含まれた（図 3－8）。

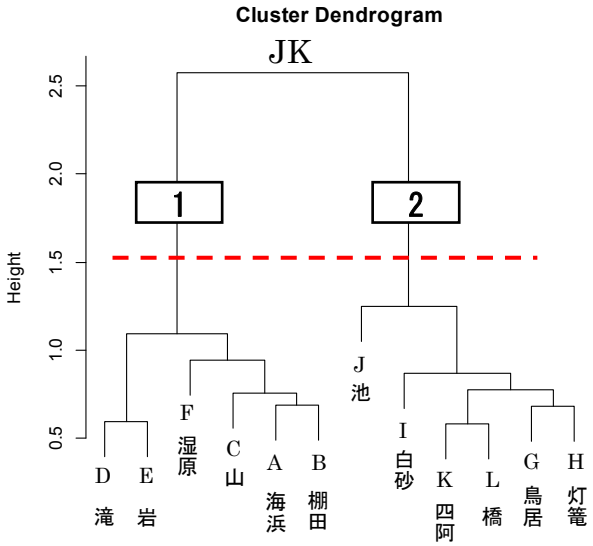


図 3－6　JK の空間要素に関する階層クラスター分析結果

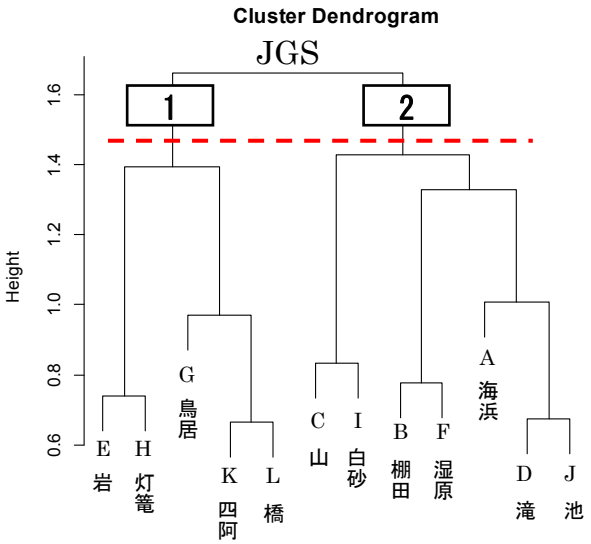


図 3－7　JGS の空間要素に関する階層クラスター分析結果

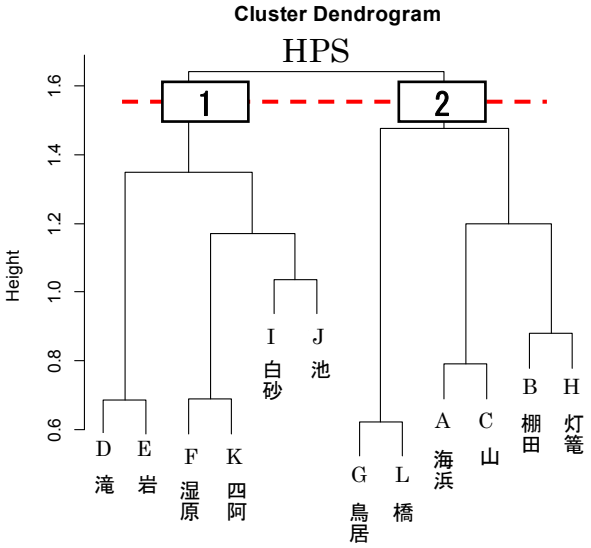


図 3－8　HPS の空間要素に関する階層クラスター分析結果

3-3-5　日本庭園の「イメージ」の分析

各群の日本庭園の「イメージ」の分析結果を表 3－7，表 3－8，および表 3－9 に示した。JK（表 3－7）では，静的空間を表す「閑静，静，静か，静けさ，静寂，静謐，静的空間」が 19%を占め，次に自然観を意味すると考えられる「自然，自然感，抽象的自然」が 16%を占めた。JGS（表 3－8）では，「Tranquil, Tranquility（平穏）」が 35%を占め，次に「Calm, Calming（平静）」，「Peace, Peaceful（平和）」，「Serene, Serenity（晴朗）」が続いた。HPS（表 3－9）では，「Peace, Peaceful（平和）」が 21%を占め，次に「Tranquil, Tranquility（平穏）」が 10%となった。下位にあらわれた「イメージ」としては，JK では，和，わび・さび，石や庭園様式と結びつく山水・借景・水面・橋などのイメージ語句が続いた。JGS と HPS では，「Controlled（統制）」，「Disciplined（統制）」，「Spiritural（精神）」が挙げられ，庭園空間を評価するイメージ語句が続いた。全体として，英国人と日本人ともに，穏やかな静的空間と自然観のイメージを抱いていることが推測できた。

表 3－7　日本庭園「イメージ」に関する JK の結果（N＝62）

回答者数	日本造園学会関西支部（JK）「イメージ」一言	割合
12人	①静（閑静・静か・静けさ・静寂・静謐・静的空間を含む）	19.35%
10人	①自然（自然感・自然の抽象を含む）	16.13%
3人	①和	4.84%
3人	①わびさび	4.84%
3人	①石（石組・岩）	4.84%
各1人	①異空間, ②憩い, ③気韻生動, ④権力, ⑤山水, ⑥借景, ⑦宗教性（神・神秘性）思想性, ⑧昇華, ⑨小規模の山林, ⑩神秘, ⑪深緑, ⑫水面, ⑬精神的, ⑭絶対美, ⑮繊細, ⑯洗練, ⑰想像, ⑱抽象, ⑲調和, ⑳時, ㉑和み, ㉒日本, ㉓橋, ㉔美, ㉕人と自然との共生, ㉖風情, ㉗文化, ㉘もてなし, ㉙物語, ㉚やすらぎ, ㉛用と景	各1.61%

表 3－8　日本庭園「イメージ」に関する JGS の結果（N＝57）

回答者数	JGS「イメージ」一言（筆者翻訳）	割合
20人	①Tranquil・Tranquility（平穏）	35.09%
6人	①Calm・Calming（平静）	10.53%
4人	①Peace・Peaceful（平和）	7.02%
4人	①Serene・Serenity（晴朗）	7.02%
3人	①Landscape（風景）	5.26%
各2人	①Contemplative（静観的），②Control・Controlled（統制），③Harmonious・Harmony（調和），④Nature（自然），⑤Spirt・Spiriual（精神）	各3.51%
各1人	①Green（緑），②Inspirational（感動），③Mindfulness（心に止める），④Order not chaous（無秩序でない），⑤Precise（正確な），⑥Restorative（元気・復興），⑦Shakkei（借景），⑧Stunning（魅力的），⑨Symbolic（象徴的），⑩Thoughtful（思考深い）	各1.75%

表 3－9　日本庭園「イメージ」に関する HPS の結果（N＝39）

回答者数	HPS「イメージ」一言（筆者翻訳）	割合
8人	①Peaceful・Peace（平和）	20.51%
4人	①Tranquil・Tranquility（平穏）	10.26%
2人	①Bonsai（盆栽）	5.13%
2人	①Magic・Magical（魅力的）	5.13%
2人	①Serene・Serenity（晴朗）	5.13%
各1人	①Acer（モミジ），②Architectural（構造的），③Budist（仏教），④Calming（平静），⑤Crafted（技巧），⑥Disciplined（統制），⑦Formality（正式），⑧Immaculate（清浄），⑨Maniculated（よく手入れされた），⑩Meticulous（細部まで正確な），⑪Neat（上品な），⑫Order（整頓），⑬Organised（組織化），⑭Oriental（東洋文明），⑮Patterns（模様），⑯Prunus（サクラ），⑰Simplicity（単一性），⑱Spiritural（精神的），⑲Structured（構造化），⑳Tea master（茶道家），㉑Wonderful（素晴らしい）	各2.56%

3－4　考察

3-4-1　3 群間の比較

植物 6 種から得られた解析結果について 3 群間順位尺度（図 3－2）をみると，JK と JGS では，マツを日本庭園の要素として強く感じるランク 1 に多くの回答が，HPS では弱いランク 12 に多くの回答があった。次にキクでは，HPS では日本庭園の要素として強く感じるランク 1 に多くの回答があった。この 2 種で大きな差が生まれた理由は，19 世紀後半から 20 世紀前半の園芸雑誌『Gardeners’Chronicle』の記事からも推測できる。これらの掲載記事の中には，1897 年の日本文化であるキクの鉢植えを賞賛し，一鉢に 800 もの花が咲く豪華さを記述した記事 [35]，1908 年の日本では秋にキクが美しく咲き誇ることや，キクの種類や輸出について記述した記事 [36]，さらに，1910 年の英国内でのキク栽培や種類について記述している記事 [37]などがある。以上から，すでに，この時代から日本のキクが，英国で栽培され国内に根付いていたことによって HPS 会員の評価があったと推察できる。一方，JGS は，日本への来日経験など日本での現地情報や収集もおこなっており，現在の日本人と近い認識を持っていることから，日本庭園の構成種としてのマツの認識があったと推測できる。これらの結果から，英国人と日本人という国による違いよりも，近年のメディアの情報伝達や情報媒体の発達，さらに来日等の手軽さなどによって，JGS のメンバーは日本の造園関係者と同等の知識を持っていると考えられ，日本庭園の知識があるグループには，植物に対して日本と共通の認識があると考えられる。

空間要素について 3 群間順位尺度（図 3－3）をみると，英国人(JGS・HPS)では，山を日本庭園の要素として強く感じるランク 1 に多くの回答があったのに対して，日本人（JK）では，弱いランク 12 に多くの回答があった。山に関しては HPS では弱いランク 10, 11, 12 の回答が 0.0%であった。山に用いた写真は富士山の写真であった。英国人の山の写真に対する回答結果について，富士山に対する庭園要素としての認識を過去の記録から考察すると，たとえば，Schoppler[38]が，20 世紀初めの The Garden Magazine [39] の記事から，Walker が Glen Hall (c.1903)の Japanese-style Garden について，「日本庭園からの影響を受け，This overlooked the so-called‘dell’with an artificial mount Fuji mound」と言及していると記述していること，コンドル [07] が，浜離宮恩賜庭園の富士山をみるための富士見山について記述し，さらに Tamagawa Tea Garden では，「suggestive of scenery near mount Fuji」，「Tea Garden

representing the scenery Fujisan 」などと記述していること等から，当時から日本庭園と富士山の関係性が認識されていたことが推察できる。さらに，19 世紀後半から 20 世紀前半に作庭された英国の日本庭園内には，Fuji-yama と呼ばれる築山よりはるかに大きいマウンドがあったことが現在でも確認できること，Fanhams Hall(1901)の History of Fanhams Hall では，「little Fuji-yama （Fuji-yama Mound）は，2 つの湖を造る時，掘削した土砂で造り上げたと」記述されていること [40]，また Cottered House(1906)に現存することが述べられていること [41]，等からもこのことは裏付けられる。英国では，富士山は日本庭園の庭園要素の一部として現在でも認識されていると考えられる。

白砂については，日本人は白砂を庭園要素として関係性を強く感じているが，英国人は知識の有無に関わらず，日本庭園の要素として認識はしているが，その度合は低いことがわかった。日本人が白砂を庭園要素として強く感じていることは，現在も寺院庭園や日本庭園で多く見られること，そして，枯山水が日本の象徴的な庭園の一つと認識されていること [42]からも推測できる。

池については，JK では日本庭園の要素として強く感じるランク 1 に多くの回答があり，HPS では最も弱く感じるランク 12 に多くの回答があった。ランク 1 と 2 についてみると，JK では 25.4%と 22.2%と多くの回答があるのに対して，JGS ではともに 4.4%，HPS ではともに 0.0%であり，一定の知識のある日本人は，池を庭園要素として強く感じていることが示された。本調査では、池の写真として借景をイメージさせるものを用いたが，日本庭園に関する知識を持つ回答者は池について日本庭園の要素と捉えた可能性が考えられた。

本中 [43]は，「借景は 17 世紀前半に『園冶』の中で用いたのが最初で，日本にこの用語が移入され造園界において慣用されるようになるのは，19 世紀以降のことで，その後，日本では庭園の様式の一般用語として定着した」と述べているほか，中村・尼﨑 [09]は，「庭園内の景と庭園外の自然景観とを生垣などで見切り，あるいは庭園外の景枠で切り取り，眺望対象を特殊化する。眺望対象である自然景観へ積極的に働きかけることにより借景化する」と述べている。以上からも，日本庭園の借景が日本では様式として取り入れられ，重要な庭園要素となっていることがわかる。一方，英国人は借景を日本庭園の様式としては，強くは意識していないと推測できる。

植物と空間要素についての 3 群間での DSCF 多重比較分析では，植物種（図 3－4）

でマツおよびキクに加えてユリでは，日本庭園の知識があるグループ JK・JGS 間には有意差がなく，知識が十分でないグループ HPS とそれ以外の 2 グループとの間では有意差が認められた。ユリについてその時代背景を考えると，英国園芸雑誌『Gardeners’ Chronicle』の記事として，1864 年の英国の日本植物販売会場で，700 余りのユリの球根販売がおこなわれていたという記事 [44]，1896 年のユリの花の美しさと種類の多さ，球根についての記事 [45]などが認められることから，英国での日本のユリの広がりの歴史的背景も，現在の認知度と関連していると考えられる。

空間要素（図 3－5）に関しては，山と池について全ての群間で有意差（$p<0.01$）が確認された。山（富士山）に関して 3 群間の差異から考察できることは，富士山について飛田 [46]が，「江戸では民間人も富士山を築いているが，これは遊びというよりも信仰心からだった」と述べているように，江戸時代より日本人にとって富士山は信仰の対象であり，庭園要素として強くは意識されていなかったと考えられることによって，英国の知識あるグループ JGS との間に差異が見られたと考えられる。すなわち，富士山は日本人と英国人との間では，文化的な感性から差異が生じたと推測される。岡崎 [47]は「西洋人は古来自然を客観的にみつめ，科学的に分析して，それに対決してゆく姿勢があり，それに対し日本人は主観的にみつめ，感情移入を宗教的な自然観にまで高揚させた」と述べているが，富士山に関しては両国の捉え方の差異が明確に示されたと考えられる。一方，開国直後の江戸には数多くの大名庭園が残されており，大名庭園の要素としては富士山を模した築山があったことから，外国人には重要な要素として富士山が強く示された可能性も考えられる。

鳥居に関しては，日本人と英国人の間で有意差（$p<0.01$）が確認できた。これは江戸末期に見られる大名庭園や，日本庭園が海外で初めて作庭されたウィーン万博でも設置されていたように，海外での日本庭園の景物として早くから認識されていたことが要因として推察できる。

池に関しては，岡崎 [47]が，「英国人の風景式庭園について，自然の風景を人間の英知によって完全な形に作りかえることを目標としている」と考察しているのに対して，上原 [48]は日本について「日本庭園の借景とは，自己の庭の中に観望として取り入れ，その景が主景となる」と述べている。これらを参考にすると，日本人は自然をそのまま取り込むことにより，庭の主景の一部としているといえるのに対して，英国人は自然風景を作り替え，取り込んだ感性を自然風景としているといえる。このような自然

風景に対する感覚の違いや借景の考えの有無が考えられる中でアンケート結果を比べたことによって，明確な違いが示されたと考えられる。

3 群間の空間要素に関する階層クラスター分析（図 3－6，図 3－7，図 3－8）からは，それぞれ 2 つのクラスターが抽出され，JK では明らかにクラスター1 の自然風景，2 の庭園要素に分かれた。JK では富士山は自然風景に含まれたが，飛田[46]の記述からも示されるように歴史的に信仰の対象でもあったことが理由であったと推測できる。一方，「江戸時代になると参勤交代の影響があったせいか，庭園に富士山形の築山をつくることが流行になって，数多く築かれている」と指摘し，大名庭園では富士山もまた，かつては庭園要素であったこと，一方で江戸末期に日本を訪れた外国人がそれを一つの庭園要素として理解した可能性があることも重要であると考えられる。一方，池は，庭園要素に分類された。

英国の 2 グループをみると JGS では，山と池を庭園要素と捉えておらず，自然風景の要素と捉えていることが示された。HPS では，いずれのクラスターにも庭園要素と自然風景が混在し，要素による明確なグループ分けは現れなかった。また，日本庭園に知識がある JGS の特徴としては，自然風景のクラスターに属しているが，山，白砂，滝と池が同じクラスターにあることから，日本庭園の様式に対する感性が推察できる。一方，HPS の結果からは，各クラスター内の要素が混在している中で，山が灯篭・橋・鳥居など景物が多い中に位置している点が特徴的であった。

日本庭園の「イメージ」に関しては，鈴木[23]が「知日家欧米人からのアンケート調査」による分析結果では，日本庭園の連想語句を，欧米人は静寂(Quiet)37％，緑(Green)30％，平和(Peaceful)22％と考える一方で，日本人は池 43％，松 37％，石・岩 31％という印象を持つ傾向があったと述べている。本研究におけるアンケートの日本庭園の「イメージ」と，鈴木の連想語句の結果を比較してみると，静寂に関する部分で共通性が認められた。さらに，「日本人が日本庭園の中に実在する具体的なもの（庭園の構成物）を連想するのに対して，欧米人は庭園から受ける印象（庭園の雰囲気）を多くイメージしていた。」とした鈴木・井上[22]の指摘と類似する結果であった。一方，鈴木[23]の調査と差異が見られた語句としては，「統制（Control, Disciplined），調和(Harmony)，構造的（Architectural），技巧（Crafted)」などの機能と美の調和に関わる言葉，すなわち用と景に繋がるイメージを持つ言葉が英国人から示された。これらは，鈴木の述べる知日家欧米人が日本庭園に対して「おとなしく（Quiet)」，「閉鎖的

（Closed）」,「矮小（Small）」に思う一方,「陽気で（Cheerful）」,「活気があり（Lively）」,「普通な（Familiar）」という印象を持つ傾向であったと述べている内容とは異なっている。以上から，日本国内で見る日本庭園と海外の日本庭園では，イメージに違う傾向にある可能性が推察できる。欧米人にとっては視覚的，すなわち庭園の印象から受ける景色が日本庭園のイメージと合致することが重要で，庭園の構成物や様式については，空間内のシンボル的な存在として捉えられているものと考えられる。

3-4-2　英国の日本庭園の存在価値と維持管理・修復に向けて

進士[20]は，「日本庭園は本来，囲繞性を基調においた構造となっている。周囲を囲みつつ，外界との関係を結ぶ眺望意欲をも満たす。そのための手法が借景である。いわば，外部景観を内部化し，園内景観に合一してしまう方法である」と述べている。一方，英国風景式庭園について中村・尼﨑[09]は，「パークの風景は見渡すかぎりの遠景として現出するものであり，遠景はそれ自体絵画である」と言及している。日本庭園のように凝縮された庭は，風景の中への景物の配置によって生まれた庭園であり，これらの要素は，次章で述べるように英国風景式庭園の時代の感性と合致し，英国の日本庭園の概念として根付いたと考えられる。英国人が感じる日本庭園は自然風景のみを求めているのではなく，取り込まれた外部空間を内部で景物に置き換えた絵画の表現でもあると考えられる。

19 世紀後半以降日本庭園は英国でも作庭されるようになり，一部は所有者が変わってもその姿を現在に残している。これらの庭園は，英国の繁栄と文化の証でもあるが，日本文化の伝来の証としても保存するべきである。本研究のアンケート結果では，日本庭園の知識がある日本人 JK と英国人 JGS の間で，植物よりも空間要素において有意差が認められた。また，英国人の JGS と HPS の間では，共通の回答も多く認められた。さらに HPS の結果からは，19 世紀後半から 20 世紀前半に刊行された『Gardeners’Chronicle』の記事やプラントハンターが活躍した時代からの歴史的背景と文化の継承が関係していると思われる回答が認められた。これらは，現在でも英国独自のスタイルとして英国の日本庭園が継承されていることを示していると考えられる。しかし現在，歴史的建造物，遺構として，一般に公開されている庭園がある一方で，個人所有であるがゆえに維持管理のノウハウが不足している庭園も多数ある。これらを維持するにあたり，日英両国が協力して英国に根付いた歴史的背景を理

解した上で，文化の継承を視野に入れながら作庭時期とその後の歴史に配慮した修復をすべきであると考える。

3－5　本章のまとめ

本章では，日本庭園に関心がある英国人，関心がない英国人と日本人造園関係者の日本庭園に対する印象の比較によって，英国人の日本庭園に対する理解や，日本庭園に対して抱いているイメージの客観的な把握，現代における英国独自のスタイルとしての日本庭園観を考察した。植物に関しては英国人の日本庭園に知識があるグループには日本人造園関係者と近い認識があったが，知識が十分でないグループでは違いが認められた。空間要素に関しては日本庭園の知識に関係なく英国人に共通の日本庭園観があることが示された。その結果，現地の維持管理においては，英国ならではの園芸学や歴史背景に基づいた庭園観に沿った日本庭園の継承や，日本からの修復作業の提案などをおこなう活動，現地でのヒアリングや現地の管理者との先行調査が不可欠であると考えられた。

植物に関する分析では，英国と日本の間には異なる感性はないが，日本庭園に関する知識の有無に起因する違いがあることが示唆された。自然風景や庭園要素に関する分析では，文化的背景の違いから，英国と日本の差異が現れたと考察された。英国人の日本庭園空間の捉え方に関しては，日本庭園に関する知識の有無には大きな差異はなく，共通のイメージを持っていることが示された。

本章で得られた知見は，これからの海外の日本庭園管理修復にあたっては，それぞれの国の歴史的背景や庭園文化を理解した上での計画が必要であり，手入れや技術指導に関しては日本人からの伝授が必要であるが，景物や構成についてはマニュアル化された日本のスタイルのみを押しつけるのではなく，それぞれの日本庭園作庭の経緯や日本庭園からのインスピレーションを受けた現地の文化を継承する努力をおこなうことが重要な配慮事項であると考えられる。

補注及び引用文献

01）海外日本庭園再生プロジェクト：国土交通省ホームページ
<https://www.mlit.go.jp/report/press/toshi10_hh_000301.html>, 2020.02.14 参照

02）海外日本庭園再生プロジェクト：外務省ホームページ
< https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/local/page24_001013.html>, 2020.03.04 参照

03）土沼隆雄・鈴木誠　(1999)：ポートランド市ワシントン・パーク日本庭園の形成過程の特徴に関する考察：日本建築学会計画系論文集 521(64),195-202

04）佐藤昌　(1933)：外国人の見たる日本庭園：園芸学会雑誌(4)1, 88-106

05）楫西貞雄（1949)：外國人の日本庭園に對する理解について：園芸雑誌 (13)1, 1-4

06) Edward S. Morse (1886): Japanese Homes and Their Surroundings：Boston, 372pp

07) Josiah Conder (1893)：Landscape Gardening in Japan：Tokyo, 161pp, 27, 148-149

08）北村援琴斎（1735）築山庭造伝：前編，後編は秋里蘺嶋著

09）中村一・尼崎博正共著（2001)：風景をつくる：昭和堂 12-13, 14-15, 193

10）熊倉早苗・柴田昌三（2019)：英国園芸雑誌ガーデナーズ・クロニクルからみた日本庭園に関する記事内容の推移：ランドスケープ研究（オンライン論文集）(12), 45-49

11）日本造園学会「海外の日本庭園」調査刊行委員会編（2006）:海外の日本庭園調査報告書：日本造園学会

12）鈴木誠　(2006)：海外につくられた日本庭園の系譜：ランドスケープ究 69(3), 192-198

13）福原成雄（2000)：国際交流に果たす日本庭園の意義：大阪芸術大学紀要（23), 185-196

14）福原成雄（2007)：日本庭園を世界で作る：学芸出版社, 191pp

15）渡辺俊夫（2007)：歴史性喪失というアイデンティティー
－ジョサイア・コンドルの日本庭園論－：日本伝統工藝再考－外からみた工藝の

将来とその可能性 (27),75-83

16) 片平幸　(2009)：日本の庭と欧米人の眼差し：国際文化論集(41),105-131

17) 片平幸　(2010)：往還する日本庭園の文化史 - ジョサイア・コンドルの日本庭園論の考察を中心に - ：桃山学院大学総合研究所紀要 35(2),33-53

18) 新妻昭夫　(2007)：ガーデニング雑誌という世界：恵泉女学園大学園芸文化研究所報告 4, 1-13

19) 新妻昭夫　(2007)：英国 19 世紀の園芸雑誌の研究 - ガーデニング文化の大衆化の視点から：恵泉女学園大学園芸文化研究所報告 4, 192-235

20) 進士五十八（1989)：日本庭園の特質に関する研究：ランドスケープ研究 53(1), 24-31

21) 鈴木誠・田崎和裕・進士五十八（1988)：外国人の日本庭園観に関する比較研究：ランドスケープ研究 52(5),25-30

22) 鈴木誠・井上学　(1990)：庭園景の評価構造に関する実験的研究：ランドスケープ研究 53(5),1-6

23) 鈴木誠　(1995)：知日家欧米人の日本庭園に対する認識とイメージに関する調査研究：ランドスケープ研究 58(5), 5-8

24) 鈴木誠（1998)：欧米人の日本庭園観：ランドスケープ研究 62(2), 136-143

25) 山下雅子・羽生和紀・大森宏(2006)：日本人と英国人における庭風景知覚の比較：日本建築学会環境系論文集 71,93-99

26) 大森宏・安達めぐみ・堀田真一・山下雅子・羽生和紀・岸野洋久・林知己夫(2001)：日本の庭に対する見方の普遍性と特殊性：計量生物学 21(2), 53-72

27) 羽生和紀・山下雅子・安達めぐみ・大森宏・堀田真一・岸野洋久・林知己夫(2002)：個人の庭に対する知覚と推論：居住国と教育の影響：人間・環境学会誌 8(1), 1-10

28) 大森宏・安達めぐみ・堀田真一・山下雅子・羽生和紀・岸野洋久・林知己夫（2005)：個人住宅庭園が与える国のイメージについて：ランドスケープ研究 68(5),849-854

29) 羽生和紀・山下雅子・大森宏（2007)：日英の庭の弁別に関する環境推論：人間・環境学会誌 10(2), 1-10

30) 補注：2019 年 7 月に英国において，日本庭園研究者 Dr. Jill Raggett（Writtle University College，ガーデンデザイン・ランドスケープデザイン教員）とアンケ

ートと写真の選定について話し合った。帰国後は，メールにて複数回協議し，10月に両国でアンケート調査を実施した。

31) Gardeners’ Chronicle (1841-1967) : Purnell & Sons Ltd

32) 白幡洋三郎 (1994) : プラントハンター : 講談社 270-272

33) 久保貞 (1953) : 日本風の美的意味契機について : 造園雑誌(16),1-4

34) 補注 :「ビスタ」上原啓二 (1978)造園大辞典 : 加島書店，709,「もとは眺望の意，通俗にはそれでよいが造園上の術語としては単なる眺望ではなく，途中にしぼり景の存在することが条件とされる」

35) Gardeners’ Chronicle (1897) : Purnell & Sons Ltd, 254

36) Gardeners’ Chronicle (1908) : Purnell & Sons Ltd, 42

37) Gardeners’ Chronicle (1910) : Purnell & Sons Ltd, 210

38) Luke Schoppler (2020) : The Meiji Legacy : Gardens and Parks of Japan and Britain, 1850-1914 : 321pp, 134

39) 補注: Walker, T. ‘Japanese gardening’, reading Mercury, Oxford gazette, Newbury herald, and berks Country Paper, May 23rd 1903, p.10. Walker, ‘Japanese Gardening’ The Garden, May 16th 1903, 335-336

40) Fanhams Hall (1901): Japanese gardens, Mr. Suzuki 作庭
Fanhams Hall an exclusive venue, History of Fanhams Hall
(ホテルパンフレット参照)

41) Cheyne (Cotttered House) (1906): Japanese gardens, Mr. Kusumoto 作庭

42) 補注 :「枯山水」「白砂」上原啓二 (1978)造園大辞典 : 加島書店，187,「日本特有の象徴庭園の一つである枯山水は，主として大粒の白砂粒を用いて築造する」

43) 本中眞 (1994) : 日本古代の庭園と景観 : 吉川弘文堂，2-3

44) Gardeners’ Chronicle (1864) : Purnell & Sons Ltd, 938-939

45) Gardeners’ Chronicle (1896) : Purnell & Sons Ltd, 135

46) 飛田範夫 (1999) : 日本庭園と風景 : 学芸出版社，121, 123

47) 岡崎文彬 (1994) : SD ヨーロッパの造園 : 鹿島出版会，236

48) 上原敬二 (1978) : 造園大辞典:加島書店，借景，389

第 4 章　英国 England における 19 世紀後半から現在に至る日本庭園変遷の過程と特徴

4－1　はじめに

ヨーロッパ大陸では，17 世紀以降ルネサンス庭園に代わりフランス式幾何学庭園が流行した。その後，自然理念に基づく庭園が台頭し，それを生み出した英国では，新しい庭園スタイルのイギリス風景式庭園が誕生した[01)]。英国の地形は，風景式庭園の誕生を促すのに適した緩やかな起伏と，牧歌的な国土が多くを占める。岡崎[01)]は，風景式庭園の自然観に対して,「風景式庭園は自然の風景を人間の英知によって完全な形につくりかえることを目標においているのに対し，日本庭園では，自然の景観をそのままではなく，これを醇化して庭園に再現しようと念願する」，さらに,「自然を客観的にみつめ科学的に分析して，それに対決していく姿勢を示した西洋人と，自然を主観的にみつめ，それの感情移入を宗教的な自然観にまで高揚させた日本民族とのアプリオリな性格の差異に基づくとみるべきであろう」と述べている。また，中村・尼﨑[02)] は,「日本庭園の本質とは，人と自然の共同作品であり，立地環境は日本庭園を成り立たせる大きな要素である。そして，伝統的日本庭園とは，日本の気候・風土，思想・宗教・文化・芸術環境のなかで生まれてきた庭園をいう」と述べている。すなわち，自然景観の中から生まれる英国の日本庭園は，同じ自然景観の非整形な庭園という枠内にありながら，イギリス風景式庭園とは全く性格の異なったもので，英国における日本庭園はその影響を受けて他国の日本庭園とは異なる独特の性格を有すると推察できる。日本庭園の海外での作庭は，19 世紀後半以降，万国博覧会など多くの国との産業や文化の交流を通してみられ, 文化交流の一環としておこなわれてきた。一方，英国では，園芸業の成長とプラントハンターの活躍により世界中の珍種や有用植物が集められた[03)]。日本庭園に関する書籍としては，ジョサイア・コンドルが 1893 年に『Landscape Gardening in Japan』[04)] を刊行している。白幡[05)] は,「明治の大名庭園は亡びながらも，外国人訪日客，とくにコンドルの著作を通じて，日本庭園の姿，様式を世界に広めた」，そして,「むしろ大名庭園に代表される広々とした回遊式庭園こそ，海外で人気を博した庭園だったのではないか」，さらに,「大名庭園は朱塗りの鳥居も太鼓橋も取り入れたし，灯籠もずいぶんたくさん用いた。海外の日本庭園は，とくに戦前においては，大名庭園に用いられた手法にのっとったものが多かった」と

考察している。これらの歴史的背景から英国の日本庭園をみると，英国の文化と歴史的背景，さらには庭園文化を通じて，英国における日本文化の理解や融合の歴史も考察できると考えられる。それらを理解することは，英国の日本庭園の存在価値を見出し，異文化間の相互理解の促進に繋がる。

海外の日本庭園に関する先行研究をみると，たとえば劉ら[06]は，アンケートによって日本人が海外の日本庭園に抱く違和感を取りあげた。片平[07]は，コンドルの日本庭園論について分析している。また，海外につくられた博覧会日本庭園について文献を通じて間接的に考察した研究としては，楫西[08]，佐藤[09]，鈴木[10]が挙げられる。大出[11]は，日英博覧会日本庭園跡の現状について，文献研究と現地調査をおこない，その中で,「日本庭園としての管理がされていないこと」,「管理技術が伝えられていないこと」に言及し，さらに「日英博覧会当時の庭園の一部がいまだ残されていることが，日本の多くの造園家や研究者に知られていない」と放置された要因と現状について解析している。また，金・朴[12]，趙ら[13]は，大韓民国や中国の日本庭園についての文献調査と，インターネットを通した情報収集をおこない，現地調査によるヒアリング調査などから，東アジアの日本庭園の現況・利用・評価や特性に関する研究をおこなっている。ここで用いられたインターネットによる情報収集は，特に海外の状況を知るうえで，現地踏査の事前調査として有効と考えられる。

現在，英国の日本庭園の現況・利用・評価や特性に関する研究調査は少ない。特に現況数や庭園タイプと特徴，地域的分布の特性に関する調査や現地踏査は明確なものがなく，19 世紀後半以降に英国で作庭された日本庭園の歴史的背景を含め，記録することは急務であると考えられる。東京農業大学のデータベース[14]は，世界中で 500 以上の公開庭園が現存すると紹介している。そこには英国の日本庭園も記載されているが，更新等の問題からか現存しない庭園や所在が不明瞭な庭園なども含まれている。英国の日本庭園に関しては，Japanese Garden Society の website による記載[15]，福原の調査[16]があげられる。しかし，それぞれ日本庭園の定義が異なるため，庭園数は同じではない。これらの既往研究に基づいて，現時点での正確な所在や庭園の背景を把握することは，英国の日本庭園の歴史的な経緯を踏まえて理解するための重要な資料となると考えられる。

そこで本章では，19 世紀後半から現在に至る英国の日本庭園の変遷を文献と現地調査からまとめ, 英国における日本庭園変遷の過程を検証することとした。そのために，

英国の日本庭園の歴史的背景，作庭時期，庭園の特徴を集約し，文化的価値のある庭園について現状を把握し，維持管理の状況を検討することによって，今後の英国の日本庭園の維持管理の一助とするための考察を試みた。

4－2　研究方法

4-2-1　英国 England の日本庭園の調査対象の抽出

本章では, 英国の 19 世紀後半から現在までの間に作庭された日本庭園の現状と構成要素を知るための調査をおこなった。調査対象庭園は，英国 England に絞り，まず庭園数を把握するために，文献調査をおこなった。次に現況把握のための現地調査をおこなった。調査地域を England に限定した理由は，英国の首都ロンドンを含んでいること，19 世紀以降も産業の中心であったこと，そして地域を限定することで庭園調査の文化的背景や関連性が明確になると考えたことによる。

まず調査対象となる庭園名と作庭年を把握するため，①東京農業大学 2020 海外の日本庭園 website United Kingdom[14)]，②福原[16)]の『日本庭園を世界で作る』，③英国 Japanese Garden Society[15)] website の Selected Japanese Gardens in the UK and Ireland open to public，および④英国の日本庭園研究者 Raggett[17)]の調査資料に示されている England の情報を用いて分析をおこなった。これら 4 資料から総合的な庭園リストを作成し，以下の 3 つの基準に従って現在 website で確認できる庭園を抽出した。すなわち，1)庭園資料，文献，または公式 website の中で，Japanese Garden の記載のある庭園を対象とする，2)庭園作庭年，および修復年は，各庭園が持つ公式 website の年号を最優先とし，website に年号記述のない場合は，上述の 4 資料から得る，3)所在不明の場合は削除する，を基準とした。以上から，本章で対象とする 41 庭園を抽出し，基礎情報となる庭園リストを作成した。

庭園リストでは，作庭年，修復年，作庭者（日本人，英国人，または作庭者不明）を示した。なお庭園は，時代によって 2 つのカテゴリーに分類した。すなわち，Raggett[17)18)] が「その時代に日本庭園を見て感化・影響を受け，再現し，または思い出して描き，識別証明や意味が表すものが含まれ，しかし，日本から持ち込んだ植物や灯篭などばかりでなく英国で生まれたものも含まれる。」として定義した Early Japanese-style Garden (1850-1950)（以下黎明期と記す）および，Recent Japanese-style Garden (1950~)（以下近代期と記す）とした。

次に英国に現存する日本庭園の概要として，Historic England への登録の有無，County（地域区分），および庭園形式を調査した。英国では，歴史公園・庭園に影響を及ぼす開発計画許可を与える上で，Historic England（イングランド歴史的建造物・記念物委員会）[19]が文化遺産を指定し保護する役目を果たしている。Historic England の website において，本研究で抽出された 41 庭園すべての庭園名を検索し，記載が確認された庭園を基本情報に加えた。

4-2-2　現地調査

現地調査をおこなう庭園は，2 つのカテゴリーから年代比較が可能なように，個人所有，公開庭園，公共庭園，修復庭園，さらに作庭者を考慮し選択した。すなわち，先行研究[12) 13)]の現地調査の手法を参考にして website で入手した庭園の基本情報，衛星画像（Google Earth）による位置情報を得たほか，全敷地面積と日本庭園部分の面積を QGIS3.14 で算出した。さらに，文献調査に基づいて，England における地域区分内の分布数で上位に入る地域の中から，黎明期の日本庭園を以下の 6 庭園，A) Cheynes (Cottered)，B）Compton Acres, C) Fanhams Hall, D) Gunnersbury Park Japanese Garden, E) Silver End Memorial Gardens，および F) Tatton Park を，近代期の日本庭園を以下の 6 庭園，　G) Hammersmith Park，　H) Holland Park (The Kyoto Garden)，　I) Holland Park (The Fukushima Memorial Garden), J) Royal Botanic Gardens Kew (Japanese Landscape)　K) School of Oriental and African Studies (大学，以下 SOAS と示す) Roof Garden，および L) Zen Garden (寺院，Three Wheels Temple)の計 12 庭園を選択し，現地調査をおこなった（表 4－1）。

黎明期の庭園には個人所有(A)，ホテル活用(C)，公開庭園(B および F)，公共庭園(D および E)が，近代期の庭園には，公共庭園（修復・改修）(G, H および I)，公開庭園(J, K および L)が含まれている。現地調査は 2019 年 7 月 17～30 日に実施した。調査後に QGIS3.14.16 を利用して正確な位置を把握した。現地では，管理状況の記録・観察をおこない，一部でヒアリング調査もおこなった。

4-2-2-1　庭園構成要素の記録

現地調査では，英国の日本庭園の特性を判定する要素として記録する庭園要素を設

定した。庭園の主要構成要素としては，1962 年に英語で著された日本庭園論である『Typical Japanese Gardens』[20] に示されている日本庭園のデザインテーマ 20 項目の中から，抽象的なものを除いた 15 項目の庭園主要構成要素（池・中島・流れ・滝・築山・枯山水・園路・飛石/板石・橋・四阿/茶室・囲い・生垣・中くぐり門・石灯篭・蹲踞/手水鉢）を選んだ。また現地調査では，各構成要素の計数はせず，庭園エリア内における有無のみを記録した。

4-2-2-2　庭園管理に関するヒアリング調査

現地調査を実施した庭園のうち 3 庭園でおこなった。黎明期の庭園からは，日本文化の影響を受けて作庭され，現在も個人所有の庭園として一部，改修されて公開されている 2 庭園，Cheynes (Cottered)と Holland Park，近代期の庭園からは，小規模であるが公開されている 1 庭園，Zen Garden(Three Wheels Temple)を選んだ。Holland Park には黎明期に作庭されたが遺構となっている日本庭園があるが，これとは別に 20 世紀後半以降に日本人により作庭された The Kyoto Garden と The Fukushima Memorial Garden を有している。各日本庭園の背景，現在の利用状況と経年変化に伴う管理体制の変遷について聞き取り調査を以下の 4 組について実施した。具体的な対象者は，Cheynes (Cottered) の英国人オーナー，Holland Park の庭園管理会社の責任者と同社所属のガーデナー，Zen Garden(Three Wheels Temple)の作庭を担当した日本人僧侶，日本庭園研究者 Jill Raggett である。

4-2-3　庭園形式と作庭年代による分類と地域的分布

website で入手した，41 庭園の基本情報および画像写真から庭園形式を分析した。現地調査をおこなった 12 庭園については，現地調査をもとに分析した。庭園形式の中で，水景と枯山水のあるものを判別するために，池を含む庭園を①Stroll Garden（回遊式，池が配置され園路に沿って歩き景色が次々と変化する庭園 [21]）（以下 Stroll と記す）とし，枯山水を含む庭園を②Dry Garden（池や流れを用いず，石組を主体として白砂やコケや刈込などで自然景観を象徴的に表現した庭園 [21]）（以下 Dry と記す）に分類した。また，両者を持つものを③Stroll＆Dry，その他の形式を④Others とした。作庭年代は，黎明期と近代期に分類した。

4-2-4　作庭年代別の庭園の敷地と日本庭園の配置の比較

現地調査をおこなった黎明期と近代期の 12 庭園の土地利用状況の解析によって，敷地内における日本庭園の状況と周辺環境の把握をおこなった。具体的には，12 庭園の日本庭園部分の敷地面積が，全敷地面積中に占める比率を求めた。

4－3　結果

4-3-1　英国 England の日本庭園のカテゴリー別にみた特徴

英国 England の日本庭園を公式 website の中で Japanese Garden の記載があるもので，年号が確認でき，所在がわかるものを基準とし抽出した結果，表 4－1 の 41 庭園が得られた。①東京農業大学のデータ [14] からは記載されている 30 の庭園のうち 19 庭園が，②福原の文献 [16]からは 36 の英国・アイルランド庭園のうち 22 庭園が，③英国 Japanese Garden Society の情報 [15] からは 36 の英国・アイルランド庭園のうち 23 庭園が抽出された。さらに，④Raggett の資料 [17]については，168 の英国及びアイルランドの庭園が記載されているが，情報が十分ではない庭園が多く含まれているため，補足参考資料として用いることとし，15 庭園についての情報を得た。これらの 41 庭園には，黎明期のものが 15 庭園，近代期のものが 26 庭園（Holland Park の The Kyoto Garden と The Fukushima Memorial Garden は同一の公園内にあるが，それぞれに庭園名が付けられているため別庭園として扱った）となった。その概要と分布を，表 4－1，表 4－2，図 4－1 および図 4－2 に示した。また，近代期のカテゴリーの庭園のうち初期作庭部分も含む Gatton Park, Hammersmith Park, Holland Park, および Royal Botanic Gardens Kew の 4 庭園 は，黎明期ではなく，改修工事年を作庭年として扱い，近代期の庭園として扱った。その理由は，これらの庭園は，荒廃し遺構のような状態になっていたものが，改修工事によって景観が一変し，新しい庭園が創出されたと考えられたためである。

英国では，Historic England[19) 22)]の文化遺産は，3 段階に分けて保護されている。特別重要歴史公園・庭園（グレードⅠ），主要歴史公園・庭園（グレードⅡ*），特別歴史公園・庭園（グレードⅡ）である。黎明期の 15 の日本庭園では 14 庭園が登録されており，グレードⅠが 1 ヶ所（The Peto Garden, Iford manor），グレードⅡ*が 5 ヶ所（Gunnersbury Park Japanese Garden, Cheynes (Cottered)，Newstead Abbey, Tatton Park, Compton Acres），グレードⅡが 8 ヶ所（Warren House, Batsford Park

Arboretum, Kingston Lacy, Gunnersbury Park Japanese Garden, Fanhams Hall, Peckham Rye park, Heale House Garden, Rivington Terraced Gardens）であった。近代期の 26 の日本庭園では 10 庭園が登録されており，グレードⅠが 2 ヶ所（Wilton House, Royal Botanic Gardens Kew），グレードⅡ*が 3 ヶ所（Birmingham Botanical Gardens, Dartington Hall Gardens, RHS Gardens Wisley），さらにグレードⅡが 5 ヶ所（Calderstones Park, Gatton Park, Royal Botanic Gardens Kew, Holland Park（重複あり）であった（表 4－1）。

作庭者をみると，黎明期では英国人が直接日本の素材を輸入して自ら作庭した記録や，英国で依頼された日本人庭師による作庭の記録などがみられた。日本人が関わった庭園は，15 庭園中 3 庭園であった。近代期では，博覧会や姉妹都市締結による庭園が多く，日本人が関わった庭園は，26 庭園中 12 庭園であった。また，近年では Dry Garden（枯山水）が英国人によって作庭されている傾向がみられた（表 4－1）（表 4－3）。

抽出された 41 庭園の分布を作庭年代別（黎明期および近代期）に図 4－3 に示した。黎明期と近代期に共通して庭園数が多い地域は，London（9 庭園），South West（9 庭園）であった。黎明期は South West（5 庭園）が一番多く，次に North West，East of England となった。近代期では，London（7 庭園）が一番多く，South West，South East が続いた。South West では，　黎明期の庭園が多く現存しているほか，全体では London と並び，最も多い日本庭園数となった（表 4－2）。

41 庭園の庭園形式による分類では，Stroll が 20 庭園，Dry が 8 庭園，Stroll＆Dry が 7 庭園，Others が 6 庭園となった。それらの分布を図 4－4 に示した。年代別データと庭園形式の結果からは，黎明期の庭園には，水景・池の周りを回遊しながら庭園を楽しむ Stroll が多いことが示された（表 4－3）。Stroll（水景を含む）庭園は，黎明期に多くみられたが，近代期にもみられ，England 全体に分布していた。また近代期の庭園では，Dry Garden（枯山水）が独立した日本庭園として作庭されているものの，初期には独立した枯山水の庭園は確認できなかった。黎明期に属する Cheynes（Cottered）や Hammersmith Park などの Dry Garden（枯山水）は，改修時に新たに作庭されていた。Others は，ロンドンとその近郊で多く認められたが，その形式は露地，石組および山水であった。

表 4－1　本章の調査で英国 England で抽出された日本庭園の概要

	作庭年	修復年	遺構となっている原庭園作庭年	庭園名	Historic England（庭園敷地内登録数）		Counties（地域区分）	作庭者	日本庭園形式
1	1865			Warren House	GⅡ	1	⑨South East		stroll
2	1870			Foxhill Areboretum		0	①North West		others
3	1890			Batsford Park Arboretum	GⅡ	2	⑧South West		stroll
4	1899	1933		The Peto Garden, Iford Manor	GⅠ	1	⑧South West	英国人	stroll
5	1900			Kingston Lacy	GⅡ	1	⑧South West	英国人	stroll
6	1900	2001		Gunnersbury Park Japanese Garden	GⅡ GⅡ*	2	⑦London	英国人	stroll
7	1901	1905		Fanhams Hall	GⅡ	3	⑥East of England	日本人	stroll
8	1906	1937		Cheynes(Cottered)	GⅡ*	1	⑥East of England	日本人	stroll & dry
9	1907			Newstead Abbey	GⅡ*	1	⑤East Midlands		stroll
10	1908			Peckham Rye Park	GⅡ	1	⑦London	移築	stroll
11	1910			Tatton Park	GⅡ*	1	①North West	英国人/日本人	stroll
12	1910			Heale House Garden	GⅡ	1	⑧South West	資材輸入	stroll
13	1920			Compton Acres	GⅡ*	1	⑧South West	英国人	stroll
14	1922			Rivington Terraced Gardens	GⅡ	1	①North West	英国人	stroll
15	1948			Silver End, Memorial Gardens and the Manors		0	⑥East of England		stroll
16	1967			Birmingham Botanical Gardens	GⅡ*	1	④West Midlands		stroll
17	1970			Calderstones Park	GⅡ	1	①North West		stroll
18	1976			Pine Lodge Gardens		0	⑧South West		stroll
19	1980			Wilton House	GⅠ	1	⑧South West		stroll
20	1980			Pure land (Meditation Center)		0	⑤East Midlands	日本人	stroll & dry
21	1982			Japanese Garden (Kenwood)		0	⑦London	日本人	others
22	1984			Liverpool Japanese Garden in Festival Park		0	①North West	日本人	stroll
23	1984			Japanese Garden (Windsor)		0	⑨South East	日本人	others
24	1990			Gateshead National Garden Festival		0	②North East	日本人	others
25	1991			Dartington Hall Gardens	GⅡ*	1	⑧South West		dry
26	1991	1997		Bonsai Nursery		0	⑧South West		stroll & dry
27	1994	1996		Zen Garden（三輪精舎）		0	⑦London	英国人/日本人	dry
28	1996			Danescourt Cemetery		0	④West Midlands		dry
29	1998			RHS Garden Wisley, 盆栽園	GⅡ*	1	⑨South East		stroll & dry
30	1998			Portsmouth Municipal Rose Garden		0	⑨South East	姉妹都市（日本人）	others
31	1999		1909	Gatton Park	GⅡ	1	⑨South East		stroll
32	2001			SOAS, Roof Garden,		0	⑦London	英国人	dry
33	1995	2001	1911	ジャパニーズ・ゾーン, Royal Botanic Gardens, Kew	GⅠ GⅡ	2	⑦London	日本人	stroll&dry
34	1991	2001	1903	京都庭園, Holland Park	GⅡ	1	⑦London	日本人	stroll
35	2004			Momotaro garden		0	⑤East Midlands	英国人	dry
36	2006			Walkden Gardens		0	①North West		dry
37	2010			Norwich Cathedral		0	⑥East of England	英国人	dry
38	2010		1910	Hammersmith Park 日本庭園		0	⑦London	日本人	stroll & dry
39	2011			Komatsu Friendship Garden		0	②North East	姉妹都市（日本人）	dry
40	2012			福島庭園, Holland Park	GⅡ	1	⑦London	日本人	others
41	2014			Capel Manar Gardens		0	⑥East of England	英国人	stroll & dry

※No. 1～15 が黎明期, No. 16～41 が近代期に分類された。

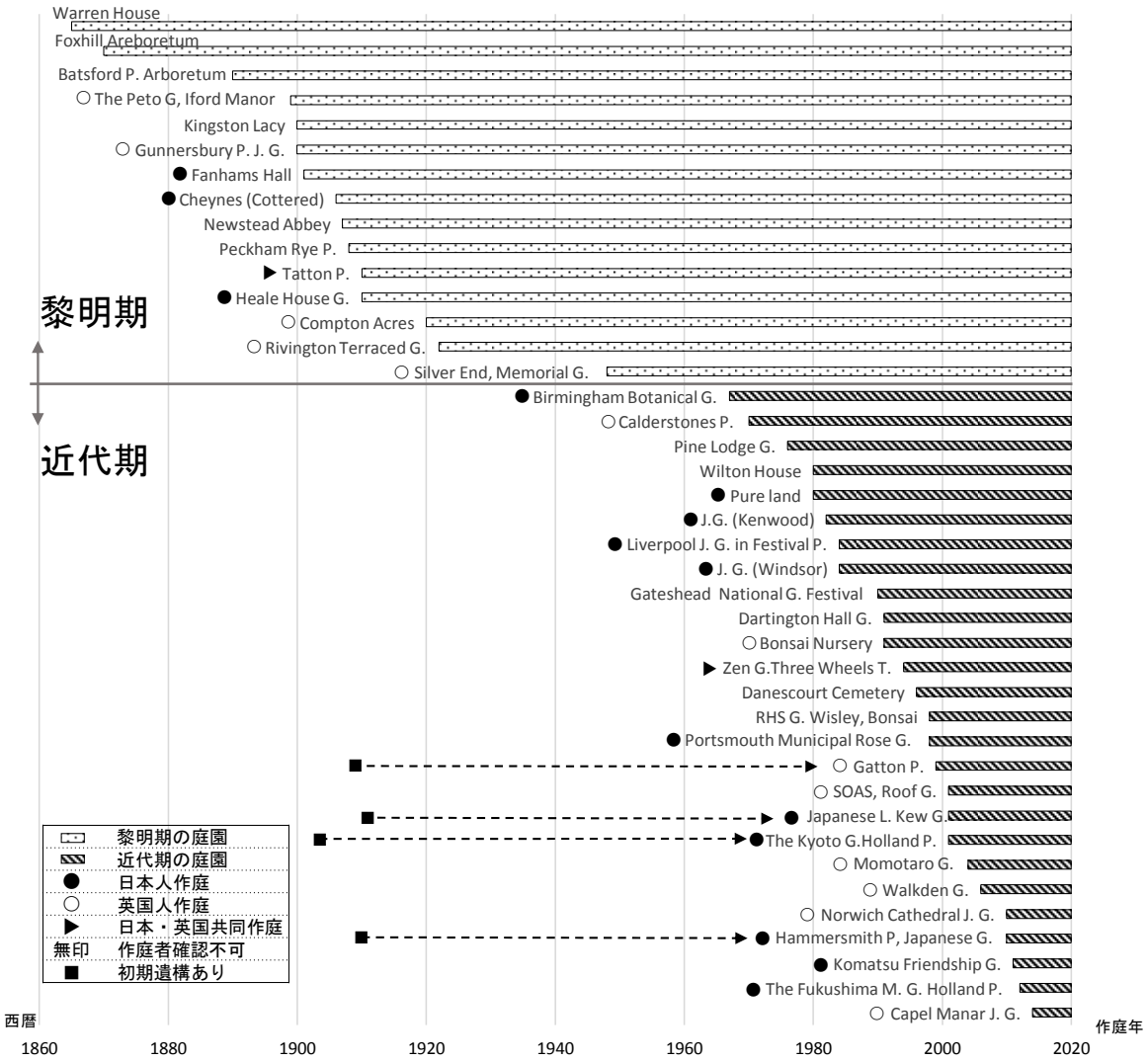


図 4－1　英国 England で抽出された 41 の日本庭園の作庭年表

※黎明期の作庭記録があるが，その後修復され，近代期庭園とした日本庭園については，破線によって黎明期の作庭年を示した。

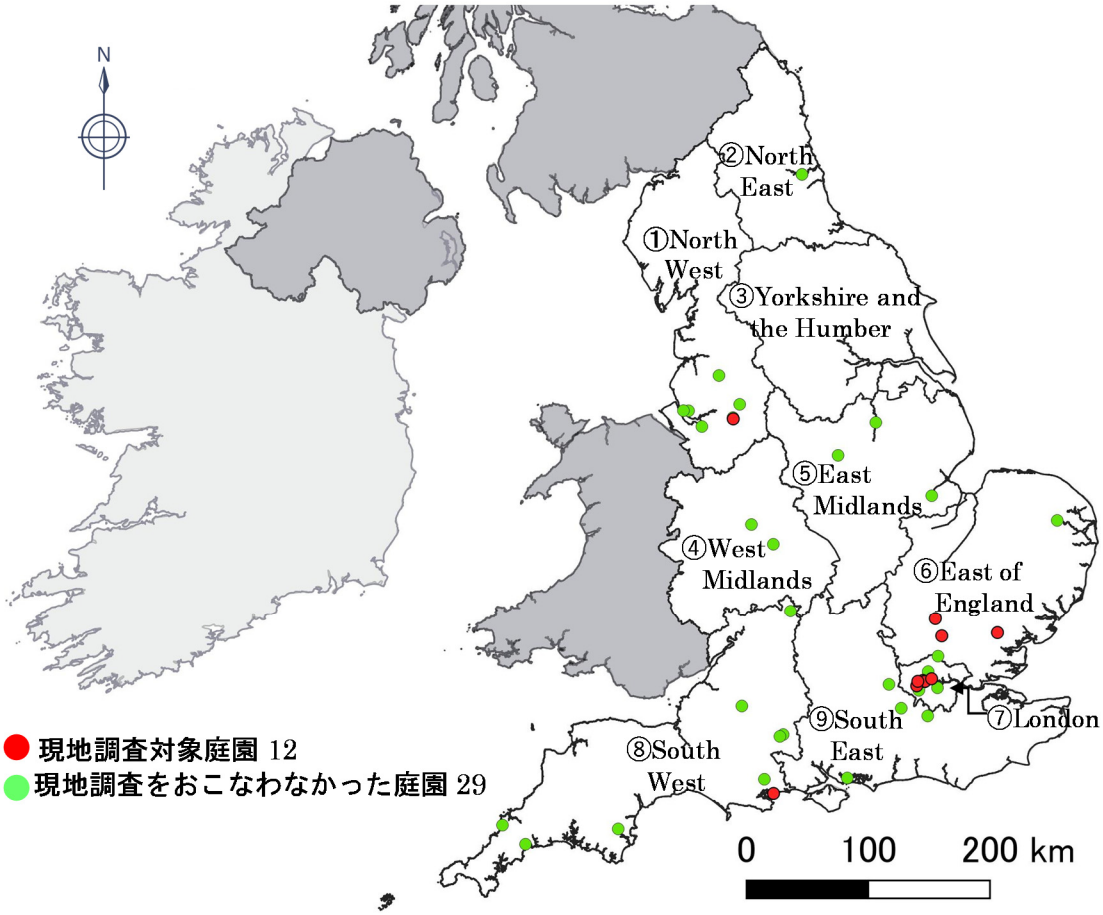


図 4－2　抽出された England の 41 庭園と現地調査をおこなった庭園の分布

表 4－2　England における地域別にみた庭園の分布

区分/時代	黎明期の庭園	近代期の庭園	計
①North West	3	3	6
②North East	0	2	2
③Yorkshire and the Humber	0	0	0
④West Midlands	0	2	2
⑤East Midlands	1	2	3
⑥East of England	3	2	5
⑦London	2	7	9
⑧South West	5	4	9
⑨South East	1	4	5
計	15	26	41

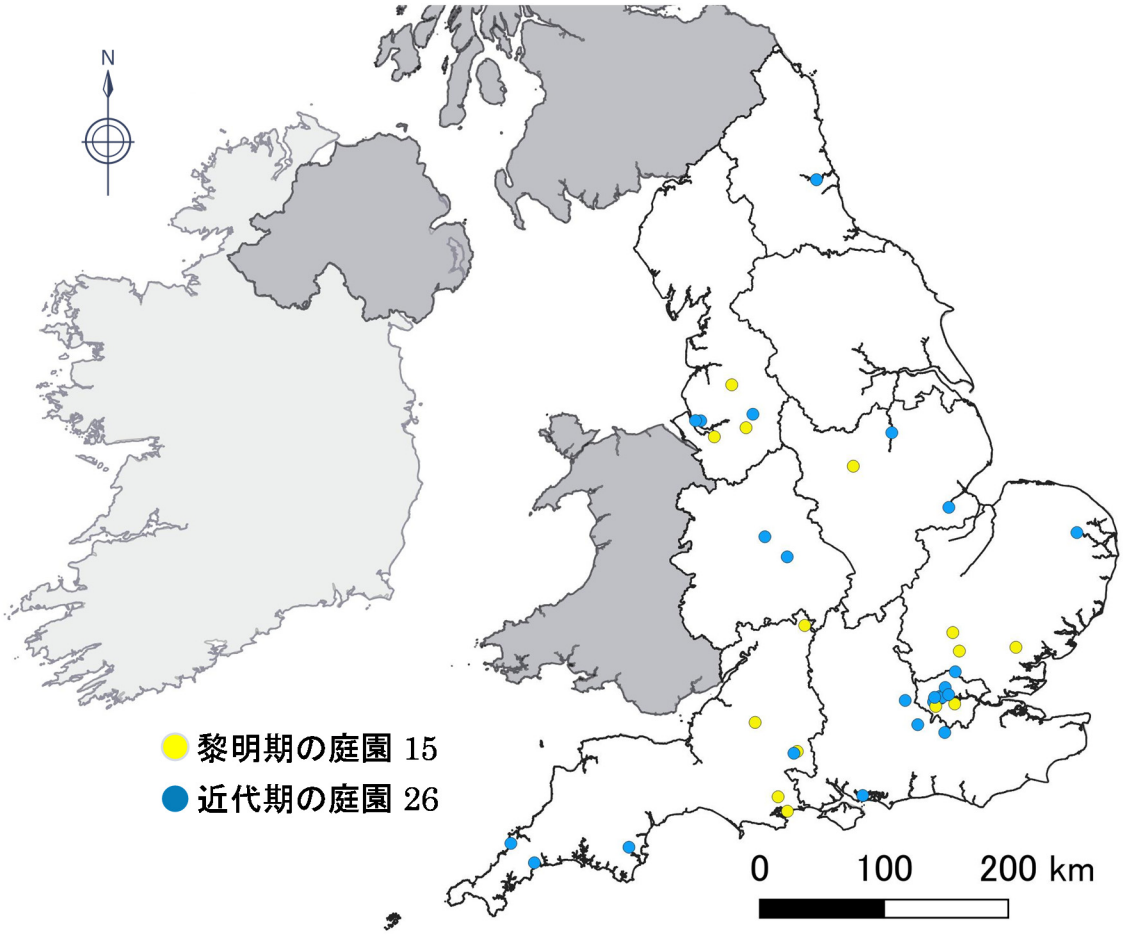


図 4－3　抽出された England の 41 の日本庭園の作庭年代別にみた分布

表 4－3　抽出された庭園の作庭年代・形式別にみた分布

時代/形式	Stroll	Dry	Stroll ＆ Dry	Others	計
黎明期の庭園	13	0	1	1	15
近代期の庭園	7	8	6	5	26
計	20	8	7	6	41

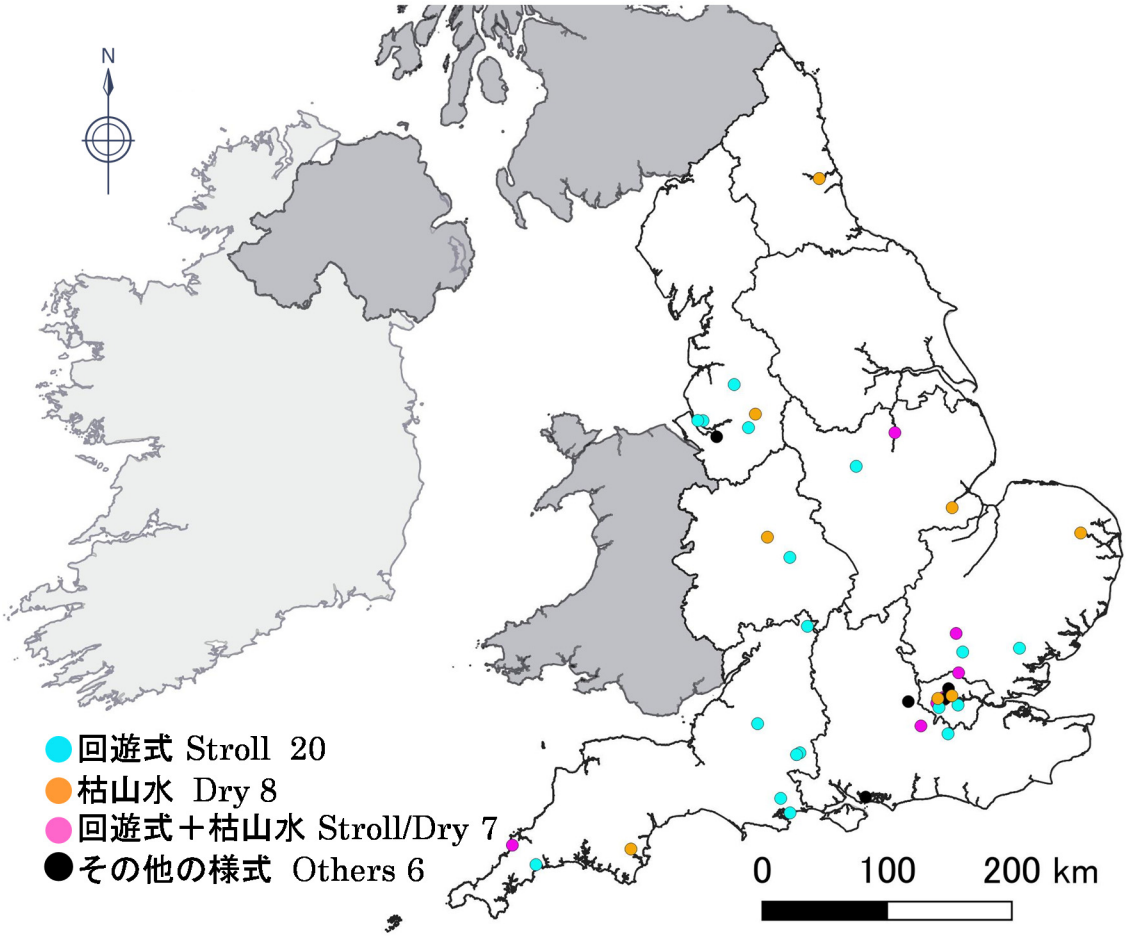


図 4－4　抽出された England の 41 の日本庭園の形式別にみた分布

4-3-2　現地調査による現況分析

4-3-2-1　各庭園の状況

現地調査をおこなった 12 庭園（表 4－4）において，日本庭園を構成する主要構成要素としてあげた，前述の 15 項目[20] について確認をおこなった結果を表 4－5 に示す。Stroll（回遊式）に属する池は，12 庭園中 8 庭園で見られたが，残りの Holland Park (The Fukushima Memorial Garden)，Royal Botanic Gardens Kew (Japanese Landscape)，SOAS Roof Garden，さらに Zen Garden (Three Wheels Temple)の 4 庭園は Dry Garden（枯山水）および石組のみで構成されていた。また，枯山水は，12 庭園中 6 庭園でみられた。Cheynes（Cottered），Hammersmith Park, Holland Park (The Kyoto Garden)，さらに Royal Botanic Gardens Kew (Japanese Landscape)の 4 庭園は，黎明期に作庭されたが，近年の改修時に作庭されたものであった。次に庭園を回遊する園路は，Zen Garden (Three Wheels Temple)の座観式を除く 11 庭園で確認された。さらに，飛石・板石は，Gunnersbury Park（c1910 写真では飛石あり[23]）と Holland Park (The Fukushima Memorial Garden)を除く 12 庭園中 10 庭園で構成要素として確認された。石灯篭は，12 庭園中 9 庭園で構成要素として確認されたが，SOAS Roof Garden と Zen Garden (Three Wheels Temple)では，枯山水庭園の石組構成はみられるが石灯篭はなく，また Gunnersbury Park（c1910 写真では石灯篭あり[24]）では調査時には確認できなかった。生垣は，10 庭園で認められたが，オープンエリアとなり回遊の一部の風景となっている日本庭園である Royal Botanic Gardens Kew (Japanese Landscape)と，屋上庭園であるが坪庭のような空間となっている枯山水庭園である SOAS Roof Garden では確認できなかった。築山は，遺構となり全体の構造の確認が困難な Gunnersbury Park，SOAS Roof Garden さらに Zen Garden (Three Wheels Temple)以外の 9 庭園で確認できた（表 4－5）。

現地調査をおこなった 12 庭園の敷地全体と日本庭園の面積割合（表 4－4，図 4－5～15）をみると，黎明期の庭園では広大な公開庭園に日本庭園の一部が遺構として現存している Gunnersbury Park Japanese Garden の 0.24%（図 4－8）や，ホテルとして活用され敷地内には灯籠や Fuji-yama と呼ばれる築山や茶室も現存している Fanhams Hall の 21.71%（図 4－7）が確認できた。Cheynes（Cottered）は 35.73%（図 4－5）であったが，現在も非公開庭園で初期オーナーから次々と受け継がれたオリジナルの素材や庭園を改修しながら，拡張によって枯山水庭園を作庭している部分

も確認できた。

近代期の庭園の敷地に対する面積の割合をみると，SOAS Roof Garden の 5.92%（図 4－14），枯山水による座観式 Zen Garden (Three Wheels Temple)の 38.03%（図 4－15）など，狭い空間の中に囲まれた空間が作られ，英国人による日本庭園が演出されている事例が確認できた。また，Holland Park の The Kyoto Garden（0.62%）および The Fukushima Memorial Garden（0.15%）（図 4－12）は，それぞれ 1903 年作庭の遺構隣接地にあり，前者は「ジャパン・フェスティバル 1991」の一環として，後者は東日本大震災を祈念して，それぞれ日本人によって作庭されたものである。一方，日英博覧会跡地の Hammersmith Park（面積割合は 45.95%）（図 4－11）では修復された庭園と新たな作庭が認められた。

表 4－4　現地調査をおこなった 12 庭園の概要

	カテゴリー	作庭年	庭園名	Historic England	全敷地面積 (ha)	日本庭園面積 (㎡)	日本庭園面積割合 (%)	形式
A	黎明期	1906	Cheynes (Cottered)	グレードⅡ*	2.04	7289	35.73	stroll & dry
B	黎明期	1920	Compton Acres	グレードⅡ*	5.85	2217	3.79	stroll
C	黎明期	1901	Fanhams Hall	グレードⅡ	15.76	34217	21.71	stroll
D	黎明期	1900	Gunnersbury Park	グレードⅡ グレードⅡ*	74.17	1817	0.24	stroll
E	黎明期	1948	Silver End, Memorial Gardens		1.17	1198	10.23	stroll
F	黎明期	1910	Tatton Park	グレードⅡ*	465.48	5462	0.11	stroll
G	近代期	2010 (1910)	Hammersmith Park		1.70	7812	45.95	stroll & dry
H	近代期	1991 2001 (1903)	Holland Park, The Kyoto Garden	グレードⅡ	21.56	1345	0.62	stroll & dry
I	近代期	2012	Holland Park, The Fukushima Memorial Garden	グレードⅡ	21.56	344	0.15	others
J	近代期	2001 (1911)	Royal Botanic Gardens, Kew, Japanese Landscape	グレードⅠ グレードⅡ	268.73	5701	0.21	stroll & dry
K	近代期	2001	SOAS, Roof Garden		0.30	177	5.92	dry
L	近代期	1994	Zen Garden, Three Wheels Temple		0.05	190	38.03	dry

※作庭年の( )は初期（黎明期）庭園の作庭年

※各庭園の敷地面積は，筆者が現地で確認した日本庭園のエリアをもとにして，QGIS から全敷地面積と日本庭園面積を算出したものである。図 4－5～15 では，日本庭園のエリアを黄色で敷地全体の境界を赤線で示した。

© Open Street Map contributors

表 4－5　現地調査をおこなった 12 庭園で確認された主要構成要素

	構成要素/庭園名	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	計
1	池	●	●	●	●	●	●	●	●					8
2	中島	●		●	●	●	●		●		●			7
3	流れ	●	●	●	●		●	●	●					7
4	滝	●	●	●			●	●	●					6
5	築山	●	●	●		●	●	●	●	●	●			9
6	枯山水	●						●	●		●	●	●	6
7	園路	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		11
8	飛石・板石	●	●	●	○	●	●	●	●		●	●	●	11
9	橋	●	●	●		●	●	●	●		●			8
10	四阿・茶室	●	●	●			●	●					●	6
11	囲い（地所を区別）	●	●		●		●	●	●	●			●	8
12	生垣	●	●	●	●	●	●	●	●	●			●	10
13	中くぐり門	●	●		●		●	●			●			6
14	石灯篭	●	●	●	○	●	●	●	●	●	●			10
15	蹲踞・手水鉢	●	●						●		●	●	●	6
	計	15	13	11	9	8	13	13	13	5	9	4	6	

※●該当あり，○古写真記載あり

A) Cheynes (Cottered), B) Compton Acres, C) Fanhams Hall, D) Gunnersbury Park Japanese Garden, E) Silver End Memorial Gardens, F) Tatton Park, G) Hammersmith Park, H) Holland Park (The Kyoto Garden), I) Holland Park (The Fukushima Memorial Garden), J) Royal Botanic Gardens Kew (Japanese Landscape), K) SOAS Roof Garden, L) Zen Garden

図 4－5　A)Cheynes(Cottered)(黎明期)

(2019 年 7 月 20 日撮影)

図 4－6　B)Compton Acres(黎明期)

(2019 年 7 月 24 日撮影)

図 4－7　C)Fanhams Hall[31](黎明期)

(2019 年 7 月 20 日撮影)

図 4－8　D)Gunnersbury Park(黎明期)

(2019 年 7 月 22 日撮影)

図 4－9　E)Silver End, Memorial Gardens(黎明期)

(2019 年 7 月 19 日撮影)

図 4－10　F)Tatton Park(黎明期)

(2019 年 7 月 27 日撮影)

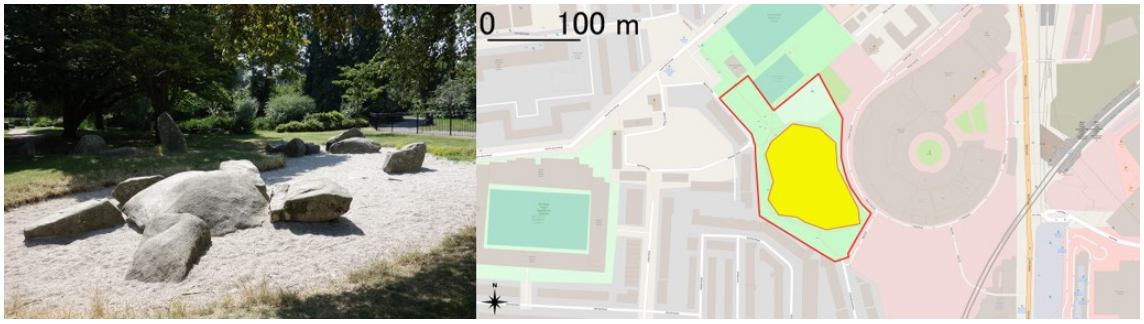


図 4－11　G)Hammersmith Park（近代期）

（2019 年 7 月 25 日撮影）

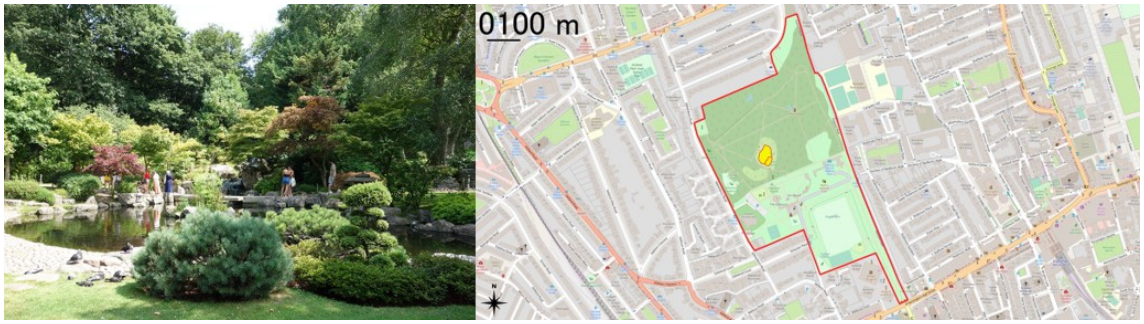


図 4－12　H)I)Holland Park（近代期）

H) The Kyoto Garden, I) The Fukushima Memorial Garden

（2019 年 7 月 25 日撮影）

図 4－13　J)Japanese Landscape, Royal Botanic Gardens, Kew（近代期）

（2019 年 7 月 28 日撮影）

図 4－14　K)SOAS Roof Garden(近代期)

(2019 年 7 月 18 日撮影)

図 4－15　L)Zen Garden, Three Wheels Temple(近代期)

(2019 年 7 月 22 日撮影)

表 4－6　管理方針のヒアリングの概要

	質問事項/対象者	A：英国人オーナー	B：庭園管理会社	C：日本庭園研究者	D：日本人僧侶
1	どのようなことを基準に管理とメンテナンスをおこなっているか	英国人の専門家に精神性を尋ね，日本庭園の景観を作出	管理スタッフレベルの考慮	オリジナルデザインの意図の理解によって，日本観を表現	相互理解と文化，教養を深める
2	日本庭園に不可欠な要素とは	適材適所	日本文化の理解	間とデザイン技術	異質の調和
3	作庭時と現況との違いは何か	歴史的景観を守り，新しいデザインに移行	変化の中で違ったデザイナーと違った流行が存在	植物は変化，アイテムは常に動く	周囲との関係性
4	日本と英国の日本庭園との違い	違いは少ない	気候の違い，各人が庭について違った期待を持つ	各国で価値が違う，満たされ方も違う	イギリス的デザインの導入
5	英国に日本庭園は必要か	必要ないかもしれない，人々の文化の学習の場	必要ないかもしれない，公共は日本文化と庭園に興味がある	文化を共有でき，各国の相互理解に必要	日英の文化交流の一助になる
6	日本庭園を管理するには特別な技術を持った管理者は必要か	正確な日本庭園管理のために管理者は技術を学ぶ必要	特別な管理者が必要	高い技術を持つ庭師とそのセンスが必要	メンテナンスは難しい，責任ある管理が必要
7	庭園管理に日本人庭師は必要か	必要とは思わない，正しい仕事の姿勢を学ぶことが必要	日本人庭師のトレーナーが必要	必要とは思わない，指導してくれるトレーナーが必要	本当の理解が必要，和の精神が伝わるのは簡単ではない
8	英国日本庭園の起源はいつ頃と考えるか	1905年以降，初代オーナーのMr. Goode	19世紀	1870-80's	浮世絵など異質な美術の導入以降
9	なぜ英国人が日本庭園に興味を持ったか	初代オーナーが旅行に行き経験と思い出を庭に表現したため	両国の貿易によって，富裕層のオーナーが庭に彩を添えたため	ステイタスと旅の想い出，日本アイテムの購入のため	日本の美の再現を目的としたため

※庭園管理会社の責任者と同社所属ガーデナーからの聞き取りは B にまとめて記載した。

4-3-2-2　庭園管理に関するヒアリング調査

ヒアリング調査では，英国の日本庭園の管理方針と認識について情報収集をおこなった。質問は 9 項目であり，結果を統合すると以下のようなことが明らかになった（表 4－6）。①管理とメンテナンスの基準に関しては，管理するスタッフの技術レベルを考慮し，オリジナルデザインの意図を理解することによって，日本観を身に付けることが重要である。②庭園に不可欠な要素は，日本文化の理解と，異なる考え方の調和をはかることである。③作庭時と現行の庭園を比較すると，歴史的景観を守り新しいデザインに移行することで，周囲との関係性が生まれている。④日本と英国の日本庭園の違いについては，気候の違いと庭に対する異なる期待に起因するといえる。⑤英国での日本庭園の必要性については，文化を共有する両国の相互理解が生まれることから，必要である。⑥特別な技術を持った管理者は，必要である。⑦日本人庭師は必要とは思わないが，トレーナーなどを通して正しい仕事の姿勢を学ぶ必要がある。⑧英国日本庭園の起源は，おおよそ 19 世紀から 20 世紀前半である。⑨英国人がはじめに日本庭園に興味を持った理由は，ステイタスの誇示と旅の想い出の表現である。

以上のことから，維持管理面の上では技術を日本人から学び管理技術の向上を希望しているが，管理者としては日本文化の理解と異文化の考え方の調和が必要と考えており，日本人の庭師が必要と考える回答者はいなかった。また日本庭園は，公共の場として文化交流や相互理解として必要であると考えていることが示唆された。

4－4　考察

4-4-1　英国 England の黎明期に作庭された日本庭園の特徴

黎明期には，プラントハンターなどが，日本から持ち帰った植物とともに日本文化の紹介をおこない，多くの裕福な人たちや，日本旅行を経験した人たちに刺激を与えたと推察されている [17]。調査対象地の敷地環境を黎明期と近代期で比較すると，黎明期の 6 庭園はすべてが全体で 1ha 以上の庭園の中に確認された。日本庭園は広大な敷地を持つ富裕層による庭園の一部であったと考えられる。Cheynes（Cottered）と Fanhams Hall（表 4－4）では，敷地内での日本庭園の割合が高く，現在も当時の姿を残している。このことは，ヒアリング調査でも英国人が日本庭園に興味を持った理由としてあげた，「旅行記の想い出やステイタスの誇示を目的として具現化し，英国独自の日本庭園をつくりだした」という結果と合致する。

現存する黎明期の庭園（15 庭園）の中では，14 庭園で広大な敷地の自然景観に日本庭園を組み入れ散策する Stroll の形式がみられた。また，この時代は日本庭園の知識が充分になかったために，象徴的な要素が多く含まれた[18]。たとえば庭園内の富士山の形をした築山などは，典型的な例だといえる。今回の現地調査においては，黎明期の庭園のうち，日本庭園の面積割合（表 4－4）が高い Cheynes（Cottered）（35.73%）と Fanhams Hall（21.71%）の 2 庭園で，Fuji-yama の築山を確認した。飛田[25]は，「江戸の庭園は特に富士山との関係が深く，庭園をつくる際に富士山を眺望できるようにかなり工夫した」，「富士講の人びとが富士山まで行かなくても日常参拝できる場所を望んだことから，寺社の境内に富士山形の山を築造することが江戸において流行するようになった」と考察している。また時代背景から推察すると，日本開国後のプラントハンターなどによる日本庭園の紹介記事[03]や，コンドルの『Landscape Gardening in Japan』[04]での大名庭園や富士山についての記述があることから，庭園要素としての富士山が英国にも伝わり，定着したと考えられる。白幡[05]は，「海外の日本庭園は，とくに戦前においては，大名庭園に用いられた手法にのっとったものが多かった」と述べ，大名庭園との関わりについて言及している。また，『Gardeners' Chronicle』 The Lecture, Japanese Horticulture, 1905[26]では，「日本の新しい生活様式の変化により，徳川将軍の美しい庭園が容赦なく破壊された」とする，大名庭園についての記述が確認できる。また，白幡[05]は「万国博覧会に出品された日本庭園は，大名庭園の意匠がずいぶん採用されている」と言及している。1910 年の日英博覧会庭園で作庭された「平和園」（一部現存）と「浮島園」の記録[11]では，池泉と反橋，築山などのデザインの存在が記され，日英博覧会の小沢の設計説明書[09]には，甲園・山水造り（築山泉水造）と乙園・平地造り（平庭造り）と記載されている。しかし，今回の調査で確認した日英博覧会庭園跡の現存する Hammersmith Park （面積割合 45.95%）（表 4－4）からは，大名庭園の意匠は確認できなかった。また，黎明期の庭園の中で日本庭園の面積割合（表 4－4）が低かった Compton Acres（3.79%），Gunnersbury Park Japanese Garden（0.24%），さらに Tatton Park（0.11%）では，日本庭園以外の様式の庭園が大面積を占め，その中に日本庭園が一要素として取り込まれていた。以上のことから，Stroll の形式においては，日本庭園を回遊するタイプと，庭園全体の中に日本庭園を含む回遊コースがある庭園とに分かれていたと考えられた。

4-4-2　現地調査からみた英国の日本庭園の現状

England では，黎明期の庭園は，ロンドン周辺，リバプール周辺，およびサウサンプトン周辺に集まっていることが確認できた（図 4－3）。近代期の時代に入ると，枯山水形式の現代的庭園デザインの登場が認められた。Danescourt Cemetery 墓地(1996)や SOAS Roof Garden(2001)，さらには Momotaro Garden(2004)などは，枯山水を基本に作庭されている（表 4－1）。

鈴木[27]は，「1960 年代，枯山水は日本式庭園の重要な形式の一つとして認識され始め，その様式説明に枯山水の用語使用が一般化している」，「石庭は，建築のモダニズムに適合した空間形態をもち，加工石材の利用ができ，現代建築によくマッチした。管理も容易である枯山水（石庭）は，海外のあちこちで造形，作庭され現在にいたる」と述べている。また，丹羽[28]は，「現實の水を使つたのでは，到底達し得ない一つの藝術的境地を，枯山水なるが故にこそ作り出す」と述べているが，この潮流は，英国でも同様であったと考えられる。これらは，海外の日本庭園の多くが，国際交流のシンボルや博覧会，姉妹都市関係締結などを契機としてつくられ文化的交流の場として活用することを目的としていることと無縁ではないであろう。このような風潮の中で，国土交通省の施策である海外の日本庭園再生プロジェクト[29]では，海外にある日本庭園は日本の文化や魅力を伝える拠点であるが，一方で，造園後，適切な維持管理がおこなわれていない庭園もみられる，としている。また，海外における日本庭園が適切に維持管理されることにより，対日理解の促進や，さらには造園業界の海外展開が図られるとしている。その一方で，現状では海外の日本庭園には，適切な維持管理や技術提供がおこなわれておらず，修復や樹木の剪定技術の伝授などの支援が必要なものが一定程度存在しているとされている。また，ヒアリング調査でもあげられた「メンテナンスが難しい」，「日本人庭師は必要と思わないが，指導してくれるトレーナーが必要」などといった，日本庭園の管理の難しさに関する指摘が見受けられる中で，一般的に枯山水には，庭園管理の安易さや狭い敷地での作庭が可能であるといった特徴もあり，Dry の庭園数が増加していると考えられる。今回の調査では，作庭の時代を問わず Historic England[19]に文化遺産として登録され，保護されている日本庭園が一定数あることが確認されたことは英国において日本庭園が一つの庭園文化として根付いていることを証明するものであると言える。また，改修工事を加えている庭園や Fanhams Hall のようにホテル内の庭園として活用している例[30]もみられたことも英

国の日本庭園が一つの庭園様式として定着していることを示唆するものであるといえる。

4－5　本章のまとめ

本章における研究の結果，英国の日本庭園の形式には，主として取り入れられた形式の違いから 2 つの年代で異なる特徴が認められた。

日本庭園の面積の推移を見ると，英国では黎明期には，「囲われた庭園(Garden)」ではなく，周辺の景観と引き立て合うような「造園(Landscape)」が求められたといえる。これは，イギリス風景式庭園の自然を取り入れるという概念に原点があると考えられ，日本庭園とは異なった概念であるが，大名庭園の歩いて楽しむ Stroll とは大きな関係性があるものと考えられる。調査地の 1 つの Fanhams Hall では，「日本庭園は人工の池と丘，小さな Fuji-yama，そして木々と低木，そして茶室は Fox Lake の近くに建てられた[30]」と記載され，現在も広大な敷地はホテル活用がされている。

近代期には，Stroll, すなわち歩くことや広がりを求めた大規模な池泉回遊式庭園が少なくなり，小規模で容易に作庭が可能で，管理も比較的容易な枯山水庭園が増加したと考えられる。

日本庭園は世界中にあり，歴史的背景・気候や立地条件もそれぞれ違っている。しかし，その中でも日本庭園の景石，石灯篭，池などの添景は重要な構成要素であり，英国で作庭された日本庭園においても庭園の添景物を取り入れた庭園が取り入れられていた。今回の調査時には Holland Park の The Kyoto Garden と The Fukushima Memorial Garden の隣接地には，1900 年初めに作庭された初期 Japanese Garden の遺構が鬱蒼と茂った草むらの中に流れの石組とともに姿を残していた。

『The Pleasure Grounds of Holland House 』[31] では，「日本庭園は 1900 年代初め，大変流行し，知識は漠然としていたが，もし庭園に，水，2, 3 個の岩，異国情緒のある植物があれば日本庭園と呼ばれていた」と記載され，さらに 1903 年の写真を見ると，芝生敷きにユッカやタケと一緒に石灯籠が配置されていたことが確認できる。このような歴史がある庭園も月日とともに荒廃し，遺構がありながらも十分な措置が取られていないものがあることも今回改めて確認された。Gunnersbury Park Japanese Garden においても『Gardeners' Chronicle』 The Japanese Garden Gunnersbury House, 1902[32] では，「この日本庭園を見たら訪問者は物凄く感動す

る」と当時の日本庭園を絶賛している。しかし，現状は流れの石組の遺構とエンジュと中島が残っているだけで，到底日本庭園とは思えない姿となっていた。このように，遺構が確認できる場合は，作庭当時の設計やその意図を明らかにし，英国の日本庭園の起源と歴史の継承に役立てることが，今後の課題と言える。

今後，海外の日本庭園を維持管理していく上では，各庭園の歴史的背景と文化的価値を見出しながら現状評価や特性を抽出する調査は不可欠であり，重要な研究になると考えられる。適切な管理がおこなわれない庭園は，時代の流れの中で消滅する恐れもあり，一刻も早く正確なリストの作成と存続方法の検討，日本側からの管理者に向けた情報共有が必要であると考える。

補注及び引用文献

01) 岡崎文彬（1999）：ヨーロッパの造園：鹿島出版会 SD(43), 209, 236

02) 中村一・尼崎博正共著（2001）:風景をつくる：昭和堂, 123-124

03) 熊倉早苗・柴田昌三（2019）：英国園芸雑誌ガーデナーズ・クロニクルからみた日本庭園に関する記事内容の推移: ランドスケープ研究（オンライン論文集）(12), 45-49

04) Josiah Conder (1893)：Landscape Gardening in Japan：Tokyo, 161pp,148-149

05) 白幡洋三郎（2020）：大名庭園江戸の饗宴：ちくま学芸文庫, 270-271

06) 劉銘・下村彰男・中村和彦・山本清龍（2019）：海外の日本庭園に対する違和感にみる日本庭園らしさの認識構造：環境情報科学学術研究論文集(33),19-24

07) 片平幸（2010）：往還する日本庭園の文化史 - ジョサイア・コンドルの日本庭園論の考察を中心に - ：桃山学院大学総合研究所紀要 35(2),33-53

08) 楫西貞雄（1948）：海外萬國博覽會に於ける日本庭園：造園雑誌 12(1), 4-8

09) 佐藤昌（1986）：外国における日本庭園 - 初期の造園 - ：造園雑誌 49(3), 167-188

10) 鈴木誠（2006）:海外につくられた日本庭園の系譜:ランドスケープ研究 69(3),192-198

11) 大出英子（2008）：1910 年の日英博覧会日本庭園の歴史と現状について：目白大学短期大学部研究紀要 45, 27-41

12) 金鍾龍・朴仁煥（2017）：大韓民国内に造成された日本式庭園の特性研究：ランドスケープ研究（オンライン論文集）(10), 134-141

13) 趙啓蒙・呂文静・鄧舸・真田張格瑋・服部勉・鈴木誠(2018): 現代中国の日本庭園の現況・利用・評価に関する研究：ランドスケープ研究 81(5), 461-466

14) 東京農業大学：2020 海外の日本庭園，庭園一覧：
< http://www.nodaigarden.jp/gardens-all/>, 2020 更新, 2020.11.16 参照

15) Japanese Garden Society, Garden Visits：
<https://www.jgs.org.uk/what-we-do/garden-visits/>, 2020 更新, 2020.11.16 参照

16) 福原成雄（2007）：日本庭園を世界で作る：学芸出版社, 187-189

17) Jill Raggett (2006)：Early Japanese-style Gardens in Britain – an Overview Shakkei 13(2), 6-9

18) Jill Raggett (2011) : Gardens Speaking with a Japanese Accent : Shakkei 17(4),4-5

19) Historic England, Search the List :
< https://historicengland.org.uk/listing/the-list/ >,2020.11.10 参照

20) 森蘊（1962）：Typical Japanese Gardens：Shibata Publishing, 23-98

21) 小野健吉・W.エドワーズ（2001）： 日本庭園用語辞典 ： 関西プロセス, 15, 20

22) 久末弥生（2017）: イギリスの考古遺産法制と都市計画 - イングリッシュ・ヘリテッジに着目して - ：創造都市研究 e 12(1),1-8

23) Gardeners' Chronicle（1906）: Purnell & Sons Ltd, 104

24) Gunnersbury Park and the Rothschilds（1993）: Heritage Publications London Borough of Hounslow, 34, 43-44

25) 飛田範夫（1999）: 日本庭園と風景：学芸出版社, 120-124, 184

26) Gardeners' Chronicle（1905）: Purnell & Sons Ltd, 302

27) 鈴木誠（1998）: ランドスケープ・デザインにおける「枯山水」の考察：ランドスケープ研究 61(5), 413-416

28) 丹羽鼎三（1943）: 日本文化としての庭園：造園雑誌 10(1), 19-26

29) 海外日本庭園再生プロジェクト：国土交通省ホームページ
<https://www.mlit.go.jp/report/press/toshi10_hh_000301.html>,2020.02.14 参照

30) Fanhams Hall (1901) : Japanese gardens, Mr. Suzuki 作庭
Fanhams Hall an exclusive venue, History of Fanhams Hall
（ホテルパンフレット参照）

31) Sally Miller (2012) : The Pleasure Grounds of Holland House : Scotforth Books, 10-11, 78-79（写真参照）

32) Gardeners' Chronicle（1902）: Purnell & Sons Ltd, 228

第 5 章　総合考察

5－1　各章の研究成果

本論文の第 2 章から第 4 章では，英国の日本庭園に関して，「英国の園芸雑誌ガーデナーズ・クロニクルからみた日本庭園に関する記事内容の推移」，「日本庭園に関心がある英国人と日本人の日本庭園に対する印象の比較」および「英国 England における 19 世紀後半から現在に至る日本庭園変遷の過程と特徴」についてそれぞれ解析し，考察を加えた。

第 2 章では，英国の園芸雑誌『Gardeners' Chronicle』について創刊年である 1841 年から 1967 年の 127 年間のすべての掲載記事を対象として，日本関連，すなわち Japan，Japanese，Japone を含むタイトルの記事（347 件）を抽出し，各年の出現数について整理をおこなった。それらの記事は，重複を含めて，「植物関係」283 記事，「景観」15 記事，「日本庭園」46 記事，「日本旅行記」51 記事および「その他」106 記事の 5 つの属性に分類された。さらに，「日本庭園」に分類された全ての記事を対象として，掲載年，記事タイトル，およびその内容を整理し，「日本庭園」記事の内容を「寺院庭園」，「日本庭園美」，「英国の日本庭園」，「盆栽」，「レクチャー」，「海外の話題」，「日英博覧会」，「日本文化・素材」，「日本人の精神性」および「日本庭園ツアー」の 10 の属性に分類した。また，それらに基づいて，英国における日本庭園に対する意識がどのように変化してきたのかを考察した。

その結果，『Gardeners' Chronicle』の掲載記事の 1960 年代までの 130 年近い期間の推移から分析された英国における日本庭園に対するイメージは，まず，日本の珍種や有用植物，文化からの影響によって形成されていったことが認められた。この時代には，日本庭園の構成要素や，庭園形式に関する系統だった情報が伝わりにくく，庭園様式の具体的なイメージが形成できなかったと考えられる。一方，1910 年の日英博覧会以降は，時代の流れとともに情報伝達方法が多様化し，社会の急速な変化にともない情報媒体も変容したこと，さらには，実際に現地に訪れることが容易になったことから，日本庭園に関する情報も多様化していったことが考察された。

第 3 章では，英国人と日本人が日本庭園から受ける印象の比較をおこなうために写

真を中心とするアンケート調査をおこない，英国人の日本庭園に対する理解や，日本庭園に対して抱いているイメージを抽出するためにおこなった統計的な解析を通して，現代における英国の日本庭園のあり方について考察した。具体的には，日本庭園に関心がある，もしくは日本庭園の知識はないが植物に関心がある英国人を対象にアンケート調査を実施し，英国人が日本庭園をどのように捉え，どのような感性で日本庭園をイメージしているのかを把握することを試みた。さらに，日本人の造園関係者に対しておこなった同じ調査結果との比較によりその差異を分析し，英国に日本庭園が長い歴史を持って存在する意味を考察した。

6 種の植物に関する分析では，英国と日本の間には国による違いは認められず，違いは日本庭園に関する知識の有無に起因することが示唆された。マツ，ユリおよびキクについては，日本庭園について知識がある日英グループと英国の知識が十分でないグループ間で有意差があることが明らかになった。知識がある日英の 2 グループでは，マツが日本庭園の要素として強く感じられ，知識が十分でないグループではそれが弱いことが示された。知識が十分でないグループでは，日本庭園に対してキクのイメージが強く，タケがそれに続いた。

12 種の空間要素に関する分析では，山，白砂，池の 3 要素で 3 群間の回答の両極対比結果に大きな差異が確認された。日本庭園に対しては，英国人の知識があるグループでは山のイメージが強いのに対して，日本の造園関係者では白砂と池の写真から連想できると考えられる借景のイメージが強かった。

植物と空間要素に関する 3 群間での DSCF 多重比較を用いた分析では，植物種についてはマツとキクに加えてユリで有意差（$p<0.01$）が確認された。この結果からは，日本庭園の知識があるグループの意識と英国園芸雑誌『Gardeners' Chronicle』で抽出された主な日本植物としてユリのイメージが強いと考えられる植物に興味を持つグループの意識との間に共通した要素があることが考えられた。空間要素に関しては，山においてすべての群の間で有意差（$p<0.01$）が確認され，各グループで異なる認識があることが示唆された。

日本庭園の「イメージ」に関しては，日本人では「静」および「自然」が上位を占め，さらに抽象的なあるいは具象的なイメージ語句が続いた一方で，英国人では「平穏」および「平和」があげられ，続いて具象的なイメージ語句が示された。

以上から，植物に関する分析では，英国と日本の間には大きな違いはなく，日本庭

園に関する知識の有無に起因する違いがあることが示唆された。自然風景や庭園要素に関する分析では, 文化的背景の違いから, 英国と日本の差異が現れたと考えられる。一方，英国人の日本庭園空間の捉え方に関しては，日本庭園に関する知識の有無による大きな差異はなく，英国人が共通のイメージを持っていることが示された。

第 4 章では，英国の日本庭園の現状と課題および管理の在り方を考察することを目的として，英国における日本庭園について作庭後現在に至るまでの変遷を解明するために，抽出した庭園に関する情報収集と一部庭園における現地調査の結果について解析した。特に England に対象を絞り，まず，文献調査をおこない，調査対象とする庭園と作庭年を把握するために，総合的な庭園リストを作成した。次いで抽出された 41 庭園を，作庭年代によって Early Japanese-style Garden （1850 年～1950 年の作庭，黎明期）と Recent Japanese-style Garden （1950 年以降の作庭，近代期）の 2 つのカテゴリーに分類した。さらに，12 庭園を対象にして現地調査をおこない，敷地全体における日本庭園の位置や内部の状況の記録・観察をおこない，庭園形式および作庭年代による分類と日本庭園要素の存在の有無や配置について考察した。

その結果，英国の日本庭園の形式は，作庭年代によって主な庭園形式が異なっており，黎明期には「回遊式庭園」が，近代期には「枯山水庭園」が特徴となることが明らかになった。

すなわち，黎明期には，「囲われた庭園(Garden)」ではなく，周辺の景観や庭園要素と引き立て合うような「造園(Landscape)」が求められたと考えられた。これは，イギリス風景式庭園の自然を取り入れるという概念に原点があるためであり，日本庭園とは異なった概念である一方で，大名庭園の歩いて楽しむという庭園利用方法と大きな関係性があるものと考えられた。調査地のうち，現在も広大な敷地内に日本庭園が存在する黎明期作庭の Cheynes (Cottered) と Fanhams Hall では，Fuji-yama と呼ばれる大きな築山が確認され，英国に最初に日本庭園が紹介された時期の日本の回遊式庭園の特徴が伝えられたことが示唆された。

一方，近代期には，大規模な回遊式庭園が少なくなり，小規模で容易に作庭が可能でかつ，管理も比較的しやすい枯山水庭園が増加したことが考察された。

5－2　英国の日本庭園を維持管理するために求められること

5-2-1　英国において日本庭園が根付いていった過程

本研究で得られた英国の日本庭園の変遷の過程と特徴を考察する上では，まず最初の段階として，江戸に滞在し大名庭園に触れることにより日本の庭園文化に感銘を受けた英国人の存在が挙げられる。日本には室町時代から枯山水庭園は存在するが，江戸末期から明治初期にかけては外国人の行動範囲に制限があり自由に行動できなかったこと，プラントハンター等が植物調達等を中心に行動していたこともあり，枯山水庭園には接触する機会は少なかったと考えられる。このことは，当時の園芸雑誌に枯山水庭園に関する記載がみられないことからも推定できる。

日本から帰国した英国人や，雑誌等で情報を得た英国人は，それらの感動や写真などの資料に基づいて，英国特有の回遊式日本庭園を作庭するようになったと考えられる。当時，持ち込まれた日本庭園に関する情報は多くが江戸に所在する大名庭園から得られたものであり，そのことから富士山を模した築山や鳥居が庭園要素として理解された。これが英国の黎明期の日本庭園の特徴であると考えられる。

その過程で，この時期の日本庭園作庭の基盤となったさまざまな資材が輸入された。すなわち，日本から英国へは植物資材の輸出と同時に，日本庭園の景物として石灯篭や庭園資材も輸出された。英国の回遊式庭園が日本と異なるところは，広大な敷地に違ったタイプの庭園が混在し回遊する形式になっていることである。英国の回遊式庭園では，日本庭園は回遊する種々のタイプの庭園の一つであり，独立した庭園としては取り扱っていなかったと考えられる。現在に伝えられている黎明期の庭園においてもこのことは理解できる。また，本研究では，日本庭園の知識に加えて，ユリなどのように日本庭園とは直接の関係は少ないものの，当時日本から導入された植物についてもその影響が現在に伝えられていることが示唆されたことも重要である。

第二次世界大戦後の近代期に入ると，日本を訪れることが容易になり，情報も多様な形態で大量に得られるようになったことに起因して，庭園の普及形態が変化したことが考えられる。すなわち，英国における枯山水庭園形式の増加はそのことを反映したものであると考えられる。また，近代期の日本庭園の作庭は，姉妹都市間や親善などを契機とした文化紹介の形で新たに拡がっていったということができる。このように英国の日本庭園は，黎明期と近代期では違った特徴を持っていると考えられ，それぞれの時代背景により英国人の日本庭園観や管理に関する考え方も変化してきたこと

が明らかになった。

以上のような知見に基づいて，以下では 2 つの視点から現在の英国の日本庭園について，文化継承の空間としての価値とその特性を維持するための管理について考察する。

5-2-2　現存する日本庭園の歴史的背景と文化的価値を見出すことの重要性

本研究の第 2 章では，英国の園芸雑誌記事の解析を通して，英国での日本庭園に対するイメージが，日本の珍種や有用植物，文化面からの影響を受けて形成されていったことが明らかになった。さらに，第 3 章では，英国人の日本庭園に対する理解や，日本庭園に対して抱いているイメージの客観的な把握と現代における日本庭園のあり方について考察をおこなった。第 4 章の現地でのヒアリング調査からは，英国のみならず海外の日本庭園修復にあたっては，それぞれの国の歴史的背景や庭園文化を理解した上での計画が必要であり，庭園管理者は技術を学び日本文化を理解した上で，日本とは異なる考え方と調和を配慮することが必要であることが示唆された。そのためには，庭園の手入れに関しては，日本からの技術指導による管理スタッフの技術向上のための支援が必要であると考えられる。また，英国においては日本庭園からのインスピレーションを受けて形成された文化を尊重することが不可欠で，継続的な日本からの支援をおこなうことが重要な配慮事項であると考えられ，日英両国の役割の明確化が必要であると考えられた。

第 4 章において調査対象とした英国 England では，日本庭園の現況・利用・評価や構成要素に関する研究調査は少なく，特に現存数や庭園タイプと特徴，地域的分布の特性や現状の把握はほとんどおこなわれていなかった。一方，黎明期，近代期を問わず英国に作庭された庭園については，イングランド歴史的建造物・記念物委員会によって Historic England に登録されているものが少なからずあった。19 世紀後半以降に英国で作庭された日本庭園が，当初のコンセプトが十分に伝えられないままに変容している事例が認められることを考えると，その歴史的背景を含めて現状を記録することは急務であると考えられる。

以上から，海外の日本庭園を維持管理していく上では，まず，現地の歴史的背景と文化的価値を見出しながら，現状の価値や特徴を抽出する調査は大変重要であると考えられる。適切な管理がおこなわれない庭園は，時代の流れの中で消滅する恐れもあ

り，一刻も早く正確なリストの作成と存続方法の検討，日本側からの現地管理者に向けた指導が必要であると考えられ，今後，維持管理の方向性を両国で議論する必要性は大きい。

5-2-3　現地調査に基づく適切な管理と指導の重要性

海外の日本庭園の多くは，国際交流のシンボルとして，あるいは博覧会，姉妹都市関係締結などを契機として文化的交流の場として作庭され，活用されている。国土交通省の海外日本庭園再生プロジェクトの概要[01]の中では，「平成 29 年度から 5 年間で 50 箇所程度の庭園修復を支援する。①修復のモデルとなる海外日本庭園を選定，②修復計画の作成・修復事業の実施（日本からの造園技術者の派遣等），③マニュアルの整備等とあわせ，海外日本庭園修復支援体制を構築。日本庭園の修復に係るモデル事業の実施，外国人技術者でも庭園の維持管理を適切に行うことのできる分かりやすい維持管理マニュアルの整備を通じ，海外における日本庭園の修復要望に応えていくための体制の構築を図る」と記されている。

一方で，第 4 章のヒアリング調査においては，「文化を共有する相互理解が重要」や「日本人庭師は必要と思わないが，指導してくれるトレーナーが必要」といった回答があった。また，日本と英国の日本庭園の違いについては，「気候の違いがあるほか，それぞれが庭について違った期待を持っている」あるいは「各国で価値が違い，満たされ方も違う」などの回答があったことから，日本から示される画一的な維持管理マニュアルが各国で使える共通マニュアルになるかは疑問であり，各国・各地域に合った適切な管理を提案し，そのための技術的指導をおこなうことが必要であることが示唆された。

また，現地の現状を効果的に把握するためには，第 4 章でおこなったインターネットによる庭園の基本情報の収集や，インターネット上の衛星画像による位置情報の取得などは，特に海外の状況を知るための現地調査の事前調査として有効であると考えられた。これらの情報を踏まえた上で，現地調査をおこない意思疎通を深めることで，適切な管理と指導が実行できると考えられる。さらに，派遣された日本人専門家がその庭園に関する歴史的背景を理解した上で対象とする日本庭園の特性と維持管理方法を検討し，存続していくことに大きな意味があり，そのことは，現地の人々が持つ文化的価値観の尊重やコミュニティの形成に繋がると考えられる。

第 3 章の日本庭園に関する印象比較からも，英国人の日本庭園に対する理解や，イメージの把握の結果，英国内で英国独自のスタイルとして日本庭園が作庭され，また日本文化の伝来の証としても保存が必要であることが示唆されたことは重要である。

日本人が考える日本庭園は,「様式論」から導き出される時代性と様式[02],「景観論」から説明される季節感や自然景観[03]，さらに，わび・さびが導き出す「時間美」[04]や歴史性からの精神作用が統合されて日本庭園美として具現化される。これらは，日本人が日本庭園の歴史的背景を理解して庭園を鑑賞し，その上でステレオタイプとして捉えている姿だと理解できる。しかし，これらを海外の日本庭園における日本庭園の特質として結びつけるのは難しい。例えば，片平[05]はコンドル[06]が,「「真行草」や石組みなどの理論も重要であるが，それと同様に，庭の施主の社会性や作庭する土地の本来の形状や雰囲気が作庭にとってまた重要な原理であると強調している」ことに言及している。また、Raggett[07]は,「ほとんどの Japanese-style Garden は，日本との関係を記念するものだ。」と考察している。これらの研究は，日本人と英国人の日本庭園の捉え方には差異があることを示している。そして，これらの知見は，それぞれの日本庭園の文化的背景と現地調査を踏まえた上での維持管理の提案が必要であることを示唆している。

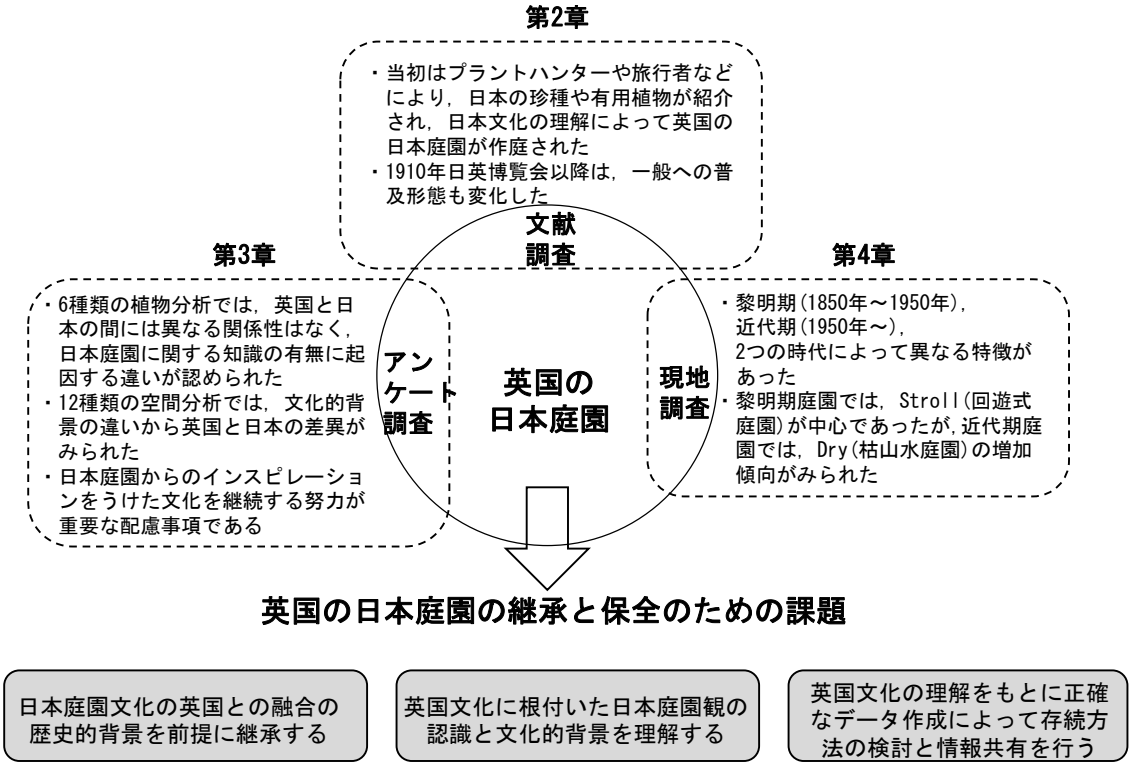


図５－１　本研究のまとめ

５－３　本研究のまとめと今後の課題

海外の日本庭園の多くは，博覧会や姉妹都市関係締結を契機にしたものである。特に第二次世界大戦後には，外国の都市との提携が一つの運動となり，相互の交流の記念として日本庭園が作庭されてきた。これらの日本庭園は，日本の自治体と海外の都市，地区との間の友好・親善がシンボル化されたものである。一方，本研究では英国の日本庭園の始まりは，19 世紀のプラントハンターや，旅行者による日本文化の紹介などに起源しており，万国博覧会や友好・親善締結を記念して作られた他国とは背景が異なっていることを明らかにした。しかし，これまで英国の日本庭園については，英国文化に日本庭園が根付いた歴史的背景や，社会状況についての分析がされないままであった。

本研究では英国 England の日本庭園について，黎明期と近代期を比較すると，用いられる庭園形式が変化したことが明らかになった。特に黎明期の庭園では，英国の日本庭園に対する理解は江戸後期から明治にかけて江戸を中心に多数存在した大名庭園

の回遊式庭園の形式によるものが中心であり，その理解に基づいて形成された英国独自の日本庭園観によって作庭されていたことが示唆された。このような庭園の特徴の日英の違いや作庭の目的を明確に理解することにより，これからの維持管理方法が明確に提示できると考えられる。すなわち，今後英国における日本庭園の修復においては，日英両国間の共通認識として，日本庭園文化の英国との融合の歴史的背景を理解した上で未来に継承すること，管理と技術指導においては，英国文化に根付いた日本庭園観の認識と文化的背景を理解すること，さらに，英国文化の歴史的背景と文化的価値を見出しながら正確なデータ作成と存続方法の検討およびそのための情報共有をおこなうこと，が重要であると考えられる。

今後，英国以外の海外の日本庭園を維持管理していく上でも，各国，各地域の歴史的背景と文化的価値を見出しながら，日本庭園の現状評価や特性を抽出する調査が不可欠であり重要な研究になると考えられる。海外の日本庭園は，時代の流れの中で消滅する恐れもあることから，一刻も早く正確なリストやデータセットの作成と存続方法の検討，日本側からの管理者に向けた情報共有が必要であると考えられる。そのため，対象とする日本庭園それぞれの課題を明確化し，海外の日本庭園の継承，維持管理の方向性を提案することが，今後の課題であると考えられる。

補注及び引用文献

01) 海外日本庭園再生プロジェクト：国土交通省ホームページ <https://www.mlit.go.jp/report/press/toshi10_hh_000301.html>,2020.02.14 参照

02) 進士五十八(1989)：日本庭園の特質に関する研究：造園雑誌 53(1),24-31

03) 中村一・尼崎博正共著（2001)：風景をつくる：昭和堂, 180-181

04) 進士五十八(1985)：日本庭園における Aging の美と意味について：造園雑誌 48(5),73-78

05) 片平幸(2010)： 往還する日本庭園の文化史 - ジョサイア・コンドルの日本庭園論の考察を中心に - ：桃山学院大学総合研究所紀 35(2),33-53

06) Josiah Conder（1893）: Landscape Gardening in Japan：Tokyo, 161pp

07) Jill Raggett (2006)：Early Japanese-style Gardens in Britain – an Overview：Shakkei 13(2), 6

謝辞

本研究を遂行し，博士論文をまとめるにあたって，京都大学大学院農学研究科森林科学専攻環境デザイン分野教授の柴田昌三先生には，指導教員として研究の進め方から博士論文のまとめ方まで，幅広い視野から終始懇切なご指導をいただきました。同分野准教授の深町加津枝先生には，折に触れて研究への助言をいただきました。また助教の貫名涼先生には，様々な視点からのご意見をいただき大変参考になりました。京都大学地球環境学堂の特定助教の劉文先生には，データ解析などにおいて貴重な助言をいただきました。そして，森林・人間関係学分野教授の神崎護先生と山地保全学分野教授の小杉賢一朗先生には本論文の副査として，貴重な助言をいただきました。心より厚くお礼申し上げます。

私が海外の日本庭園に興味を持ったきっかけは，京都大学名誉教授の中村一先生の造園学の研究に大変刺激を受け，英国の日本庭園を研究したいと思ったことでした。造園学の研究をはじめてからは，多くの方からご助力，助言をいただきました。京都芸術大学環境デザイン学科教授の尼﨑博正先生には，日本庭園の基礎知識と現地調査の大切さを教えていただき，また同分野教授の加藤友規先生には，庭園維持管理について教えていただくなど，折にふれ貴重な助言をいただきました。そして，人生の中で造園へ進むきっかけを作っていただいた九州大学名誉教授の杉本正美先生には，常に助言と温かいお力添えをいただきました。

調査の遂行にあたり綜芸舎の藪田夏秋氏にご助力いただきました。英国の Writtle University College の日本庭園研究者 Jill Raggett 先生には，英国の日本庭園の現状や助言および現地調査の同行，貴重な資料の提供など大変お世話になりました。そして，日本庭園再生プロジェクトに携わっておられる花豊造園㈱の山田拓広氏には，英国の日本庭園資料の提供やロンドンの造園管理会社を紹介していただきました。

アンケート調査を実施するにあたって，日本造園学会関西支部会員，Japanese Garden Society 会員および Hardy Plants Society, Essex 会員の皆様に多大なご協力をいただきました。また，ヒアリング調査では，Cottered House オーナー， idverde（造園管理会社）Ben Binnell 氏および Three Wheels Temple（三輪精舎）佐藤顕明僧侶にご協力いただきました。これらすべてのご協力がなければ調査は成り立ちませ

んでした。

農学研究科環境デザイン学研究室と地球環境学堂景観生態保全論研究室の学生諸氏には，研究に対して貴重なアドバイスや意見をいただきました。張平星氏には研究当初からさまざまな点でお世話になりました。また，小田龍聖氏と重原奈津子氏には，データ解析等において大変お世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。

ご縁があったすべての皆様のおかげを持ちまして，悔いのない充実した研究を貫徹することができたと思っております。本研究は，一人の力では到底成し遂げられないことでした。すべての皆様に，この場を借りて篤くお礼申し上げます。最後に，温かく見守ってくれた両親に，心から感謝の意を表します。